訂正增補 枕草子春曙抄 附紫式部

下

訂正増補枕草子春曙抄下巻目錄

巻九

○九十二段 ○九十三段 ○九十四段 ○九十五段 ○九十六段（以上五段は巻十にあり）
○九十七段四丁ウ ふたりがほなるもの
○九十八段六丁オ 風は
○九十九段七丁ウ 心にくき物
○百 一 段八丁オ 瀧は
○百 二 段八丁オ 浦は
○百 三 段八丁ウ 寺は
○百 四 段十丁オ 陀羅尼は
○百 五 段十丁オ あそびは
○百 六 段十丁ウ まひは
○百 七 段十丁ウ ひきものは
○百 八 段十丁ウ まらべは
○百 九 段十一丁ウ 笛は
○百 十 段十一丁ウ みるものは
○百十一段十五丁オ おほきにてもよき物は
○百十二段十五丁オ 短くてありぬべき物は
○百十三段十五丁オ 人の家につき〳〵しき物は

巻十

○百十四段廿一丁オ うまやは
○百十五段廿一丁オ 岡は
○百十六段廿一丁オ 社は
○百十七段廿三丁ウ ふる物は

弘云。巻九の初丁は。此の抄と万歳抄と大に異なり。万歳本には左の如くあり

九十二段　上達部は云々
九十三段　君達は云々
九十四段　法師は云々
九十五段　女は云々
九十六段　宮仕所は云々

此の五段は。諸本も此抄の如く下にあり。即ち巻十さかしきものとある次に出たり

○百十八段廿四丁オ
○百二十段廿四丁オ
○百廿二段廿四丁ウ
○百廿四段廿四丁ウ
○百廿六段廿五丁オ
○君達ハ(上の九十三段に入ル)廿六丁オ
○女ハ(上の九十五段に入ル)二十六丁ウ
○百廿七段廿六丁ウ
○百廿八段廿七丁ウ
○百三十段廿八丁ウ
○百卅二段廿八丁ウ

卷十一

○百卅四段四十六丁オ
○百卅六段四十六丁ウ
○百卅八段四十六丁ウ
○百四十段四十七丁オ

弘云。此所の上達部以下宮仕所に至る五段は。万歳本には上にいへるが如く巻九に入りたり

○百十九段廿四丁オ
○百廿一段廿四丁オ
○百廿三段廿四丁オ
○百廿五段廿五丁オ
○上達部ハ(上の九十二段に入ル)二十五丁ウ
○法師ハ(上の九十四段に入ル)廿六丁ウ
○宮仕所ハ(上の九十六段に入ル)廿六丁ウ
○百廿七段廿六丁ウ
○百廿九段廿七丁ウ
○百卅一段廿八丁ウ
○百卅三段三十一丁オ

○百卅五段四十六丁オ
○百卅七段四十六丁ウ
○百卅九段四十六丁ウ
○百四十一段四十七丁ウ

○百四十二段四十七丁ウ
○百四十四段四十八丁オ
○百四十六段五十二丁ウ

卷十二

○百四十七段五十七丁オ
○百四十九段六十二丁ウ
○百五十一段六十三丁オ
○百五十三段六十三丁オ
○百五十五段六十三丁ウ
○百五十七段六十九丁ウ

以上百五十七段

弘云百四十九段。女のうはぎは。此の段今本には皆なし。万歳抄にのみあるこ。又云百五十四段綾のもんはさあるは。諸本もんはさのみあり。又云百五十五段のやまひはの次に。並本皆心つきなきものといふ一段あり。然して万歳本には之を省けり。此のことは委しく其所にいふべし

○百四十三段四十七丁ウ神ハ
○百四十五段四十八丁オ屋ハ

○百四十八段五十七丁オうちとくまどきもの
○百五十段六十三丁オからきぬは
○百五十二段六十三丁オかざみハ
○百五十四段六十三丁オ綾のもんハ
○百五十六段六十五丁ウいひにくきもの

下卷目錄 終

訂正増補 枕草子春曙抄下巻

○宮にはじめてまゐりたる比。物のはづかしき事かずしらず。なみだもおちぬべければ。よる〳〵まゐりて三尺の御几帳のうしろにさふらふに。ゐなどとり出て見せさせ給ふだに手もえさし出まじうわりなし。これはとありかれはかゝりなどの給はするに。たかつきにまゐりたるおほとのあぶらなれば。かみのすぢなども。中〳〵ひるよりはとのあぶらなれば。かみのすぢなどもひおこしてみるとけさうに見えてまばゆけれどねんじて見などす。いとつめたきころなれば。さし出させ給へる御手のわづかに見ゆるが。いみしう匂ひたるうす紅梅なるは。かぎりなくめでたしと。見しらぬさとび心ちには。いかゞはかゝる人こそ世におはしましけれとおどろかるゝまでぞまもりまらする。暁にはとくなどいそがるゝ。かつらきの神もしばしなどおほせらるゝを。いかですぢかひても御らんぜん

宮にはしめて
これ清少の定子の御方へまゐりし始めの物語之
ふる〳〵まゐりて
ひるも侍らぬにはあるまじけれど。御前へは夜々まゐりしなるべし恥る故之
これはとありかれはかゝり
給のいはれを定子の仰せかさるゝ之
たかつきにまゐりたるおほとのあぶら
高杯にともしし灯之。よの常の灯臺ならでひゝきゆる髪などもよく見ゆる心之
いみしう匂ひたる
寒氣に定子の御手のあかみて色のうつくしき事をいふ之
見しらぬさとびごゝち
内わたりを見習はぬ里心にはと之。清少の身の事をいふ之
からつきの神もしばし
清少をしばしまてとゞめさせ給ふ詞之。葛城の神は形見ぐるしとて豊の役をせで。よるのみ橋をかけられし之前註。清少のよる

〳〵のみまゐりて晝は退出するゆゑかくたはふれての給ふこ
まてなどおほせらるれば
しばし格子をあけそと也。夜明ぬことならば。
清少の歸るべければ。猶とゞめさせ給はんとての事こ。
物なとはせ給ひ
定子。清少に物問などゆるさせ給はれば程の久しくへたるとこ
いさりかへるやおそきとあけちらし
清少の御前よりぬさり歸るやいなや。格子を明はなちしこ。前に女官の是はなたせ給へなどいひし首尾こ
此つぼねあるじも
后宮の御かたにて清少のひろはやどりぬたる局のあるじこ。誰ともなし
いとあへなきまで
あへなきはあぢきなき心こ。新參の清少をあまりなるまで召まつはすは。后宮の御心こそあらめとこ
我にもあらぬ心ち
清少はづかしさに心ならず參上するこ
れいのすびつ　后宮の御座をあたゝめんとていつもすびつをおかるゝこ
ちんの御ひをけのなしゑ
沈御火桶。梨繪は梨地のたぐひなるべし

とてふしたれは。御かうしもまゐらず。女官まゐりてこれ
はなたせ給へといふを。女房さゝてはなつを。まてなどおほせらるれは。わらひてかへりぬ。物なととはせ給ひのたまはするに。久しうなりぬれは。おりまはしうなりぬらん。さはハやとてよさりはとくと仰せらるゝ。いさりかへるやおそきとあけちらしたるに。雪いとをかし。けふはひるづらしうをかし。御まへちかくはれいのすびつの火こちたくおこして。それには態人もゐず。宮はおんの御火をけ

上らふ御まかなひし給ひけるまゝにちかく
上臈の御かたこ。御陪膳などに候し。中宮の御介錯などする人なれば御前ちかく侍るこ
やすらかなるを
清少のうねゝしきに。人々の宮づかへ馴て進退安げなるが浦山しきとこ
御ふとりつき　イ本御文とりつぎ此本可然にや。御文は中宮の御封歟。河海云。三宮は各千五百戸。弄花云。戸は民戸也。民戸をよせらるゝ心こ。それを封戸ともいふこ。愚按今世の知行所の事こ
ふみわらふ
[訂]原本にはえわらふとあれど。今イ本に因りて補ひ改めつ
このまゐらせ給ふなりとて
實は伊周公なれどもまづ道隆公のおはせしとて。おち散たる物をとりおきなどつくらふこ

さすがにゆかしきなめりと
清少引入ながら又見まゐらせまほしきは。我心ながらさすがに殿の御ありさまのゆかしきにやとて。御几帳よりのぞきしとこ。
めづらしき文眛こ

道もなしとおもひけるに
拾遺「山里は雪ふりつみて道もなしけふこん人を哀とは見ん」

のなしゑしたるにむかひておはします。上らふ御まかなひし給ひけるまゝにちかくさふらふ。つぎの間にながすびつにまなくるたる人々。からきぬきたれたるほど也。やすらかなるをみるもうらやましく。御ふとりつきたちるふるまなどつゝましけならず。物いひゑみわらふ。
清少もいつさやうにまじらひならんとおもふさへぞいつの世にかさやうにまじらひならんとおもふさへぞつゝましき。奥へよりてこあうよりて三四人つどひて。繪など見るもあり。しばしありてさきたかうおふこゑすれば。とのまゐらせ給ふなりとて。ちりたる物ども取やりなどするに。おくに引入てさすがにゆかしきなめりと。御几帳のほころびより。わづかに見いれたり。大納言殿のまゐらせ給ふ成けらのもとにる給ひて。きのふけふ物いみにて侍れは。おほつかなさになどの給ふ。みちも

物がたりにいみしう
伊周公のさまをほめていふ之。榮花物語五云。御年は只今廿二三ばかりにて。御形のさま〳〵のほりふたり清げにて。色あひまことにめでたし。かの光る源氏もかくや有けんと見奉る云々。是伊周公の事をいへるなり。枕双紙より後の物語なれどもしばらく引用たがはざめりとおぼゆ
夢かとおもふ之
此伊周の御さまの見事なるにて。昔物語に色々人のうへをほめ〳〵事もたがはずと思ふ之
うつゝにはまだ
現在にかやうの御ありさまはいまだみぬゆめもあやに遠ましきまで
目綾之。源氏總角巻に。めもあやに心づきなう成てとあり。細流云おどろかる〳〵心之。孟津抄云目も及ばずおどろかる〳〵心之云々。こゝも目も及ばずおどろかる〳〵心なるべし
[訂]弘按。あやにはあやにかしこし。あやにたふとし。なづいふあやにと同意にてイヨニの義なり。あさましは。驚歎の意にて俗にギョッスルなどの意之。さればこゝは。いよ〳〵驚歎するまで。と解くべし。原註はいさゝか非之
さぞと申にこそあらめ
是は元輔のむすめの清少納言新參の由を申なるべし

なしと思ひけるに。何としておはせしぞと之
らひ給ひて。いかでかとぞ御いらへあなる。伊周公之
ありさまは。けふこん人をいふ哥の詞之
しう口にまかせていひたる事ども。紅のからあや二つ白きからあや
宮はしろき御ぞどもに。伊周公にまさる人あらじと之
と奉りたる。御ぐしのかゝらせ給へるなど。昔の繪ものがたりの詞之
をこそかゝるぞする。女房のなれて御返事申之
女房と物いひたはふれなどし給ふを。いらへいさゝかはづかしとも思ひたらず。聞え返し。そらごとなどの
給ひかくるをあらがひ論じなどきこゆるは。清少の恥しき也
淺ましきまであいなくおもてぞあかむや。御くだ物まゐりなどして。伊周の躰之
御まへにもまゐらせ給ふ。御几帳のうしろなど問給ふなるべし。さぞと申にこそあらめ。清少を見付て伊周の
るは誰ぞと問給ふなるべし。さぞと申にこそあらめ。たちのさひ給ひし之
のかたへおはす之
てゝよそに見やり奉るだにはづかしかりつるを。いと淺顔を見えじの心之
ましうさしむかひきこえたる心ち。現ともおぼえず。行幸
事などの給ふ。まことにさ有しなどの給ふに。御几帳へだ帳のほころびよりわづかに見いれし時の事之
など見るに。車のかたにいさゝかみおこせ給ふは。下すだ簾のすき間の影もや見えんとの心之
れひきつくろひ。すきかげもやとあふぎをさしかくす。猶
いと我心ながらもおほけなく。いかで立出にしぞとあせ汗ながる
あへていみしきに。何事をかきこえん。かしこきかげとさ眞向にはいさゝ物も申がたしと之
さゝげたる扇をさへとり給へるに。ふりかくべきかみのあやしささへ思ふに。すべてまことにさるけしきやつきて清少の恥たる心の顔色にも見ゆらんにと之
ぐりにして。ゑぼたがかきたるぞなどの給ひて。とみにもたち給はねば。袖をおしあてゝ。うつふしゐたるも。から清少のかほをかくしたる之
きぬにしろいものうつりてまだらにならんかし。伊周立給へしと之
久しう伊周の立給はぬ之

まことにさありしなど
眞實に清少を思ひてありしさの給ひたはむれ給ふなるべし。前に女房にそらごとなどの給ひかけたると有し首尾之
行幸など見るに
年來行幸など見し折に。伊周公供奉にて清少の物見る車を見おこせ給ひしさへ顔かくしなどせしさの心之
おほけなくいかで立出にし
かくはづかしき所へおほけなくも。宮仕へに出にしよと恥かしさに思ふ之
[增]おほけなくは。大膽の意之。また身分不相應などの義之。かの千載集慈圓の「おほけなくうき世の民におほふかな我たつ杣にすみ染の袖」とあるをも思ふべし
かしこきかげにさゝげ
我影にかくすかたにかしこけなき陰と頼たる扇をもふりかくべきかみの
伊周公の取給ふ之
扇はさらなり。せめて面がくしに髪をふりかけんも見ぐるしからんをおもふと之
あふぎを手まさぐりに
清少の扇を伊周の手まさぐり給ふ之

しろいものうつりて
清少の汗に白粉ながれてからきぬにうつる心之

これ見給へこれはたが書たる　清少のため
に伊周なたゝせ給はんとて此繪を見給へと
后宮のの給ふ之
人をさらへて云々
[増]弘按。伊周公の戯れての給ふ之。人は公
が自身をさして云之。意は清少がわれをさ
らへて立たせ侍らぬと之。こは公が立てゝも
し后宮のかたへ行かば。そのひまに清少は
すべり出て逃去りもやすると氣つかひて。
わざと坐を立ち給はぬさま之
いといまめかしう
清少いま卅歳ばかりにや有けん。かやうの
いまめかしきたはふれは。年齢にも身のほ
どにも相應ぜずと之
人のさうかなかきたる　伊周の詞誰が手跡ならん清少にみせ給へと之
草假名之。かの后宮の見せ給へる繪草紙の
事之

おなじくなほしの人
　山井大納言歟。中納言隆家卿なるべし
われも何がしがとある事
此詞上に連續せず若落字などあるにや。但
まひて讀をとり侍らば。われも何がしがと
ある事とは。彼同じ直衣の人も人の上のと
ありかゝりを申さるゝ之。殿上人の上をも
とりまぜ申さるゝをきけば。清少のうひ
〳〵しき心には變化の物天人などやうに覺
えしと之

ある給ひたりつるを。勿論之清少の恥らんと后宮のおしはかり給ふ之ろんなうくるしとおもふらんと心得
させ給へるにや。これ見給へ。是ばたがかきたるぞときこ
えさせ給ふを。うれし清少心之と思ふに。伊周の詞之これへ給れと之給ひて見侍らんと申給へ
ば。后宮の詞之猶こゝへとのたまはすれば。人をとらへてたて侍らぬ
なりとの給ふ。伊周の詞清少をうごかさんとの心と之いといまめかしう身のほど年にはあはず
かたばらいたし。人のさうがなかきたる草紙とり出て御
らんず。伊周の詞誰が手跡ならん清少にみせ給へと之誰がにかあらん。かれに見せさせ給へ。それぞ世に
ある人の手は見しりて侍らんと。あやしき事どもを。只い
らへさせんとの給ふ。」一ところだにあるに。又さきうちお
はせておなじなほしの人まるらせ給ひて。これはいます
こし花やぎ。猿樂之ざれごと之さるがふ事などうちし。物をほめ笑ひ之ほめわらひ興じ。わ
れも何がしがとある事かゝる事など。殿上人のうへなど
申すをきけば。猶いとへんけの物天人などのおりきたる
にやと覺えてしを。さふらひなれ。日比すぐればいとさし　のちにはさもうせしと之

かく見る人々も
后宮の御かたに侍る女房達をさしていふ之

いかにかばさけいするに
いかでかは思ひ奉らざらんと清少の申上る
之

たいばん所のかたに
后宮の御たかの臺盤所女房の侍ひなり

そらごとするなりけり
清少思ふさは儀ならん。隣にはなひつれば
との御たはむれ之。清輔奥義抄云。人の事
を思ひくはたつるに。はなひつればならず
と云々。さやうの心にて后宮もかくの給へ
るにや。毛詩邶風簡兮題言則�virtual。註今俗人噓
云人道レ我。此古之遺語也云々
そらごとしけれとおぼゆ
[増]偽りて鼻ひたるならんと思はるゝ之
[訂]おほゆは。イ本にはおほえてとあり。お
ほえては思はれて之

わがさる折もおしひしぎかへしてある
尋常にも人の嘘つれば、其はなひ返してあ
る物をと之。人のはなひたる時又はなひ返
されば。わろき事有と世俗にいひならはす
事のゆゑなり

もなきわざにこそ有けれ。かく見る人々も。宮仕に出そめし時の事之家の內出そめ
けんほどは。清少のごとくはづかしからんと之さこそは覺えけめど。かくしもてゆくに。お
のづから。面馴見なるゝ心之是より后宮の清少へ被仰し事之おもなれぬべし。物など仰られて。我をはおも
ふやととはせ給ふ。御いらへにいかにかはとけいするに　清少の御返事申にさしあはせて之妬む者のわざとせしなるべし后宮の御詞
あはせて。だいばん所のかたにはなを高くひたれは。あな
心うそらごとするなりけり。よし〳〵とていらせ給ひぬ。
いかでかそらごとにはあらん。よろしうだにおもひきこ　大かたにも思奉らぬと之
えさすべき事かは。はなこそはそらごとしけれとおぼゆ。
さてもたれかかくにくきわざしつらんと。大かた心づき　はなひる事をいめばとの心之
なしとおぼゆれば。わがさる折も。おしひしぎかへしてあ　新參の時なれば彼咒咀する人のわざなども申折ふしさかしらにはなひたるをにくめる之
るを。后宮の御前にて咒咀せしやうなればと之ましてにくしとおもへど。またうひ〳〵しければと　御前より局へおりしと之
もかく。もけいしなほさで。明ぬればおりたるすなはち。
あさみどりなるうすやうに。えんなる文をもてきたり。み　后宮の御ふみと之
れば」

九十七段

后宮の御うた

いかにしていかにしらまし　いつはりをそらにたゞすの神なかりせば

清少返答

とをん。御けしきはとあるに。めでたくも口をしくも思ひみだるゝに。なほよべの人ぞたづねきかまほしき」

うすきこそそれにもよられね花故にうき身のほどをしる

ぞ佗しき」

此段の御事は申直して給へと取次の人に申之

猶これはかりはけいしなほさせ給へ。しきの神もおのづからいとかしこしとてまもらせてのちも。うたて折しもひしをあやしむ詞之

などてさはたありけん。いとをかし」

したりがほなるもの　最初

正月一日のつとめてさいそにはなひたる人。きしろふた

内裏ありてあまた望み爭ふ之

びの藏人にかなしうする子なしたる人のけしき。除目に

清少返答

いかにしていかに　清少の思ふさいふを鶯ならずと。いかにしてしらん。若鶯を糺の神あらばこそ知べけれとの心之。大和物語異本ニ「鶯を糺の森のゆふだすきかけてをちかへわれなおもはじ」めでたくも口をしくも

后宮の仰せは辱くも又彼はなひしゆゑに鶯などもの給へば口惜くもと之

うすきこそそれにも

花を嘘にそへて之。薄き思ひこそはかなき嘘などにも妨げらるべけれ。是は眞實にてそれらの咒咀にもよるまじき事故に。かく鶯と思召るゝは。うき身の不幸思ひしられて佗しきと也

しきの神もおのつから　職の神也。咒咀などにて災難をなす神之。宇治拾遺ニ少將成ける人の。しき神にふせられて安倍清明に加持せられし事あり。又晴明もしき神つかへる事など有

[訂]弘云。万歳抄には此段の次に左の五段あり

九十二段上達部。九十三段君達は。九十四段法師は九十五段女は。九十六段宮仕所は。次に九十七段したりがほなる物。とあり。此抄には上達部。君達は。法師は。女は。宮仕所は。の五段は次の第十の卷さかしきもの〳〵次に見えたり

したりがほなる物　イ本此奥の上達部はといふより春宮の御母女御といふ迄を書て其次に此題以下あり

[增]したりがほとは。爲ヲ有リ顔といふとにて。俗に自慢氣の顔付するものゝことと之

正月一日のつとめて　世俗に。元日嘘ルハ長命の相といへば之。

神中抄云。四分律云時世尊嚧諸比丘咒願言ニ長壽ト今案今俗正月元日若早旦嚧即稱曰千秋万歳急急如律令ト是緣也。何只在ニ元日一哉。尋常禱之之

何かいとことやうにほろび

受領は。朝庭奉公の志ある人は本意とせず。然共所務徳分に付て望む之。されど何か賢からん。異樣に亡びて外國に洗濯する物などロにはいへど實は滿足の心あるさまなふたきの明と云之

掩韵。孟律抄云。古集の詩の韵字をふたぎて何の字と推して勝負をする之。其何の字と推あてたるを明と云之

れんじて音たかう

まぎらはされずよくこらへたもちたる心之

ふくつけきは

細流云。貪る之。愚案欲がましき心之。遊仙窟貪生フクツケビトとよめり

[訂]原本には「ふくつけきは」とあり今イ本及び万歳抄によりて改つ

かゝぐりありく

かゝづらふ事之。おちくぼ物語三云。かゝくりよる云々。おなじ心之

わづかにあるずんざ

從者也。日比頼なかりし程は。無禮しあなづりし從者のれたかりしもせんかたなくて過しつるに。受領に成て後は。從者も誰も遂從する心之

その年の一の國　其年闕ある中に第一の國を受領したる之

こうなり給へりなど人のよろこびなどいひて。いとかしうにほろびて侍なればなどいふもしたりかほ也。又人おほくいでみたる中にえられてむこにとられたるも我はとこそはき物のけてうじたるけんじや。ゐふたぎの明とうしたる。小弓いるにかたつかたの人しはぶきをしまぎらはしてさわぐに。ねんじて音たかういてあてたるこそしたりがほなるけしきなれ。ごをうつに。さばかりとしらでふくつけきは。又こと所にかゝりありくに。こりかなり。ありくせんとてねんじ過るもねたしと思ひ聞えながら。いかゞせんとてとかたよりめもなくして。おほくひろひとりたるもうれしからんとこそ。ほこりくえならて受領したる之

そうれしげなれ。わづかにあるずんざのなめげにあなづ

しつるに我にもまさる物どものかしこまり。只仰せうけ給ばらんとつるせうするさまぱありし人とやぱ見えたる。女房うちつかひ。見えざりしでうどさうぞくのわきいだちのなりあがりたるよりも受領ならぬさきさは各別さこと
づる。ずりやうしたる人の中将になりたるこそ。もときんみしう思ひためれ。くらるこそ猶めでたき物にはあれ。同し人ながら大夫のきみや侍從のきみなどきこゆる折ぱいとあなづりやすき物を。中納言大なごん大臣などになりぬるぱ。むゆにせんかたなくやんごとなくおぼえ給ふ事のことなさよ。ほど〳〵につけてぱ。ずりやうもさこそはあめれ。あまた國に行く大貳や四位などになりて上達部になりぬれぱおもおもし。されどさりとてほどすぎ。なにぱかりの事かぱある。又おぼくやぱある。ずりやうの北のかたにてくだるこそよろしき人のさいぱひには思ひ

てあめれ口八人の上達部のむすめにてきさきになり給ふこそめでたけれ。されど猶男ぱ我身のなり出るこそめでたくうちあふぎたるけしきよ。法師の何がし供奉などいひてありくなどぱ何とかぱ見ゆる。經たふとくよみ。見めきよげなるにつけても。女にあなづられて。なりかゝりこそすれ。僧都僧正に成ぬれば。佛のあらぱれ給へるにこそ

僧都僧正に
僧も位高くなればしたりがほなるさの心ご

夏さほしたるわたきぬ
一夏過したる綿絹ご

いつのまにかう成ぬらん
八九月の風の冷やかになりしをおどろく心ご

風ぱ
あらし。こがらし。三月ぱかりの夕暮にゆるく吹たる花かぜいとあぱれ。八九月ぱかりに。雨にまじりてふきたる風いとあぱれ也。雨のあしよこさまにさわがしう吹たるに。夏さほしたるわたぎぬの。あせの香などかわき。すゞしのひとへにひきかさねてきたるもをかし。此すゞしだにいとあつかぱしうすてまほしかりしかぱ。いつのまに

かほにしみたる　顔に寒き心ノ。文選宋玉風賦云。其風中レ人狀直憎悋淋漓

むくの葉　椋一名即椋和名牟久

野分の又の日　八月の比ふく暴風也。其明る日の景氣を書ノ。源氏のわきの巻も是をかけり

たてしどみすいがい　立蔀透垣

ふしなみたるに　野分に吹たふされて伏双びたるノ

[訂]万歳抄にも。ふしなみをみだれに作れり。いづれにても大意はおなじ

せんざいども心くるしげ也

[訂]万歳抄には。心くるしげなるを。とあり

[増]せんざいは前栽のもじにて庭前の草木の植込みをいふノ

おほきなる木ども　文選風賦云。靈ノ石伐レ木梢二殺林莽一

かうしのつぼなどに　格子のひと間〳〵を坪さいふにや。こま〴〵と吹入と次の詞にあり。此段の風の形容は莊子が天籟を論じたる詞にをさ〳〵おとるまじくや

いとこきぃぬのうへのくろみたるノ

かう成ぬらんと思ふもをかし。あかつきかうしつま戸などおしあけたるに。嵐のさと吹わたりて。かほにしみたるこそいみしうをかしけれ。九月つごもり。十月一日の程の空うちくもりたるに。風のいたう吹に黄なる木の葉どものほろ〳〵とこぼれおつるいとあはれ也。さくらのはむくの葉などこそおつれ。十月ばかりに木立おほかる所の庭はいとめでたし」

野分の又の日こそいみしう哀におぼゆれ。たてしどみすいがいなどのふしなみたるに。せんざいども心ぐるしげなる木どもたふれ。枝など吹をられたるだにをしきに。萩女郎花などのうへによろぼひぱひふせるいとおもはず也。かうしのつぼなどに。さときはをことさらにしらたんやうにこま〳〵と吹入たるこそ。あらかりつる風のしわざともおぼえね。いとこききぬのうはぐもりたるに、くちばのおり物。うす物などのこうちきノて。まことしくきよげなる人の。夜るは風のさわぎに寐覺つれば。久しうねおきたるまゝに。鏡うち見て。もやよりすこしるさり出たるけしき見るほどに。十七八ばかりにやあらん。ちみたるが。かたにかゝりたるほどにめでたし。物あはれなるけしきみる　其女房の野分の朝の草花のをれふして哀なるを見ゐるほどにノ

花もかへりぬれなどしたる　かの生絹の單の花田いろなるが色さめて。野分のしぶきにぬれたるさまなり

たけばかりはきぬの　髪長くて居長ほどきぬのすそにあまりしノ

そばより見ゆる　彼物哀なるけしき見る女房の簾より此十七八の女房の見ゆるノ

うちやましげに　かの童のわかき人と諸共にせまほしげなるノ

うしろもをかし　童のうしろノ。彼わかき女房のうしろもこめていへり

れざめつれば　イ本れられざりつれば云々

うちふくだみたる　髪のそゝけたるノ。源氏におほき詞ノ

[増]ふくだみは。埃嚢抄に蕪菁のもじにかけり

物あはれなるけしきみる　其女房の野分の朝の草花のをれふして哀なるを見ゐるほどにノ

花もかへりぬれなどしたる　かの生絹の單の花田いろなるが色さめて。野分のしぶきにぬれたるさまなり

たけばかりはきぬの　髪長くて居長ほどきぬのすそにあまりしノ

そばより見ゆる　彼物哀なるけしき見る女房の簾より此十七八の女房の見ゆるノ

うちやましげに　かの童のわかき人と諸共にせまほしげなるノ

うしろもをかし　童のうしろノ。彼わかき女房のうしろもこめていへり

九十九段

心にくき物

[増]こは心に悪む意にはあらず。心にくきといふ一の詞にて。心ゆかしく思ふ意之。俗に心に羨む意もあり

物まねる

[訂]活本を物まねるとあり

はし　飯匙。浜名伊勢物語和名云。説文云。匕所以取飯也一名匙カイ

かひ　飯匙。一名ヘ抉提和名にあり

ひさげのえ　提柄之

心にくき物（圭とおぼしき女のこゑ之）

物へだてゝいきくに。女房とはおぼえぬ聲の忍びやかにきこえたるに。（是女房なるべし）こたへ若やかにしてうちそよめきてまゐるけはひ。物まゐる（御膳進之）程にや。はしかひなどのとりまぜてなりたる。ひさげのえのたふれふすもみゝこそとゞまれ。（女房のき）うちぬの打たるきぬのあさやかなるに。（さわがしからぬ之）さうがしうはあらで髪のふりやられたる。（女房のき）いみしうしまつらひたる所の。（后宮ほどの御かたの之）おほとなぶらばまゐらで。長すびつにいとおほくおこしたる火のひかりに。御几帳のひものいとつやゝかに見え。みすのもかう（鉤之簾のつりばり之）のあけたる。このきはやかなるもけさやかに見ゆ。よくて（調之）うじたる火をけのはいきよげにおこしたる火に。よくかきたる繪の見えたるをかし。はしのいときはやかにすぢ（橋欵或は階のもとにや）かひたるもをかし。夜いたう更て人のみなねぬるのちに。外之とのかたにて殿上人など物いふに。おくにでいし。（碁石之）（碁筍之）けにい

百段

うきしま　奥州しほがまの邊之。新古今に「しほがまの前にうきたるうきしまのうきて思ひのある世なりけり」やそしま　八雲云。清輔云出羽にあり云々。普通には只八十島之。愚案。業平の小町が髑髏を見しは出羽の八十島之。小野篁の八十島かけてこよみ給へるは只おほくのしまといふ義之

たはれしま　相摸云々

みつしま　八雲筑前。万葉或三島とも「廬北の野坂の浦に舟出して水島にゆかん波たつなゆめ」

こよらの島　[増]六帖に忠岑「よそにみしこよらのしまのふた心ありとしきけばさらにたのまず」

たとしま　[訂]活本にはたくしまとあり。万歳には。たくのしまの誤りか。然らば出雲之と有り

百一段

ふきあげのはま

[増]古今秋に菅原朝臣「秋風のふきあげにたてる白菊は花かあらぬか波のよするか」

ながはま　八雲伊勢云々

うちでの　打出濱。八雲近江

千里の濱　伊勢物語ニ紀の國の千里の濱にありけろ云々チリのはまとよむ歟

百二段

おふのうら　生浦之。八雲伊勢。古今大哥所の哥いせ哥によめり

[訂]弘云。イ本にをふの浦とあり。さては異

はまぢは（吹上　八雲紀伊）

そとのはま。ふきあげのはま。ながはま。うちでの濱。（来勘）

よせのはま。千里のはまこそひろうおもひやらるれ」

浦は（奥州之）

おふのうら。しほがまのうら。（近江之）滋賀のうら。なたかの浦。こ

百三段

所にや
なだかのうら　八雲遠江云々。万葉には。　りずまのうら。紀伊之
きの國のなだかのうらとよめり
こりすま　攝津之。八雲に云く須磨。こりすまの浦とは同所之。但別なるやうにいふ人もあり云々

寺は

つぼさか　和泉の法華寺也。又は壺坂寺と
いへり。本尊は千手觀音之。道基上人建立
と拾芥に有
かさぎ　笠置寺大和にあり。本尊は彌勒解
脫上人の寺之
ほうりん　嵯峨の法輪寺之。僧都道昌一日
宴座せるゝに虛空藏菩薩衣の袖の上に現し給へり。道昌すなはち袖をきりて圖して法輪寺に安置せらるゝと元亨釋書にあり。一說ニ小栗栖野
法琳寺常曉律師の太元堂云々
高野は　金剛峯寺と號す。元亨釋書一曰。弘仁七年遊ニ紀州一相ニ勝攸ニ上ニ高野山一創ニ金剛峯寺ニ云々
弘法大師　元亨釋書云。釋空海。世姓佐伯氏讃州多度郡人。父田公。母阿刀氏。夢梵僧入レ懷而有レ身云々。謁ニ唐青龍寺惠果ニ授ニ灌頂一。承和二
年三月廿一日入定。延喜廿一年十月諡ニ弘法大師一
石山　聖武御宇。東大寺の佛にみがきぬへき金を得んための祈願に。朝辨上人江州瀨多に菴して。如意輪を安置して後奥州より始て黃金を奉り
ければ。此寺をたて、丈六の觀音をきざみて。はじめの像を中にこめ。又金剛藏王と執金剛神とを左右に安置せり。猶元亨尺書に委
粉川　紀州那賀郡風市村粉河寺は。寶龜元年に建ツ。獵師大伴孔子古。此山に瑞光を見て。佛を安置せまくおもふに。ふしぎの童來て一七日のほ
どに。金色の千手觀音をあらはせり。其後河内の澁河郡の佐大夫といふ者。一子の病を此觀音に祈て平愈せしかば。伊都郡澁田村の富家のやも
め。此事をきゝたふとみて此寺をたつるよし元亨釋書に委
滋賀　崇福寺と號す。近江滋賀郡にあり。ながらの寺とも此滋賀寺を誤するよし八雲御抄にあり。天智天皇の御時。此地に瑞光ありて。かたは
らに瀧有。ふしぎの優婆塞すみて。此地は古仙のかくれふす所の由。帝に申けれども。帝聞召て。緋て靈地を得て寺をたてんの御心ざしある故。此
寺を立給ふ事元亨尺書にあり。今は三井寺の末寺のよし拾芥にみゆ

經は

經は云々
[訂]弘云。万歲抄に經は以下文は佛は物語は野はの五段なし。寺はより直に陀羅尼はにつゞけり
法華經はさら也　妙法蓮華經は。秦の羅汁三藏の翻譯。其弟子

法華經はさら也。千手經。ふげん十願。ずるぐ經。尊勝だら
に。あみだの大ず。せんずだらに」

文は

文集。文選。はかせのもんじの申文」

佛は

如意りは。人の心をおはしわづらひて。つらづゑをつきて
おはする。世にしらずあはれにはづかし。千手。すべて六觀
音。不動尊。藥師佛。しやか。みろく。普賢。地藏。文珠」

僧答の筆受。今の世におこなはるゝは是なり。諸經最第一とすれば更なりといふなるべし
千手經　千手千眼觀自在菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經なるべし。世に千手陀羅尼經といふ是之。四天竺沙門伽梵達摩譯云々
ふげん十願　これ花嚴經の普賢行願品をいふなるべし。大方廣佛花嚴經入不思議解脫境界普賢行願品といへり。般若三藏譯云々。此品の中に普
賢十種の大行願をたて給ふ。一者禮敬諸佛。二者稱讃如來。三者廣修供養。四者懺悔業障。五者隨喜功德。六者請轉法輪。七者請佛住世。八者
隨佛學衆。九者恒順衆生。十者普皆廻向。このゆゑに十大願經といふなるべし
ずるぐ經　隨求陀羅尼經一卷あり。不空三藏の翻譯之。滅惡趣菩薩の。一切の衆生の苦を拔濟せん事を世尊に請て。世尊此だらにをとき授け給
へり。、この眞言は三世の諸佛の無數万劫をへて。毘盧遮那如來の自法界智の中にして。無礙劫を盡して求め得給へり。此故に隨求即得眞言と名
付云々
尊勝だらに　佛頂尊勝陀羅尼經一卷。大唐闍賓佛陀婆利奉勅譯云々。佛在世に。善住太子。七日のうちに死て地獄におつべきしるしありしに。帝
釋あはれみて。佛に此よし申給へば。佛此だらにをときさづけ給ひて。其雖をまぬかれたり。其靈驗無量云々
あみだの大ず　阿彌陀の眞言之。眞言家には大咒とすみてよめり。阿彌陀根本陀羅尼ともいへり。無量壽軌に出云々。裏運錄に別にのせて十甘
露眞言と名つく云々。源氏鈴虫卷に。あみだの大ずいとたふとく云々。讀ニ誦せ口傳
せんずだらに　すなはち祕千手陀羅尼經の中にあり。其功德彼經に委

文は

文集　白樂天が文集之。七十卷あり。白氏
長慶集は編やうかはりて七十一卷之
文選　梁の昭明太子の。周秦漢より。梁の世
までの文をあつめて卅卷あり。唐の李善が
註に五臣の註をくはへて六十卷とす
はかせの申文　官を望て除目などに上る文之。其躰延喜式にあり。其品は江次第に委。中にも博士のは小野篁の申文。三善道統の申文等世に傳れり

佛は

如意りは。人の心を是此大士の相好を云之。觀自在如意輪菩薩
瑜伽法要曰。金剛智三藏譯。六臂身金色。住ニ說法相一。右第一思惟。第二持ニ寶珠一。第三持ニ
念珠一。左第一按ニ光明山一。第二持ニ蓮花一。第三持レ輪云々。この右第一思惟の手は。愍念有
情一故といへり。此かたちを此の双紙にはかくいへるにや。如意輪觀音。或は二臂にて。右は思惟左は蓮花を持もあり。これも右
は同前。左持ニ蓮花一は能淨諸非法一故云々
千手　千手陀羅尼經曰。即發レ聲言若我當來墮ニ四惡趣一者願ニ已應レ時身上千手千眼悉具足
云々

すべて六觀音　拾芥云。六觀音配二六道一。大悲觀音。千手變破二地獄道一。大慈觀音。十一面變破二餓鬼道一。准胝觀音。如意輪變破二修羅道一。天人丈夫觀音。准胝觀音。馬頭變破二畜生道一。大光普照觀音。十一面變破二修羅道一。天人丈夫觀音。准胝觀音。馬頭變破二畜生道一。大慈觀音。正觀音變破二餓鬼道一。大悲觀音。千手變破二地獄道一。

宗除二准胝觀音一。奉レ加二不空羂索觀音一

不動尊　底哩三昧經上曰。不動者是菩提心。犬寂定義也。猶儀軌委

大日經二曰。爲二一切障一故住二火上三昧一

藥師佛　釋迦牟尼。飜譯名義集一曰。摭華云。此云二能仁寂默一。寂默故不レ住二生死一。能仁故不レ住二涅槃一。悲智兼運立二此嘉稱一。猶委まこゝに一代教主にてをはすめり

しやゝ

みろく　名義集云。彌勒。淨名疏云。此飜二慈氏一。過去爲レ王名二善慶一。值レ佛出家。修二習慈觀一。證二不生忍一。生二兜率天一。爲二一生補處一。當レ下生二閻浮提一。紹二釋迦位一。故云二慈氏一。姓阿逸多。此云二無能勝一云々。みろくは。釋迦の出世までは五十七億低六十百千歳をへだつといへり。彌勒下生經には將來久遠劫於二此國界一成佛云々。河海よりみろくの出世までは五十七俱低六十百千歳をへだつといへり。彌勒下生經には將來久遠劫於二此國界一成佛云々。河海

普賢　名義集云。圓覺疏云。一約二自體一。體性周徧曰レ普。隨レ緣成レ德曰レ賢。二約二諸位一。曲濟無レ遺曰レ普。鄰レ極亞レ聖曰レ賢。三約二當位一德無レ不レ周曰レ普。調柔善順曰レ賢。云々。尺尊法華經を說をはり給ひてのち。普賢ぼさつ東方の寶威德佛國より佛前に來りて。懺法して四法成就の法門を得て。末代惡世に法華經の行者を守護し惡魔夜叉等の難をまぬかれしめ。未來は成佛せしめんとて二十句の陀羅尼をとけり。猶普賢菩薩勸發品に委

地藏　大藏綱目指要錄三曰。地藏十輪經十卷。唐玄奘三藏譯。地則坐厚無レ塵。藏則包含無レ盡。以二十佛輪一轉三十惡業一故之。六道の衆生濟度のぼさつ

文殊　名義集云。文殊師利。此云二妙德一。大經云。了了見二佛性一。猶如二妙德等一。淨名疏云。若見二佛性一即具二三德一。不縱不橫故名二妙德一云々。四域記云。曼殊室利。唐言二妙吉祥一

住吉物語　二卷あり。異本十卷あり。源氏物語に用られしは二卷の住吉物がたりと見ゆ

うつほの類は　うつほ物がたりのたぐひといへる事なるべし

殿うつり　うつほ物がたりにある事なるべし。是此物がたりにある事なるべし

是より以下の物語今の世所見なし。八雲御抄學書の中にも住吉物がたりの外はしるさせ給はず。其代にもすでに絶々なりしなるべし

かたの〳〵少將　源氏帚木野分卷等に。其名出たり。又おちくぼの物語にも辨の少將を。世の人はかたの〳〵少將と申めりとあり。又右近が父季繩の少將を父野の少將といふよし玄旨法印の百人一首抄に有。然共物語は世に傳はらず

百四段

嵯峨野さら也　昔は秋萩の時など野遊し。撰集抄など遊興の所なれば。更へさいへるなるべし

こま野　山城の駒のわたりにや。猶可尋之

飛火野　八雲大和春日野也。袖中抄云。國史云。和銅五年正月廢二高安烽一。始置二高見及大和國春日烽一。以通二平城一也云々

しめぢ野　八雲云。しめ下野。山城。是在二清輔初學抄一云々。おなじ所なるべし

あべの　攝州住吉と天王寺とのあはひに安陪野あり是にやむらさき野　八雲云。近江。万葉あかねさす云々。愚案後拾遺に長能。紫の野にさよみしは山城今宮之

百五段

陀羅尼　名義集云。秦言二能持一。集二善法一能持令二不レ散不レ失。又華嚴云。惣持二謂持レ善不レ失持レ惡不レ生。此双紙の心はだらにはあつきよみてよしと云。前にいへるすゞぐたらに尊勝だらに千手だらにの類にや。一切經藏効戈の二箱に。陀羅尼集十二卷あり。啓の箱にも陀羅尼集經十卷あり。其外諸經のだらにあけていひがたし

[訂]弘云。原本には「陀羅尼はあかつき。どきやうは夕くれ」とやうにかき下しにかきたり。古鈔本には下の如く各一段とせり。これをよしとすべし。よりて今改めつ

どきやうは　看經などなるべし

あそびは　音樂をもいひ又よろづのあそびわざをもいふべし

まり　順和名云。蹴鞠以レ足遊踏也。打毬毛丸打者也云々。愚案蹴鞠はよのつねの鞠と。打毬は手まりの類と。又圓機活法に。擊毬あり。杖にてうちて上下せしむるあそびとこゆみ　源氏若菜の上卷に月のうちに小弓もたせてまゐり給へりとあり

[訂]活本には。ごの次に「女はへんいとおかし」とあり

嵯峨野さら也　昔は秋萩の時など野遊し。撰集抄など遊興の所なれば。更へさいへるなるべし

こま野　山城の駒のわたりにや。猶可尋之

飛火野　八雲大和春日野也。袖中抄云。國史云。和銅五年正月廢二高安烽一。始置二高見及大和國春日烽一。以通二平城一也云々

しめぢ野　八雲云。しめ下野。山城。是在二清輔初學抄一云々。おなじ所なるべし

あべの　攝州住吉と天王寺とのあはひに安陪野あり是にやむらさき野　八雲云。近江。万葉あかねさす云々。愚案後拾遺に長能。紫の野にさよみしは山城今宮之

百五段

陀羅尼　名義集云。秦言二能持一。集二善法一能持令二不レ散不レ失。又華嚴云。惣持二謂持レ善不レ失持レ惡不レ生。此双紙の心はだらにはあつきよみてよしと云。前にいへるすゞぐたらに尊勝だらに千手だらにの類にや。一切經藏効戈の二箱に。陀羅尼集十二卷あり。啓の箱にも陀羅尼集經十卷あり。其外諸經のだらにあけていひがたし

[訂]弘云。原本には「陀羅尼はあかつき。どきやうは夕くれ」とやうにかき下しにかきたり。古鈔本には下の如く各一段とせり。これをよしとすべし。よりて今改めつ

どきやうは　看經などなるべし

あそびは　音樂をもいひ又よろづのあそびわざをもいふべし

まり　順和名云。蹴鞠以レ足遊踏也。打毬毛丸打者也云々。愚案蹴鞠はよのつねの鞠と。打毬は手まりの類と。又圓機活法に。擊毬あり。杖にてうちて上下せしむるあそびとこゆみ　源氏若菜の上卷に月のうちに小弓もたせてまゐり給へりとあり

[訂]活本には。ごの次に「女はへんいとおかし」とあり

野は

嵯峨野さらく。印南野八雲播磨　交野八雲河内

しめぢ野。八雲抄にも國しられず　かた野。栗津八雲近江

に名づけしとそ

たるにかあらん。あべの。宮城野。奥州之　かすが野。大和之　むらさき野」

陀羅尼は

あかつき」

どきやうは

夕ぐれ」

あそびは

是は音樂の事なるべし

よる人のかほ見えぬほど。前に註　あそびわざはさまあしけれど

もまりもをかし。こゆみ。るんふたぎ。ご」

するがまひ。もとめこ。
東遊是乙。花鳥餘情云。東遊譜云。先一二呼。次駿河舞。次求子。次加太於呂之調子高麗双調也
たいへいらく　順和名の道曲調の所に云。
太平樂出時曲譜ニ云胡少子武昌樂ニ合歡臨太平樂之急也云々
もろこしにかたきにぐして
漢高祖楚項羽と鴻門の會に。酒宴の半に項羽の臣。亞夫高祖をうたんとて項莊に劔をぬいてまはしめてひまあらばと高祖をうかゞふに。項伯といふ者高祖をいたはりて。劔をぬひて共にまひて。高祖をへだておほひて終にうたせざりし。この項莊が舞を太平の曲をまひしと太平記にもしるせり。是を敵にぐしてあそぶといふなるべし。史記九十一樊噲が傳に委

鳥のまひ　河海云。鳥樂迦陵頻也一越調也云々。順和名に沙陀調の曲迦陵頻。妙音天淨南竺國に此舞を傳ふ。婆羅門僧正之を見て。受傳て唐に
地とゝめず本朝に傳云々
ばさう　拾芥云。拔頭乞食調云々。但和名道調曲の中に云。拔頭拔音如レ末云々
らくそん　落蹲。高麗一越調の樂乙。納蘇利ともいへり。五月六日の競馬の日雅樂寮これを奏するよし花鳥餘情にあり

琵琶　和名云。捄琵琶撥名也。今案琵琶頸有二四柱一又琵琶體有二反首轉覆手承絃撥面落帶滿月等之名一云々。胡國にて馬上にて引物乙。又魏武帝造レ之。和名云箏形似レ瑟而短有二十三絃一云々。神農造又蒙恬所レ造秦聲也云々

[訂]弘云。活本にはさうのことの五字なし
ふかうでう。わうしきでう。
琵琶の風香調黃鐘歟。河海云凡琵琶は風香調反風香調秘曲にあり。楊真操流泉曲也。

まひは
するがまひ。もとめこ。たいへいらくはさまあしけれどいとをかし。太刀などうたてくあれどいとおもしろし。もろこしにかたきにぐしてあそびけんなどきくに。鳥のまひ。ばとうはかしらのかみふりかけたるまみなどはおそろしけれど。がくもいとおもしろし。らくそんは二人してひざふみてまひたる。こまがた」

仍以二此兩調子一爲レ先。琵琶の黃鐘調は。笛の平調に合する也。掃部頭貞敏四調を定めたり。風香調ハ。合二笛黃鐘調一。反風香調は。合二笛平調一。清調は。合二笛平調盤涉調一。其樂の急譜別にあり。二反めの時口傳ありとぞ
そかうのきう　蘇香急。和名云。盤涉調蘇合香大曲。俗只云二蘇香一云々。其樂の事なるべし
うぐひすのさへづり　春鶯囀和名に一越調云々。源氏花宴に春の鶯さへづるといふまひいと面白くとあり。此樂
[增]堀川後百首に俊頼「あな竹を葉の上人ふきたて〳〵はるのうぐひすさへづる（つらすなり）」
さうふれん　想夫憐。相府蓮。和名平調河海同。愚案太平廣記二百四十二繆誤部云。唐司空于頔以二樂曲有二想夫憐之名一嫌二其不雅一將欲レ改レ之。客有レ笑曰南朝相府曾有二瑞蓮一。改レ哥爲二相府蓮一。自レ是后人語誤及レ不レ改。國史補
[訂]活本には。このさうふれんの上に「もさうのことはいとめでたししらべは」の十七字あり

笛は
よこぶえいみしうをかし。とほうよりきこゆるが。やう〳〵ちかうなりゆくもをかし。ちかゝりつるがはるかになりていとはのかにきこゆるもいとをかし。車にてもかちにても馬にても。すべてふところにさしいれてもたるも。さばかりをかしき物はなし。ましてきし（忍ひてきたる男などの）あかつきなどいみしうめでたし。（目にたらぬ物なればこそ）も。何とも見えず。さばかりをかしき物はなし。
（忘れたること）に忘れて枕のもとよりとりにおこせたるをしつゝみてやるし。人のもとよりとりにおこせたるをしつゝみてやる

百十段

さうのふえ　篁。聲名云篁生也。象二物貫レ地生一以レ匏爲レ之。其中空以受レ簧也。說文曰篁正月之音。物生故謂二之篁一。三簧象二鳳之聲一

ひちりき　說文云。篥。觱篥。笳管也。卷二蘆葉一爲レ頭截レ竹爲レ管出二胡地一

なからばかりより　橫笛の調の中分ほどよりひちりきを吹たるを猶口傳

ほどこそ　[訂]弘按。此所は句とすべし。此のこそはこそあれと云べきあれを省きたるなるべし。然らざらんにはこそのかゝりの結辭なくして語格をゝのはざるを

うるはしき髮もたらん人もみなたちあがり　物のそゝろに面白き時は毛髮立てそつとするも也。堀河後百首ニ俊頼

「琴のねのことぢにむせぶ夕ぐれは毛もいよ立ぬそゝろさむさに」

[增]源云。笛をおもしろく聞くほどに。ひちりきの吹出ぬれば。興さめて身の毛もたつさと

弘按。此說よろし。原註の如く髮の毛立て面白しといふはうけ難し。下文十一卷一丁にも「身よりおせのあゆれば髮などもあがりやすらんとおぼゆ」とあるをも思ふべし

行幸　朝覲行幸。野行幸。諸社の行幸の類と。拾芥儀式畧部云。行幸前陣ニハ。京職神祇官内藏寮正兵部民部雅樂治部式部官史隼人少納王彌左右近衛。中央御輿女官侍中。後陣典藥内膳造酒下畧。猶神社行幸の儀等委

まつりのかへさ　賀茂祭の翌日きのふの使の中少將舞人等の歸さと。禁中にも還立の儀あり。江次第六云。還立儀裝束如レ昨云々

御かもまうで　關白賀茂詣。卯月申日。公事根源云。此事は必賀茂祭の前日ある事と。主人は乘車にて。地下殿上の前駈有。白妙の御幣。神寶の唐櫃やうの物をかたげもたしむ。琴持官笋深沓さいふ物を召供す。上達部車をつらぬ。社頭にて神拜あり。上下畧

めもさまらぬ　[訂]こは語格さゝのはず。めもさまらずとあるべき所と。ぬはずの誤りか

かざしの花　臨時の祭に蘰を結びて鬘として。插頭の花を指て、長橋馬道の西のつまに立て。重土器を舞人哥人に給ひて。後かざしの花を給ふ。江次第二委

かものやしろのゆふ禪　愚案此哥かもの社の姬小松といふべきをゆふだすきと書たがへしにや。古今集に冬の賀茂の祭のうた。藤原のさしゆきの朝臣「千早ふる賀茂の社の姬小松万代ふとも色はかはらじ」此哥なるべし。但又同集に「千早振かもの社のゆふ襷ひさしも君をかけぬ日はなし」といふ哥をうたへるにや

[訂]弘云。此註「愚按より。此歌なるべし」とあるまで削るべし。こはふようなる心ちす。下の歌にてよくあたれるをや

御こしにたてまつり　天子の御輿ハ慥華とて。慥をかざると云

りん下のまつりの事をいふ

らくもりてさむげなるに。雪すこしうちちりて。舞人哥人などのかざしの

花あをずりを　舞人竹の文青摺の袍を着と花鳥に有

さやのさはやかにくろうまだらにて。しろくひろう見えたるに。ぱんひの陪從の半臂の赤紐のやうすしたるやうに也をのやうしたるやうにかゝりたる。舞人地摺ぢずりなどにかゝりたるえもいはずをかし。たちの釼柄

めなどすべていとめでたし。今すこしおほくわたらせまほしきに。使は必にくげなるもあるたびはめもとまらぬ。陪從舞人など猶おほくの袴を着すと花鳥にありこほりかとおどろくばかりなるうち氷打目のつやめきしと

ほしきに。使は必にくげなるもあるたびはめもとまらぬ。

されど藤のかざしに顏の見にくきのかくれたる事と

かたを見おくらるゝに。陪從はしゆろの交の青摺の袍柳色の下かさねを着すると前註

したがさねに。かざしの山吹品おくれたる物のかざしなればと。おもなく見ゆれども。扇いとたかくうちならして。賀茂の社のゆふだすきとうたひたるはいとをかし」

是より前にいひし事を委いふと

行幸になずらふる物は何かあらん。御こしにたてまつりたるを見まるらせたるは。あけくれ御前にさふらひつかふめさせ申す心と

十二

みつなのすけ　鳳輦の御綱を奉行する人舍人助なりふにや。百寮訓要云。大舍人寮宿直の事を司る。令に見えたり。節會の諸卿をめす事は大舍人の役ㇾ。行幸の時御綱などを奉行す云々

雲林院ちそくぬん　紫野の邊にや前註

まつる事もおぼえず。（神々ㇾ）かう〳〵しういつくしう。つねは何（官人ともㇾ）ともなきつかさ。ひめまうち（東竪子ㇾ前註）ぎみさへぞやんごとなうめづらしうおぼゆる。みつなのすけ。中少將などいとをかし」（是亦一段ㇾ）まつりのかへさいみしうをかし。きのふはよろづの事う（行粧の奇麗なりしㇾ）るはしうて。一條のおほぢのひろうきよらなるに。日のかげもあつく車にさしいりたるもまばゆければ。扇にてかくし。ゐなほりなどして久しうまちつるも見ぐるしうあせなどもあへしをけふはいとどくいてゝ。雲林院ちそくゐんなどのもとにたてる車ども。葵かつらもうちなへて見ゆ。日は出たれど。空は猶うちくもりたるに。いかできかんと目をさましおきるてまたるゝ郭公の。あまたさへあるにやときこゆるまでなきひゞかせば。いみしうめでたしとおもふほどに。鶯の老たる聲にて。かれにせんとおぼしくうちそへたるこそ。にくけれどまたをかしけれ。

かれにゝせん　［訂］原本かれにせんとあり。今活本幷ニ万歳抄によりてにも一つを補ひつ

［訂］原本にはけれの二字なし。さては上のこ　その結びとゝのはず。活本によりて改めつ

ことなりぬやと　事成時至れりやと問ㇾ

［訂］活本にはことなるやとゝあり。按に。源氏奏巻にも「ことなりぬこゝへば」とあれば本のまゝにて聞ゆべし

またむご　無期。いつともなしとの心ㇾ。

赤きぎぬ着たる物どものこたへ　［訂］活本幷に万歳抄にはまたこむとあり。是も本のまゝよろし

御こしたごし　江次第六。賀茂祭路頭次第云。長官。御輿駕輿丁前後廿人。輿長左右各五人。女孺十人。執物十人。腰輿上下異これに率りておはしますらん

齋院是にのりておはすらんとㇾ。齋院道のほどは御車にて。御社近くては腰輿に召るゝㇾ。江次第六。路頭次第云。齋王先詣二下社一暫留二社頭小舍一脱二却衣裳一更着二清服一即駕二腰輿一入レ社用二輿長一行列在レ式。未レ到レ社十許丈齋王下二腰輿一歩行以二兩面一布レ道就二社前左殿座一事畢出二社外一駕二半車一參二上社一下畢

あふひよりはじめて青朽葉どもの　人々のかざせるあふひ草。青朽葉。表青丹の黒みあり裏青云々。イ本遙にいひつれど程もなく歸らせ給ふに。御使ひのかざしの葵もすこしなよやかなり也。桂の葉もうちしぼみて中〳〵いとえんに見えたり。御車の過させ給ふ匂ひより始め車どもの扇からきぬ。青朽葉なるなどもなまめかしう見ゆる。雜色所の衆のあを色云々

亂れきて　［訂］古鈔本にはひれきてに作れり。按にこはまつりのかへさをまつㇾ　いつしかとまつに。御社のかたよりあかきゝぬなどきたるものどもなどつれだちてくるを。いかにぞ。ことなりぬやなどいへば。まだむごなどいらへて。御こしたごしなどもてかへる。これに奉りておはしますらんもめでたく。けぢかくいかでさるゆすなどのさふらふにかとおそろし。はるかげにいふほどもなくかへらせ給ふ。あふひよりはじめて。青くちばどものいとをかしく見ゆるに。所の衆のあ前にまだむごといひし事ㇾ　無期　かうの駕輿丁輿長などの齋王の御あたりにいかでまゐるぞとおそれがましとㇾ　齋院のめざるゝものなるべし　齋王の還御なるべし　出車などの女房の出たちㇾ　白重の色

をいろしらがさねを。けしきばかり引かけたるは。卯花垣　白重夏の服ㇾ　卯花に似たる心ㇾ

根ちかうおぼえて。郭公も陰にかくれぬべうおぼゆかし。　祭の日ㇾ

きのふは車ひとつにあまたのりて二あるのなほし。わる　二藍直衣ㇾ

は狩衣など亂れきて。簾取おろし。物ぐるほしき迄見えし　東帶ㇾ

君達の。齋院のえんがにて。ひのさうぞく麗くて。けふは一　一車に一人づゝㇾ

人づゝをさゝしく乘たるしりに殿上わらはのせたる　後ㇾ　わらはにて昇殿の人ㇾ

もをかし。わたりはてぬるのちには。などかさしもまどふ　物見の人歸路をいそぐさまㇾ

飛の草のてき亂の草鮒さよくにたれば誤れるにやひれならんには領巾のもじ

郭公も陰にかくれ
「なく聲をえやは忍ばぬ郭公初卯の花の陰にかくれて」人丸前註

齋院のえんがにて　齋院の饗の垣下にまゐらるるなるべし。祭の日二献の時舞人に垣下の公卿勸盃の事。江次第にあり。けふもさやうの義式あるにや。弄花抄云。大饗などにも人數の外の人の交りたるを。垣下の君達といふ也云々

かつらなどのしぼみ
きのふのあふひにそへし桂のしぼみしに。今さしたる卯花のあたらしきが見事なるにとほきほどはえもとほるまじう見えたる行さきを

さきに車せきつゞきて。遠く見ればとほりがたく見えしも。近くゆきもてゆけばさもあらぬさま

みれにわかるゝ「風ふけば峰に別るゝ白雲の絶てつれなき君が心か」古今戀二

うへはつれなく草おひ
うへは何ともなく水草生たるさま。後撰戀五「蕗葉のうへはつれなきうらにこそ物あらがひはつくといふなれ」此歌ばかりとれり

ちかうかぐへたる香
蓬の匂ひの間近くしたる心さ。前にも狩のかすこしかぐへさ有
[增]弘云。次段にも「其折の香のこりてかぐへたるも」さあり
[訂]活本には香もとゞなくて「ちかうかけたるもいとをかし」さあり

いふべきにもあらず
さきおほするほどの人の車なれば。其優恕ばいふも更なりその心さ

なるよりはをかしと見るほどに。車わかるゝ所にて男の詠吟するさ
ねにわかるゝといひたるを。ながくとたゞさまになが〳〵とゆけば
是より例の筆すさびさ
五月ばかり山里にありくいみしくをかし」

ゞいとあをく見えわたるに。うへはつれなく草おひしげりたるを。澤水もげにたりける水のふかうはあらねど。人のあゆむにつけて。とはしりあげたるいとをかし。左右にある垣の枝などのかゝりて。車の屋かたにいるも。いそぎてとらへてをらんと思ふに。ふとはづれて過ぬるもくちをし。よもぎの車におしひしがれたるがわのまひたちたるにちかうかぐへたる香もいとをかし」
是亦一段さ
いみじうあつき比。夕涼みといふほどの。物のさまなどおぼめかしきに。男車のさきおふはいふべき事にもあらず。たゞの人もしりのすだれあげて。ふたりもひとりものり

てはしらせていくこそいとすゞしげなれ。まして琵琶（車の内にてひく）ときならし笛のねきこゆるは。過ていぬるも口をしく。さやうなるほどにうしのしりがひのかのあやしうかぎしらぬさまなれど。うちかゞれたるがをかしきこそ物くるほしけれ。いとくらやみなるに。さきにともしたる松の煙（炬火）の香の車にかゝれるもいとをかし」

「五日のさうぶの秋冬過るまであるがいみしうしろみかれてあやしきを。ひきをりあげたるに。其折の香のこりてかぐへたるもいみしうをかし」

「是亦一段」

「よくたきしめたるたき物の。きのふ。をとゝひ。げふなどはうち忘れたるに。きぬを引かつぎたる中に。煙（香の殘りたるこ）ののこりたるはいまのよりもめでたし」

「是亦一段」

「月のいとあかきに川をわたれば。牛のあゆむまゝにするしやうなどのわれたるやうに水のちりたるこそをかしけれ」

おほきにてよき物

法師。くだ物。家。名ぶくろ。すゞりの墨（すみ）。をのこの目。あまりほそきは女めきたり。又かなまりのやうならんはおそろし。火桶（をけ）。ほゝづき。松の木。山ぶき（山ふき櫻の花びら）の花びら。馬もうしもよきはおほきにこそあめれ」

みじかくてよき物

とみの物ぬふ糸。とうだい。げす女の髪（かみ）。うるはしくみじかくてありぬべし。人のむすめのこゝろ」

人のいへにつきづき（帚之）しき物

くりや。侍ひのざうし。ばゝ（帚之）きのあたらしき。かけばん。童（わらは）女（めの）。（世俗のおはしたこ）ばした物。ついたてさうじ。三尺のきちやう。しやうぞ（裝束之應のゑふく）

「百十一段」

くだ物　和名菓。クタモノ菓子之

名ぶくろ　嚢の餌嚢之

かなまり　金椀也前註

ほゝづき

［増］和名酸漿。兼名苑云酸漿一名洛神珠。和名保々豆木

松の木

［訂］活本にはなし

花びら　和名云。蘂。草木花片也

「百十二段」

とみの物ぬふ　急く物を縫糸之

とうだい　灯臺之

人のむすめのこゝろ

舌つきにてあいだれたるやきらへるなるべし

くりや　厨和名

宇彙云。厨烹飪之所。ものを烹調るところ。

侍ひのざうし　曹司は局と同し。今の世の部屋之

かけばん　懸盤貴人の膳に用ゆ。源氏若菜ニ院の御まへに淺香のかけばんとあり

「百十三段」

水のちりたるこそをかしけれ　イ此次に「下すだれを高やかにをしはさみたれば。車のながえばいとつやゝかに見えて。月の影のうつりたるなどいとおかし行付までかくてあれかしとおぼゆ」とあり

しりがひのかの

［訂］活本には「しりかひもしらぬにやあらんかの云々」とあり。万歳抄もおなじ

あやしうかぎしらぬさまなれど

瞰の香なればゝ　狂の字之。あやしき物の香に愛着すればゝ

其折のかのこりて

端午の比香之。イ其折の香のおなじやうにかゞれたるもいみしうおかし云々

いまのよりもめでたし

今燒たる香よりもまさる。或本に此あとに。

「六月廿日ばかりにいみしう暑きに。蟬の聲のみ絶ず鳴出して。風の氣色もなきに。いと木高き木どものおほかるが木くらく青き中より。黄なる葉のやう〳〵ひろがりおちたるこそすゞろに哀なれ。秋の露おもひやられて。おなじ心にいみしう暑きひるなかに。いかなるわざをせんと。扇の風もぬるく詫しければ。氷水に手をひたしなどあつかひて。只今何ばかりなる事あらんに。此暑さを忘れて心うつす事ありなんやさいふほどに。あたり匂ふばかりなる薄やうを。なでしこのいみしう色こきにむすびつけたる文をさしいれたるこそ。出つらんほどのあせおもひやるも。心ざしあさくはあらじと思ふに。かくつかふ扇だにあかずぬるくおぼえつゝ扇もうちおきて。まづひきあけつべけれ云々とあり

童女。はした物　イ本おほきやかなる童女。
　ふきはした物とあり
かき板
[訂]活本になし
[増]かき板とは。物を載せてかきもて運ぶに
　用る板ノ。前後二人して持つ板ノ
ひさげ　でうし　中のばん
[訂]此三は。万歳抄。イ本。活本。に皆なし
中のばん　中盤懸盤の次なるを云ノ。河海云延長御記曰采女調三和若菜羹二供進給二侍臣一盛二中垸一置二中盤一下畧
[増]眞云。懸盤とは異ノ。大盤に對して。小なるを中ばんと云ノ
ひぢをりたるらう　臂折廊ノ。廊のをれまがりゆくノ
[増]源臣は折臂翁なるべしとの說あれど。取らず
ちくわうゑかきたる　竹鶯畫也。桐火桶などに竹に鶯などゑにかきしノ
[増]此の竹鶯の說は甚非ノ。万歳云。ちくわうゑ或本に竹王綸とあり。作り綸と有しなかきひがめたるにやとあり
　眞云。万の說よろし。是に從ふべし

物へいく道に
[増]こは別段ノ。是より以下次々も皆別段にて例の筆すさびノ

物へいく道に。きよげなるをのこの。たて文のほそやかなるもちて。いそぎゆくこそいづちならんとおぼゆれ。又きよげなるわらはべなどの。あこめいとあざやかにはあらずなへばみたる。けいしのつやゝかなるが。かはにつちおほくついたるをはきて。まろきかみにつゝみたる物。もしは草紙どもなどいれてもてゆくこそ。いみじうよびよせて見まほしけれ。門ぢかなる所をわたるのかざりを風流にせしノ
くよくしたるゑぶくろ。からかさ。かき板。御厨子黒棚ノ
げ。てうし。中のばん。わらうだ。ひぢをりたるらう。ちくわ
うゑかきたる火をけ」
圓座ノ

けいし　前にも出たり革付のはき物ノ。後世の足駄の類ノ

つゝみたる物
[訂]活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つかふらん人こそ
　其從者のすげなきをつかふ主人もさぞなどおもはるゝことノ

上達部君だちなどの
行幸には公卿以下歩行にて供奉なればノ

よろづの事よりも
是より行幸に上達部の車のなきがさうゝしきさいひしに付て。車の見ぐるしげなるがわろき事どもをいふノ
說經などはいとよし
說經聽聞の車などは卑うしなふ後世のためなれば。さまで風流に花麗ならでもよしとノ見でありぬべし
て文字にごりてよむノ。祭見る車見ぐるしくは見すしてあれかしとノ
たゞ其日のれうにて
祭見んためにとてとノ。是より祭の物見車は花やかに有たき心をいふノ
したてゝ
[訂]原本したてしとあり。今活本古本により改めつ
何しになど　かく人におとるさまにては何しに物見に出たるぞと覺るとノ

よき所にたてんといそがせば
物見のたよりによき所を。人よりさきにとおもひて車をいそがせ催したる心ノ

よびいるゝに。あいぎやうなく返事もせでノ　愛敬ノ
つかふらん人こそ
行幸はめでたき物。上達部君だち車などのなきぞすこし
寂々さびしき心ノ
さうゞしき」
車の裝束ノ

よろづの事よりも。わびしげなる車にさうぞくわろくて
物見る人いともどかし。說經などはいとよし。つみうしなふかたの事なれば。それだに猶あながちなるさまにて見ぐるしかるべきを。まして祭などは見でありぬべし。下すだれもなくてしろきひとへうちたれなどしてあめりかし、たゞ其日のれうにとて車も下すだれもしたてゝ。いとくちをしうはあらじと出たるだに。まさる車など見つけては。何しになど覺る物をましていかばかりなる心ちにてさて見るらんおりのぼりありく君だちの車のおしわけてちかうたつ時などこそ心ときめきはすれ。よき所にた

ねはり
[增]渡按。ねはびこりの意ならんか。居ながら車簾をはるといふ事いかゞ

七つやつ
[訂]万歳本。活本。素本。皆七へ八へとあり

御前どもにすゝはん
前駈の人々に水飯して湯づけなどやうの物をくはするこ

すだれもあるかぎりさりおろし　齋院へおそるゝさまこ。イ本ながえどもさは。車の轅をおろし。牛をはなちたるさまこ。是も禮儀なるべし

人だまひひきつゝきて
副車。延喜式。和名云。漢書註云。副車ソヘクルマ。ヒトダマヒ後乘也。河海云。人給。後國細記。幡記有三此名一出車二云々。花鳥云。出車は公方より點ぜられて。其人に給ふゆゑに人給と名付る也

てんと急せば。とく出てまつほどいと久しきに。車の簾を居張こ。るはりたちあがりなどまつりをまつていこあつくくるしく。まちこうずるほどに。齋院困こくるしむこのえんがにまるりたる殿上人。所の衆辨少納言など七つや車こ垣下前三註つ引つゞけて。齋院のかたよりこなりにけりとおどろかれてうれしけれ。殿上人の物いひおこせ。所々の御前どもに水飯こするぱんくはすとて。さじきのもとに馬ひきよするに。御前の中に貧家の子などあるこおぼえある人の子どもなどは。ざふしきなどおりて馬の口さるさまこ。馬のくちなどしてをかし。さらぬものゝ見もいれらせ給へば。齋院の御輿こすだれもあるかぎりさりおろし。過させ給ひぬるにまどひあぐるもをかし。其まへにたてる車ぱいみしうせいするに。などてたつまじきぞとしひてたつれば。いひ下人を制しかへて主人にこわるこわづらひてせうそこなどするこそをかしけれ。所もなくたちかさなりたるに。よき所の御車。人だまひひきつゝき

たゞのけにのけさせて
源氏葵巻の車あらそひの所にもざふ/\の人なき障ゐ思ひさだめてみなさしのけさするといへるさまに似たり

人だまひつゞきてたてる
[訂]万歳抄には。人給ひまでたてつゞきて」とあり。イ本には「人たまひまでつゝけさせつる」とあり

うしかけて
いまゝではながえをおろして。しばにたてゝおきしなるべし

ほうどのに　清少の廊の局に忍びてこまりし人。雨ふる曉歸りし事を沙汰せしなるべし

地下などいひても
彼こまりし人の事をいふ也。地下とは昇殿せざる人をいふこ。地下の人ながらめやすき人と世にもゆるされしを。便なくとめまじき人といふがあやしきこと

大がさのかたをかきて
彼御文のさまこ。繪にかゝせ給ふこ

[增]和名抄ニ。簦。史記音義云。簦。俗云大笠　於保賀佐。笠有柄也

ておぼくくるをいづくにたゝんと見るほどに。御前どもの只おりにおりて。たてる車どもをたゞのけにのけさせて。人だまひつゞきてたてるこそいとめでたけれ。おひのけられたるえせぐるまどもうしかけて。所あるかたにゆるがしもてゆくなどいと佗しけ也。きらきらしきなどをばえさしもおしひしがずかし。いときよげなれど。又ひなびもあるぞかしあやしく。ぼすもたえずよびよせ。ちで出しするなどするほそどのにびんなき人なん。暁に笠さゝせて出けるといひ出たるを。よくきけばわがうへなりけり。地下などいひてもめやすく人にゆるされぬばかりの人にもあらざめるを。あやしの事やと思ふほどに。うへより御文もてきて返事只今とおぼせられたり。何事にかと思ひて見れば。大がさのかたをかきて。人ばみえず。只手のかぎり笠をとらへ

させて下に」
后宮
みかさ山やまのはあけしあしたより。
后宮をほめ申之
なほばかなき事にてもめでたくのみお
とかゝせ給へり。
ほえさせ給ふにぞ。はづかしく心づきなき事はいかで御ら
んぜられじとおもふに。
便なき人のよばせしなばちて空事といへるおもしろきにや
さるそらごとなどの出くるこそ
御返事之
くるしけれ。とをかしうて。こと紙に雨をいみしうふらせ
て。しもに
清少
雨ならぬ名のふりにけるかな
なき名たつ事ないへり雨にぬるゝ縁之
さてやぬれぎぬには侍らんとけいしたれば。右近内侍な
どにかたらせ給ひて。わらはせたまひけり」
勘物云二年五月
三條の宮におはします比。五日のさうぶのこしなどもち
てまゐり。くす玉まゐらせなど。わかき人々みくしげどの
后宮の御腹に備子内親王敦康親王などおはすと前ニ註
などくす玉して。姫みやわか宮つけさせ奉り。いとをかし
青參にて調したる菓子之
き薬玉ほかよりもまゐらせたるに。あをさしといふもの
を人のもてきたるを。
清少より后宮へ奉る之
青きうすやうを艶なるすゞりのふ
たにしきて。これませこしにさふらへばとてまゐらせた
れば
后宮御哥
皆人は花やてふやといそぐ日もわがこゝろをば君ぞし
りける
青剌つゝみしうすやうのはしと之
と紙のはしを引やりてかゝせ給へるもいとめでたし」
十月十餘日の月いとあかきに。ありきて物見んとて。女房
こき紅のきぬと之
十五六人ばかり皆こきゝぬをうへにきて。引かくしつゝ
后宮の女房と之
有し中に。中納言の君の紅の張たるをきて。くびより髪を
かいこし給へりしかば。あたらしきぞとてよくもにたま
ひし哉。ゆけひのすけとぞわかき人々はつけたりし。しり
にたちてわらふもしらずかし」
是より五くだり一本になし
成信の中將こそ人の聲はいみしうよう聞しり給ひしか。
おなじ所の人の聲などは。常にきかぬ人は更にえきゝわ

みかさ山　后宮の御連哥なるべし。彼笠さゝせて出たる朝より。さま〴〵人のいふ事あるを仰せらるゝなるべし

はづかしく心づきなき
万事めでたき后宮に心付なきふるまひは見え申まじとのみ遠慮しつるに。かゝろうはさ出來て。しられまゐらせし苦しさよとの

雨ならぬ名の　清少の付句之。心はかゝる名の世にふりて。后宮にまでしられまゐらせじはづかしさよとの心なるべし

右近内侍
三條の宮に　前註す
職御曹司ニ移ニ御ス生昌三條宅一　勘物云。長保元年八月九日自ニ

さうぶのこし
菖蒲輿。禁中へ參るを。后宮へもまゐらせしなるべし。公事根源端午の所に云。六府あやめのこしを南殿の階の東西に立。又時の花を折そへて同くおく。四日は朝餉の庭にこれを立云々。雲圖抄に圖あり

みくしげどの
藥玉は糸所より奉れど。姫宮などには女中何も手づからしてまゐらせらるゝなるべし。拾芥云。御櫛笥殿在ニ貞觀殿中一以ニ上臈女房一爲ニ別當一云々

ませこしに
[訂]原註には。までこしといふに同じ。まゐりこし物なればこそ。とあるは非之。

弘按に。万十二巻廿九丁に「ませこしにむぎはむ駒ののらゆれど猶しこふらくしぬびかねつも」とある意なるべし。万歳抄に。ませこしとは。あをさしは野庭なるものなれば。たゞませこしに御覧するまでにさゝげ奉るとこゝ。今の世も貴人に物奉るは御目にふるゝなどぞいへる

濵按。ませこしにさふらへどとて。とありたし

皆人は花や　みな人は藥玉さして。花蝶と色々細工を急く端午の日も。清少は我心を知て菖蒲を進せて滿足と御戯也

十月十餘日
これより別段なるべし

くびより
源氏浮舟巻ニかみわきよりかいこしてとあり。也足軒御說ニ。髪を腦の下より手に取たる跡之云々。是も首の程より前へ取たるさまにや

あたらしきぞ
[訂]原本。あたらしきそとありて。註に不審他本をかんがふべし。とあり。今活本。古鈔本。イ本によりて改めつ。濵按。ぞとてとある本にてよく。聞えたり。さてよくも似たりしは。下のゆげひのすけといふへかれり。上文にげなきものゆげひのすけのやかうとあり

ゆけひのすけ
左右衛門佐也。赤衣をきる物なれば中納言をたとへしにや

成信の中將　勘物云。源成信兵部卿致平親王男。母左大臣雅信女。長徳四年左中將元民部大輔

[訂]此の一段活本にもなし。黒本云。成信正

光のこと。小世繼廿九段にも見えたり
大藏卿　勘物云。正光。長保二年藏人頭左中將。四年十月大藏卿。愚案參議正光。關白雜通公六男。母左馬頭有年女
見わき聞分ぬ物を
[增]万歲抄云面を見わき聲を聞きわかぬことあり
紋のまつげのおつるほどもろこしに殷師といふ物患耳聾一聞二林下蟻動一謂二之牛鬪一と蒙求にあり。列子湯問篇に。焦螟といふ虫。群飛て。集二於蚊睫一を。世にめふくみ〳〵とき人も。其聲形をえ見聞かぬを只黃帝と容成子と神を以見れば泰山の阿のごとく。氣を以きけば雷霆の聲のごとしと云々
其人だにえき〳〵つけで
彼そばにある人の扇の事いひしが事ノ
塵ばみ　塵のたまれる也。源氏須磨卷にだいばんなどかたへはちりばみてとあり
かさ〳〵しなど云々
[訂]原本かを上に付て成たるが。さ〳〵し」とよみて。註に或說に墨指といふ物ノ云云とあるは非ノ
傍註。たる(旬)がさ〳〵しなど云々。筆のかさノことあり
濵按。さ〳〵しは。今いふ墨挾にはさみてつかふをいふか
女はかゞみ硯こそ心のほど見ゆる　鏡は女のかたち作る物ノ。是おろそかなるは不嗜なる心と見え。ふきは心にくかるべし。硯は手かく人よくたしなむべければ。おろそかなれば手をすかぬ心見ゆべしとノ

かず。ことに男は人のこゝろをも手をも見わき聞分ぬ物を。
成信はひそかにいふ事なもきゝ知給ひしとノ
いみしうみそかなるもかしこうきゝわき給ひしこそ」　奇特なれと含めたり
大藏卿ばかりみゝときゝ人なし。誠に蚊の睫のおつるほども聞付給ひつべくこそ有しか。職の御ぞうしの西おもて　誰と不知イ新中將このねにて物なでいふに
に住し比。大殿の四位少將と物いふに。そばにある人。此少將の事いへとさゝめけば。　清少の詞　大藏卿立給ひてノ　今彼君たち給ひなん
此正光のみゝときをいぶかりてノ
にをと。みそかにいひいるゝを。其人だにえきゝつけで。　イ選くるて　正光の詞ノ我立
何とか〳〵とみゝをかたぶくるに。手をうちて。にくしさ
てのちいはんとの給ふがにくきほどにこそたはふれノ
の給ばやけふばたゝじとの給ふこそ。いかで聞給ひつらんとあさましかりしか」
硯きたなげに塵ばみ。墨のかたつかたにしどけなくすり　勞の字ノ墨の久しくつかはれし心ノ　或說ニ墨指といふ物ノ云々
ひらめかし。らうおぼきに成たるかさゝしなどしたるこそ心もとなしと覺れ。萬のでうどはさる物にて。女は鏡硯　筆おく所のあはひをいふノ
そ心もとなしと覺れ。萬のでうどはさる物にて。女は鏡硯
こそ心のほど見ゆるなめれ。おきぐちのはざめに塵ゐな

[增]濵按。おきくちは。今いふいつかけにて。硯箱のかごの上の方のはざまに塵のあるをいふノ
弘云。原註に。筆をおく所のあはひをいふノ。とあるは非ノ。今削り去りつ
こよなし　無越ノこゆる事もなく齟相に捨置たるさまノ

とあれどかゝれど
よくもてなしても。あしくても。物かけばおなじ事にて。是より物にかまはぬ硯のさまをいふノ
くろばこのふたもかたしおち　蒔繪せぬ黑染の硯箱の蓋のふちのかた〳〵かけたるなり
あをドのかめの　青磁龜也。燒物の水入の龜の形なるノ

猶つかふもあやにくノ
文惡ノ。進退しにくき心ノ。人にいはれて筆を置も人めわろし。猶つかふも如何と迷惑したる心ノ
[增]弘按。文惡ノとあるは非ノ。あやよくのあやは。あやまりこゝなどのあやと同言にてあやはいやノ同ト。いよ〳〵よくきノ。故にあやにくは。いよ〳〵よくきノ。即イヨイヨ人ヲロシの意ノ
さおぼゆるもしりたればさやうに迷惑なるも思ひしりたればとなり

ど打捨たる樣こよなしかし。男はましてふづくゑきよけ　文机
におしのごひて。重ねならずはふたつかけでの硯のいとつきノしうつきノ　二懸子の硯ノ
筆のさまなども人のめとむはかりしたてたるこそをかしけれ。とあれどかゝれどおなじ事とて。くろばこのふたもかたしおちたる硯。わづかにすみのゐたる。　墨ばかりある心ノすりかけの墨ノ　面白き詞なるべし
ちりの此世にかたけなるに。水うちながして。あをじのかめのいはらひがたきなるに。水うちながして。あをじのかめの口おもて。　ひと目わろき心ノ　龜の首斗見えたるノ
くびのかぎりあなのほど見えて人わろきなども。つれなく人の前にさし出かし。人の硯を引よせて手習　是より又別の事ノ
ひをも文をもかくに。其筆なつかひ給ひそ。といはれたらんこそいとわびしかるべけれ。うちおかんも人わろし。猶つかふもあやにく也。さ覺る事もしりたれば。人のするもいはで見るにあやにくに。手などよくもあらぬ人の。さすがに物かゝ　人の我筆つかふをもノ　よからぬあり
まほしうするが。いとよくつかひかためたる筆を。あやし

水がちに
[增]濺按。墨汁を多くふくませたるをいふか
こはものやりと
あとなし事をめたと書付たるさまにや
[訂]こはいさゝか解しかたし。今万歳抄の説によれば
こは(句)ものや(句)やりと(句)なに(句)ほそびつのふた云々。といふことにて。これは物や遣戸か何やほそひつなどいろ〳〵の物をいふとあり
ほうびつのふた
ぬり桶之前ニ註
されどさいはんやは
さやうに悪くつかひなすとて。其筆なつかひ給ひそともいふべき事ならればせんかたなしと之
さしのぞきたるを見つけ
我のぞくを人見付て驚てさがめらるゝも侘しきとふくめたる詞之。ハはれたるもと句を切べし
おもふ人の事
是はよのつねの人のさがめたるが侘しきをいふ之。思ふ人をのぞきさがめられし事にはあらずと之

あしこまでもゆきつかざるらめど　あしこはかしこ之。其文いまだ彼地まで行付まゝけれど。我心はまづおちつく心之

げにことわりにや
文をめでたき物といふは。まことにことわりならずやと之。イ本此次に。川はあすか川ふちせさだめなくなどあり。前に出たれば今其本を用ず

もとへとてこまぐ〳〵とかきておきつれば。いまだ其文やられねども先心はなくさむと之
をもなぐさむことここちするに。まして返事見つれば。命をのぶべかめる。げにことわりにや」

のやうに水がちにさしぬらして。こはものややりと。假名にて之かなにほうびつのふたなどにかきちらして。筆をなげ捨たる之よこさまになけおきたれば。水にかしら筆の頭之ばさしいれてふせるもにくき事ぞかし。されどさいはんやは。人のまへにゐたるこそ又わびしけれ。さしくらあふよりたまへといひたるこそ前をうけていふ之又わびしけれ。あな奥へより給へと之あら聞やと之のぞきたるを見付ては。おどろきいはれたるも。句おもふ人なくいかならんとおもふに。文をみれば只今さしむかひたるやうにおぼゆる。文のめでたきをほむる詞之いみしき事なりかし。我思ふ事を書やりつれば。あしこまでも行つかざらめど。こゝろゆく心ちこそすれ。文といふ事なからましかば。いかにいぶせく今さらにいふべきなられど之目くれ胸ふたがる心之

百十四段

うまや　今の馬つぎ宿々也。和名云驛ムマヤ。唐令云毎三十里一驛。若地勢險阻及無二水草一處隨レ緣置レ之。延喜式凡諸國驛路邊植二蔬菓一令下往來人得中休息上

もち月のうまや

[訂]活本に。月のうまやとあり

なしはら　梨原。和名云近江栗本郡梨原

のぐちの　野口。和名云丹波船井郡。又周防玖珂郡

[増]万歳抄云。河内之。信實の歌に「しらざりし野口のさとに宿かりてみちの芝生にいまぞあさたつ」

山のうまや　和名云。伊勢員辨郡野摩ニヤ。同云越後古志郡夜麻

百十五段

ふなをか　山城紫野邊彈所也。古は清淨の地之。三代實錄云。置仲舒祭法螟蟲賊害五穀之時。於二害食之州縣內一清淨處解レ之攘レ之。故命二陰陽寮一於二城北船岡一修二此祭一。蓋擬二清淨之處一

ともをかはさゝの　和名山城乙訓郡駒岡。梁塵秘抄神樂採物哥「このさゝはいづこのさゝぞとれりがこしにさがれるともをかの笹」

かたらひのをか

[増]濱按。万歳に「さ夜ふけてかたらひの岡の郭公ひとりねざめの床にきくかな」とあるは何に出たるにかおぼつかなし。もしはかたらひはかたこひの誤か。六帖をか「みちのくにありといふなるかたこひのをかを我身にそふるころかな」と見えたり

人見のをか　住吉物語に。嵯峨野へ子日に出て「手もふれでけふはよそにて歸なん人見の岡の松のつらさよ」

百十六段

ふるのやしろ　延喜式。大和國山邊郡石上坐布留御魂神社。日本紀神代卷そさのをのみこと八岐の大蛇をさり給へる劔を。蛇の麁正と名づく。是今石上にいます由見ゆ。神皇正統記ニ神武天皇甲寅布津といふ劔を宇

やしろは

ふるのやしろ。いくたの社。たつたのやしろ。はなふちの

うまやは

なしはら。ひくれのうまや。（未勘）

もち月のうまや。（信濃にや）

の有しかは。猶とりあつめてあはれ也」

まや。山のうまや。京（是より筆すさひ之）

まや。哀なる事を聞置たりしに。又哀なる事

廉志間見命に給へり。其劔を石上にあがむる由みゆ。神中抄ニ昔女河邊にて布を洗ひしに。河上より劔流きて。万の物を皆きり破りしが。此布にまつはれてとゞまりしを。此社に祝故に。布留とはぬのにとゞまるとはかけり云々。三代實錄ニ清和天皇貞觀九年三月十日大和國石上神加ニ正一位ニ云々

[訂]万歳抄に。ふるのやしろなし

いくたのやしろ　津の國八部郡と延喜式にあり。日本紀ニ神功皇后の時天照太神のもうつ稚日女尊われ。活田長峡の國に居んと教給ふにより。海上五十狹茅をもて祭らしむ

[訂]活本に。いくたの社なし

たつたの　延喜式ニ大和國平郡々立田坐天御柱國御柱二座云々。日本紀天武天皇四年四月。美濃國佐伯廣庭に風神を龍田の立野にまつらしむ

はなぶちの　陸奥宮城郡鼻節神社延喜式にあり。シヒチと通ス

みくりの　美久理神社。越後沼垂郡。延喜式

すぎの

[増]こは三輪の社の事ㇾ。古今集に「我庵はみわの山もとこひしくはとぶらひきませ杉たてる門」

貫之集に。大神のまつりに詣てゝ「いにしへの事ならずして三わの山みゆるまでしは杉にぞ有ける

ことのまゝ　文德實錄二曰。嘉祥三年七月遠江國任事社授ニ從五位下ㇾ

さのみきゝけんとや　古今俳諧哥「ねぎ事をさのみきゝけん社こそ巢は歎きの森となりなめ」

やしろ。みくりの　三輪にや

し。ことのまゝの神社ㇾ　喜式云々いふ事のまゝにれかひをかなふべきやうなれば額

いばれ給はんとおもふぞいとをかしき。ありどほしの明神。貫之が馬のわづらひけるに。此明神のやませ給ふとて

哥よみて奉りけんに。やめ給ひけんいとをかし。此ありどほしとつけたる心は。誠にやあらん。むかしおはしましける帝の。只若き人をのみおぼしめして。四十に成ぬるをばうしなはせ給ひければ。人の國のとほきにいきかくれなどして。更に都のうちにさる物なかりけるに。中將なりける人の。いみしき時の人にて。心なども賢かりけるが。七そぢちかき親ふたりをもたりけるが。かう四十をだにせいほうしとつけたる心ばへ。法度の心ㇾあるにましていとおそろしとおぢさわぐを。いみしうけうある人にて。とほき所には更にすませじ。一日に一度見でばえあるまじとて。みそかによる〳〵家の内の土をほりて其うちに屋をたてゝ。それにこめすゑて。いきつゝ見る。おほやけにも人にも。うせかくれたるよしをしらせてあり。などてか。家に入るたらん人をばしらでもおはせかし。うたてありける世にこそ。」おやは上達部などにや有けん。中將など子にてもたりけんは。いと心かしこく萬の事しりたりければ。此中將わかけれど。ざえありいたり賢く

宗祇云。ねぎ事は神にいのる心をいふㇾ。それを戀にとりて。あだなる人のこなたかなたよりあはまほしき心をいふをさくにそへたり。あまり心よわきは後の歎きとなる義ㇾ事任といふ名に付て此哥を引ていへる歟ㇾ

ありとほしの

[訂]活本。貫之が馬のわづらひけるに此明神の」といふ十六字なし

[増]濱按。蟻通明神は式外の神ㇾ。延喜式を引て和泉郡と註されしは例の無稽ㇾ。式に阿理莫神社と有は異ㇾ。蟻通は今現に日根郡にあり（弘云日根郡長滝村北に有と云）泉州志卷五云。按歌林良材神社考。載蟻通事者。本雖依杭草子。闕疑取其餘也。如別蛇雌雄。知木本末。釋迦既所說山詩集云。元和辛酉孟夏十九日。自泉堺至信達。其道中有蟻通神廟焉。昔孔子以絲繫蟻貫九孔螺事在祖庭事苑。（神社考云万書統宗）皆聖人拘々而爲之哉。蓋好事者以小知託之聖賢。以參於俗而已。然智計之闕于世。亦必不爲不然矣。夫此神之著名也。亦以此。其後紀貫之之在於泉州也。過此不下馬。馬忽不進。貫之詠和歌馬不斃。爾來虛名蓋著云。一蠏九穴蟻貫絲。外國彌知我計奇。知亦多端何足稚。却思齊后破甕時。四峰今在記云。蟻通事。雖未詳時世及中將父子姓名。舊俗土記之傳。其來尚矣。或又曰。唐求厥繩。此神燒繩而不散付之。其博識居多。獨以蟻通名其社者。蓋以其最在後。而禁非望在此也。（以上清水本にあり）河社卷二云。雜寶藏經第一云。（始畧）佛言。過去久遠有國名奢彌。彼國土中有老人者。皆遠疆奢。有一大臣。其父年老。依如國法。應在疆遣。大臣孝順。心所不忍。乃深堀地。作一密屋。置父著中。隨時孝養。爾時天神。捉持二蛇。著王殿上。而作是言。若別雄雌。汝如國得安。若不別者。汝身及國。七日之後。悉當覆滅。王聞是已。心懷懊惱。即與群臣。參議此事。各自隨謝。稱不能別。即募國界。誰能別者。厚加爵賞。大臣歸家。往問其父。父答子言。此事易別。以細而大物。停蛇著上。其躁擾者。當知是雄。即如其言。果別雄雌。（中畧）天神又以一樹檀木。方之正等。又復問言。何者是頭。若臣智力。無能答者。臣又問父。父答言易知。放著水中。根者必沉。尾者必浮。即以其言。用答天神。（中畧）天神歡喜大遣國王。珍奇財寶。而語王言。汝今國土。我當擁護。令諸外敵。不能侵害。王聞是言。已極大踊悅。而問臣言。爲是自知。有人教汝。頼汝大智。國土安。既得珍寶。又許擁護。是汝之力。臣答王言。非臣之智。願施無畏。乃敢奏陳。王言。設汝今有万死之罪。猶尚不問。況小罪過。臣老親をおくㇾ

時の人とおぼす成けり　帝の御心にも。此中將を當時の賢良とおぼしゝ。老父の後見ありし故なるべし

いとほしくて　此詞淺きに似て意味あり。帝かくおろかにおぼして老人を捨給ふ故天下の人うとみまぬらせて。此他國のうかゞふ雛をもすくはんとおもふ人なければ。中將はさすがにいとほしく思ひまぬらするとゝ

さきにして行かたにしろしをつけて
老父のをしへしごとく水のさきにしてながるゝかたを末としろしてなり

して。時の人におぼす成けり。もろこしの帝（みかど）この國のみか（是も此帝おろかにて老人を捨給ふ心ある故に他國よりもうかゞふなるべし）どを。いかでばかりて。此國うちとらんとて。常に心見（イ心見事をし）あらがひ事をしておくり給ひけるに。つや〳〵とまろにうつくしげにけづりたる木の二尺ばかりあるを。これがも（此國人いづれも若くて分別なかりし故と）と末いづかたぞとひ奉たるに。すべてしるべきやうなければ。帝おぼしめしわづらひたるに。いとほしくて。おや（中將の心と）のもとにゆきて。かう〳〵の事なんあるといへば。只ばや（老父の詞と）からん川にたちながらよこさまになげ入見んに。かへりてながれむかたをすゑとまるしてつかはせとをしふ。まてながれむかたをすゑとまるしてつかはせとをしふ。ま（教と）ゐりて我しりがほにして。心見侍らんとて。人々ぐして。なゝ（中將參內してと）ゆいれたるに。さきにして行かたにまるしをつけてつか（それと）はしたれば。まことにさなりけり。又二尺ばかりなるくち（蛇と）のもとにゆきて。かう〳〵の事なんあるといへば。二正と）なはのおなじやうなるを。是はいづれか男女とて奉れり。（親に問と）又さらに人えしらず。れいの中將ゆきてとへば。（親の教ろ詞と）

七わたに　七曲と

いみしからん物の上手ふようならん
至たる物の上手も此玉には緒をえさほさゝさと。ふようは不用と

又それに今すこしふさきをつけて　蟻の腰にはほそきをつけて。又玉を貫くべき緒に今少ふさきをせんとて。申しつきといふ物にせしと
みつをぬりて
蜜の香につきて蟻のよくゆくべきがためなるべし。イみちとありおなじ事と。源氏鈴虫にみちをかくしほろゝけてとあり。是も蜜と

らべて尾のかたにはほそきすばえ（木のえたと）をさしよせんに。をばた（尾動と）らかさんをめとし（女と知れとと）しれといひければ。やがてそれを內裏（たゞり）のうちにてさしけれ（さやうにすると）ばしけるにわだかまりたる玉の中とほりて。左右に口（緒と）うて。七わだにわだかまりたる玉の中とほりて。左右に口あきたるがちひさきを奉りて。これにをとほしてたまはらん。此國にみなし侍る事なりとて奉りたるに。いみしからん物の上手ふようならん。そこらの上達部よりはじめて。ありとある人しらずといふに。（そこばくと）又いきてかくなんといへば。おほきなるありを二つとらへて。こゝにほそき糸をつけ。又それに今すこしふときをつけて。あなたの口にみつをぬりて見よといひければ。さ申て。ありをいれたりけるにみつのかをかぎて。まことにいとうあなのあなたのくちに出にけり。さて其糸のつらぬかれたるをつかは

百十七段

日本　ひのもとといよむべし。又日本紀をやまとふみとよめばやまとともよむべきにや

只老たる父母の
是中將我父母の事をいふにあらず。すべて世人の父母をゆるされん事をいへるなるべし。其中に我父母の事はこもれば之。目連尊者我母の地獄にあるをすくはんとするに。あまれく一切の衆生の盂蘭盆をおこなはしめて。其母をもうかましめ給へりし。佛の方便とおなじかるべし

なゝわたに　七曲之。哥の心明之。袋双紙にも此哥蟻通明神の御哥とふるして。是昔彼社の邊に旅客の宿れるに。夢に示し給ふ哥云々。これも枕双紙に付ていへるにや

したりける後になん。猶日本はかしこかりけりとて。のちくはさる事もせざりけり。此中將をいみしき人におぼしめして。何事をし。いかなるくらゐをか給はるべきとおぼせられければ。さらにつかさ位をも給はらじ。只老たる父母のかくれうせて侍るをたづねて。都にすまする事をゆるさせ給へと申ければ。いみしうやすき事とてゆるされにければ。よろづの人のおや是をきゝてよろこぶ事みしかりけり。中將は大臣までになさせ給ひてなんありける。さて其人の神になりたるにやあらん。此明神のもとへまうでたりける人に。よるあらはれてのたまひける」

なゝわだにまがれる玉のをゝぬきてありとほしともしらずやあるらん

との給ひけると人のかたりし」

ふるものは

百十八段

雪あられみぞれはにくけれど

[訂]活本には。雪にくけれどみぞれのふるにあられ」とあり

又次なる雪はの二字。下の結尾にある庭の一字も活本にはなし

雪はひはたぶき

檜皮ぶきにふりたるがおもしろしと之。次にあられは板屋といふも同ト

入日

[訂]此の二字活にはなし

うすきばみ　薄黄之。堀河百首「日なしの色にたなびく薄雲を雪けの空と誰か見ざらん」

百十九段

雪。あられ。みぞれはにくけれど。雪のましろにてまじりたるをかし。雪はひはだぶきいとめでたし。すこしきえがたになりたるほど。又いとおほうはふらぬが。かはらのめごとに入て。くろうましろに見えたるいとをかし。しぐれ。あられはいたや。霜も板屋。庭」

日は

入日。いりはてぬる山ぎはに光りの猶とまりてあかう見ゆるに。うすきばみたる雲のたなびきたるいとあはれなり」

月は

有明。東の山のはにはそうて出る程哀也」

星は

すばる。ひこぼし。みやうじやう。夕つゝ。よばひぼしをだになからましかば。例の書さしたり」

雲は

百二十段

すばる　昴星。和名六星の火神云々

みやうじやう　明星。和名に阿加保之とよめり。神楽哥吉々利々に。あかほしやみやうトやう云々

夕つゝ　長庚。和名太白星の一名之。暮に西にあらはるゝ星之

よばひぼし　流星。和名天津星にしもかゝる名をさへつかずはさたはむれし詞之

百二十一段

明はなるゝ云云
[訂]是より結尾のあはれ也に至る六十餘字活本になし

百二十二段

朝に去色　古詩の詞なるべし未考
[增]文選宋玉賦に朝爲行雲暮爲行雨などの意にや

霧は
[訂]此段原本にはなし。今万歳抄によりて補ひつ

百二十三段

はしり火　おく螢など飛火するをいふにや。むねはしり火など哥によめり
[增]古今集俳諧歌に。小野小町
「人にあはんつきのなき夜は思ひおきてむねはしり火にこゝろやけなり」
さきのさばくふ　未勘。但齋の産飯を屋根にうちあけしをあらそひくふをいふにや

十八日清水に
世に十八日を觀音の日とする事。勝尾寺の觀音を。妙觀といふ人寶龜十一年七月十八日より。僧俗童など十八人して。千手の像四天皇等卅日に刻み終りて。八月十八日に妙觀うせたり。彼十八人も見えずなりし。これより國俗十八日を觀音の日とするよ。
元亨尺書
ないがしろなる物
[訂]原註に。しどけなきものといふ義よ。源氏空蟬巻にある詞よとあるは非よ。今削り去りつ。万歳抄に無禮に侮どる心よとあるもあたらず。ないがしろは無か代下ニフ義よ。俗になき同樣などいふ意よ

百二十四段

かみあげたる　髪を下すしてゆひたるさまよ
からあやのかはのおび　唐繪の革帶にや。凡革帶は惣名にて。其付たる金玉石角にて名をなす物よ。或は白玉の帶。隱文帶。馬璟帶。紀伊石帶。出雲石帶。班犀帶。烏犀帶のたぐひ。順が和名に委あり。桃花藥葉にもあり。唐繪革帶可尋之
[增]万歳抄に云。からあやをまき繪にしたるよ
ひとりのふるまひ　通世の聖の進退は世にへつらふ心なき故にないがしろなるべし

ことばなめげなる物

百二十五段

なめげ無禮よ
宮のめの　宮の部。巫祝の類よ。巫祝は神になれておのづから無禮の詞もまとるにや。又神にほこりてその祭文よむ詞。人に無禮の事あるにや

女官どものかみあげたるすがた。からあやのかはの帶のうしろ。ひじりのふるまひ

ことばなめげなる物

宮のめのさいもんよむ人。舟こぐ者どもも。かんなりのちんの舍人。すまひ」

かんなりのぢん　公事根源云。雷鳴陣とは。昔雷聲三度高く鳴侍れば。大將以下近衛の次將まで。弓箭を帶して御殿の孫廂に候下て帝を守護し奉りしよ。將監以下は皆褰笠をきて南殿に侍ふ。是を雷鳴陣とは申よ。大内の襲芳舍をば雷鳴の壺とも申にや云々。猶西宮記に委し。舍人とは將監以下府生近衛等を云よ。此時近衛の隨身威勢によりて詞無禮なる事あるにや
すまひ　七月相撲の節とて禁中にあり。其相撲人どもを云よ。皆勇力の者なれば。我力を頼て人を輕んじ無禮なるにや

百二十六段

さかしき物
[增]賢の字などの意にてかしこきものゝ事よ

さかしきものゝみとせご。ちごのいのりはらへなどする女巫よ

いまやうのみとせご　むかしは三年に成て足たゝぬためしもあるに。今やうは賢きなるべし
もののぐこひ出て　被のぐにすべき紙麻などの類を請出るよ
おのが口をさへひきゆがめて　きれぬ刀にてりきみてたちきるさまよ

もゝ。物のぐこひ出て。いのりの物ども五十串幣などよもつくるに。紙あまたきれがたき刀よ
おしかさねて。いとにぶきかたなしてきるさま。ひとへだ幣などになりしよにたつべくも見えぬに。さる物のぐと成にければ。おのが

何の宮の其殿の
小野宮殿西宮殿などのたぐひにや
其人々めしたりけれど
其陰陽師其かんなぎなどめしたれど〳〵
しれたるものそひし
愚痴なる男にそひぬたる事ㇾ
さかしき人を　賢き男をも押てさかしがる
さまㇾ。イ本をしへなど〳〵は賢き男をも後
見せんとの議ㇾ

上達部
公卿の事ㇾ
[訂]万歳抄には。是より以下宮仕所はまての
五段は上にもいへるが如く上文九十七段し
たりがほなるもの〳〵前に入る
春宮大夫　百寮訓要云。可レ然公卿大納言以
上これになる。規模の官ㇾ。名家の人など
はなるべからず。坊中の事は大夫執権ㇾ
左右の大将　左近衛右近衛の大将ㇾ。百寮訓要云。近衛府といふは。君を近くまもり奉る武勇の職也。又云。府のかみと申は近衛の大将ㇾ。執
柄三家の人々殊に執する職ㇾ。大臣などよりも大納言の兼官ㇾ。中納言の大将はまれなる事也。弓箭を帯する武官ㇾ。愚案大将相當の位從三位
ㇾ
権大納言　大納言をおほい物まうしのつかさとよめり。百寮訓要云。天子の喉舌の官也。下の申す事を上へ申。上の事を下へのぶる職ㇾ。環翠

口をさへひきゆがめて。おしきりめおほかる物どもしで
かけ。竹うちきりなどしていとかう〳〵しうしたてゝ。う
ちふるひいのる事どもいとさかし。かつは何の宮の其殿
の若君いみしうおはせしを。かいのごひたるやうにやめ
奉りしかば。ろくおほく給ばりし事。其人々めしたりけれ
ど。まるしもなかりければ。今に女をなんめす。御とくを
見る事などかたるものそひしもをかし。げすの家の女ある じ。しれた
るものそひしもをかし。まことにさかしき人をしへな
どすべし」

上達部は

春宮大夫。左右の大将。権大納言。権中納言。宰相中将。三位
の中将。春宮権の大夫。侍從宰相」

君達は　執柄大臣などの息を申す。華族とも清華ともいへり。近代は中院。閑院。花山院を三家といふ。是清華也。三條西園寺。德大寺これを閑院と云ㇾ。其外菊亭。大炊御門。久我。轉法輪等も清家ㇾ。但清少の頃は。いまだ三家などもきだまらざりしころなるべし
頭辨　藏人の頭にて。辨官をかれたるなり。百寮訓要云。藏人頭は殿上を管領す。惣ㇾて殿上の貫首ㇾ。重代の人々君達も名家も殊に器量を撰びて任ぜらるゝㇾ。辨は左右の大辨中辨小辨。權辨一人ありて七辨ㇾ。百寮訓要云。其器量にあらざれば。辨を去る。其故に頭辨を規摸とするとㇾ
頭中將　藏人頭を兼たる中將ㇾ。職原抄に頭二人のうち羽林方に一人補レ之云々是ㇾ
權中將　別儀なし
四位少將　少將は相當正五位下なるに。四位に叙して其まゝあるを叙留といふ。叙留は是殊恩也。近代人ごとに叙留す。又四位の後拜任又常事也。職原にあり
藏人辨　これ五位藏人にて。辨官を兼たる也。職原抄に。藏人に補して。辨官を兼る。これを至極の朝奨とすといへる也。奨は勸也
藏人少納言　五位藏人にて。少納言を兼たる也。少納言はすないものまうすつかさとよむ。環翠云。奏二宣少事一故少納言といふ云々。百寮云。詔勅宣下などの事をつかさどる。名家の人も儒者も誰もなるㇾ。これは昔代の者任ずるㇾ。故實なき人はならぬ事ㇾ。職原云可然諸太夫花族又任レ之
春宮のすけ　百寮云。春宮亮殿上の四位可レ然人任レ之。殊可レ撰二器量之人一
藏人の兵衛佐　五位藏人兵衛佐を兼しㇾ。兵衛ば。百寮云。これも禁中警固の官也。門外をかためむ。衛門府のごとし。又行幸行列の事をつかさどる。又宮中巡撿する官也

君達ぱ

頭辨。頭中將。權中將。四位少將。藏人辨。藏人の少納言。春
宮のすけ。藏人兵衛佐」

九十四段

法師は　律師。内供」

法師は
律師　弘安禮節ニ律師准ニ五位。釋氏要覽云。律鈔解題云。佛言善解ニ一字ニ名ニ律師一一字者律字也。寶雲經云。具ニ足十法ニ名ニ律師一下略
内供　内供奉ニおなじ。官職便覽云。寶龜三年三月始置ニ内供奉十禪師ニ云々。猶綾日本紀ニ委。當時は山門ニ三口。園城寺ニ七口。各相傳の職ニとする歟

九十五段

女は　内侍のすけ。ないし」

内侍のすけ　尚侍につづく女官ニ。職原道加云。典侍四人相當從四位。掌同ニ尚侍一。唯不レ得ニ奏請宣傳一者無ニ尚侍一者得ニ奏請宣傳一ないし　掌侍ニいふなり。職原追加云。掌侍相當從五位。掌同ニ典侍一。唯不レ得ニ奏請宣傳ニ云々。禁秘抄云。掌侍六人正四人權二人權自ニ上古ニ有ニ之。此内以ニ二内侍一爲ニ勾當ニ簡ニ補日ニ爲ニ二人ニ也。又曰叙ニ靈渡時内侍二人直取レ之。只時典侍傳レ之授ニ次將ニ號ニ陰内侍一

九十六段

みやづかへ所は　内。后宮。其御はらの姫宮。一品の宮。齋院はつみふかけれどをかし。ましてこの比はめでたし。春宮の御母女御」

みやづかへ所は　女房のつかへまつるべき所ニ之
内　禁中ニ之
一品の宮　親王は叙品のいち一品二品三品四品など申ニ之。一位ニ位とは不申ニ之。こゝは内親王の御事なるべし　經佛をもいみて申
齋院はつみふかけれど　子染紙といへばニ之。選子内親王賀茂の齋院におはせし時「思へどもいむとていはぬ事なればそなたにむきてれをのみぞなく」
春宮の御母女御　或本に此次ににくき物はめのとのをとここそはあれなどいふ事あり。然とも前に出たれば今此本にまかせて不用
[訂]活本にも此の次ににくきものとありて「めのとの男ここそあれ云云より。小一條院をは今内裡といふ云々の一段あり。此抄にはこの事上の二の巻に出たり

百廿七段

身をかへたらん人などは　かくやあらんとみゆるもの

身をかへたらん人などは
イ本身をかへて天人などはかうやあらんと見ゆるものはとあり

御めのとに　一宮春宮などの御乳母なるべし
御前にそひふし　后宮女御などの御前にて兒にそひふしぬるニ之

ざふしきの藏人に
藏人所の雜色也。必藏人になる物なり。禁秘抄云。雜色は本員八人。代々皆轉ニ藏人一云々
みこともたりし　賀茂臨時祭に。所の雜色。或所衆など御琴をかく事あり。江次第十云。於ニ竹壷邊一發ニ哥曲一所雜色若衆昇ニ御琴一云々
外よりなりたるなどは　雜色ならで外の人の藏人に成たるニ

かはのおび　革帶前註。かたつきたるとは紋などなるべし
ひきはこえて　[增]此詞上の七巻八巻にもありて。七巻に委くいへり。引きふくらしたるニ
むらさきのさしぬき　うへのきぬに指貫は今衣冠といふ裝束なるべし
あこめのくれなゐならずは　たゞの女房にてさふらふ人の。御めのとになりたる。からきぬもきず。もをだに用意なく。ぱくぎぬにて御まへにそひふして。御帳のうちをゐる所にして女房どもをよびつかひ。つぼねに物いひやり。文とりつがせなどしてあるさまよ。いひつくすべくだにあらず。ざふしきの藏人に成たるめでたし。こその霜月のりんじの祭にみこともたりし人とも見えず。君達につれてありくぱ。いづくなりし人ぞとこそおぼゆれ。外よりなりたるなどぱ。おなじ事なれどさしもおぼえず」
雪たかう降て今も猶ふるに。五位も四位も。色うるぱしう若やかなるが。うへの衣の色いときよらにて。かはのおびのかたつきたるを。とのゐすがたにひきはこえて。むらさきのさしぬきも。雪にぱえて。こさまさりたるをきて。あこめの紅ならずぱ。おどろ〳〵しき山ぶきを出して。からか

稍也。袍の下に着レ之。紅の稍ならずは山吹色などを出してさ之

ふかぐつ

[增]裝束抄云。史記之麗之政公卿用レ之。尋常甚雨深雪時用レ之

めだう　馬道也。緣つゞきの道之。桐壺の卷にえさらぬめだうの戸をさしこめとあり

色々のきぬどものこぼれ出たるを

[訂]活本には此の十五字なし

北のぢん　拾芥云。朔平門北の陣といふ雖殿陣之

すぐさて

[訂]万歲抄。すぐればとあり

えいをひきこして

后宮の御方の戸あきたれば見やるまゝき用意に冠の纓を顏におほひて過ろこ。おもしろき體義なるべし

[增]濵按。此の說いかゞ此所はさしぬきなどのほころびしを女房達に見あなどられんがはづかしさに。顏をおほふなるべし

百廿八段

たゞすぎ

[增]直に過きゆくこと之

くろにち　拾芥云。凶會日。正月庚寅。辛卯。甲寅。二月巳卯。乙卯。辛酉。下略。猶月ごとに有凶會日は。曆に沙汰しふるすといへど。血忌日天火地火などやうに世人さいふなるべし

五六月の夕かた云々

[增]万歲抄云。こは芝くらべすることなるべし。或云さなへのさま歟

百廿九段

郭公をいとなめく

郭公といふ里語をなめげにうたふ之。なめくとは輕の字無禮などの心なり

ほとゝぎすよ。おれよ。かやつよ。おれなきてぞ。我は田にたつ　是なめくうたふうたふ之。おれよは日本紀に巳の字をおれとよめり。かやつは。源氏玉鬘に。すやつばらさあり。字治拾遺に。くやつといへるにおなじ。世俗にきやつといふ詞之。おれなきてぞとは。巳鳴てよ。哥の心は郭公よ已過時不熟となきてぞ。我らは田に立出て早苗さるとの心之。おれよかやつよは只おのれといふ事のかされ詞之

いかなりし人かいたく

是も郭公の事にや。下句は。中高童生之。鼻すぢこほりてげ高く生付し童を。いかでかおどす人ぞとよ。人さとはかやうにうたひしと例のふくめ書さしたる文跡なるべし

[訂]此說いかゞあらんうけがたし。なかたかわらはおひいかでおどす人と」此詞誤字あるべし。いと解し難し

驚に郭公は云々

[訂]眞云。此一段恐らくは錯簡ならん。既に上に見えたり

弘恭云。活本にも猶本文の如くあれど。こは誤て重復したるなるべし

うづまさに　太泰之。拾芥云。廣隆寺。又號二蜂岡寺一。秦川勝建立藥師云々。猶かの寺の緣起に委

かぎぬきたる子兒のちひさき笠をきて。左右にいとおほくもちて行こそ。すゞろにをかしけれ」

是より別段之

賀茂へまうづる道に。女どものあたらしきのやうなる物を笠にきて。いとおほくたてりて。哥をうたひ。おきふすやうに見えて。只何すともなくうしろざまに行は。いかなるにかあらん。をかしと見るほどに。郭公をいとなめくうたふ聲ぞ心うき。ほと丶ぎすよ。おれよ。かやつよ。おれなきてぞ。われは田にたつ」とうたふに。聞もはてず。いかおひいかでおどす人と」

是より別段之

驚に郭公はおとれるといふ人こそいとつらうにくけれ。

前にもいへる事之

しかぬいとわろし。すべてよるなく物はめでたがたに。うづまさにまうづとて見れば。ほにさをさしたるに。風のいたく吹てよこさまに雪を吹かくれば。すこしかたふきてあゆみくる。ふかぐつ。ぱうくは。

深沓和名　半靴同

などのきはまで雪のいと白くかゝりたるこそをかしけれ」

是より別段之　廊ホソトノ前註

ほそどの丶やり戸いとうおしあけたれば。御湯殿之

めだうよりおりてくる殿上人の。なへたるなほしさしぬきのいたくほころびたれば。色々のきぬどものこぼれ出たるをおしいれなどして。北のぢんのかたざまにあゆみ行に。あきたるやり戸のまへをすぐとて。えいをひきこして。

縕也

ふたぎてすぎぬるもをかし（いぬるもおかし）」

たゞすぎにすぐる物

ほあげたる舟。人のよばひ。春夏秋冬」

ことに人にしられぬもの

人のめおやのおひたる。くろにち

老母之　是より筆すさびこ

五六月の夕かた。あをき草をほそううるはしくきりて。あ

百三十段

さなへとりしかいつのまに
「きのふこそ早苗とりしかいつのまにいなば
そよぎて秋風の吹」古今集

ほをうへにてなみをる
稲の穂を上にして持て田夫の並居るとこ之

百三十一段

なめくぢ　蛞蝓。和名奈女久知
えせ板敷のはゝき　さしもなき板敷をはく
帯之
殿上のがうし　合子にや引入合子など云之。
五器之

百三十二段

たゝ物もおぼえねば　あまりおそろしきゆ
ゑなるべし。女の詞にておもしろきにや

出たる田に。人おほくてさわぐ。いねかるなりけり。さな
へとりしか。いつのまにとはまことと。げにさいつごろ賀茂
ごもの新しき折敷のやうなる笠をきてさいへる所の事之
にまうづとて見しが。哀にもなりにける哉。是は女もまじ
らず。男のかた手にいとあかきいねのもとは青きをかり
もちて。かたなか何にかあらんもとをきるさまのやすげ
に。めでたき事にいとせまほしく見ゆるや。いかでさすら
ん。ほをうへにてなみをる。いとをかしう見ゆ。いほりのさ
まことなり」

いみしくきたなき物

なめくぢ。えせ板敷の帚。殿上のがうし」

せめてあはれなる物

よるなる神。ちかきとなりにぬす人の入たる。我すむ所に
入たるはたゞ物もおぼえねば何ともしらず」

たのもしきもの

すほうしたる　修法之。讀覧など修するこ之
思ふ人の心ちあしき比
我夫など煩ひて便なき比。其友などの頼もしきが。たのもしくいひ慰るこ之
物おそろしき折の
なさなき子ども。女などの心をいふなるべし

いとほしとや思ふらん
何ともおもはざるやらんとふくめし詞之
ある人のいみしう時に
是より前の詞をうけて世にありし事の物がたりをいへるにや

こゝちあしき比僧あまたしてずほうしたる。思ふ人の心
ちあしき比。まことにたのもしき人のいひなぐさめたの
めたる。物おそろしき親どものかたはら」
是より筆すさびこ之
いみしう志たてゝむことゝりたるに。いと程なくすまぬ
この。さるべき所などにてまうとにあひたる。いとほしと
や思ふらん。ある人のいみしう時にあひたる人のむこに
なりて。一月もはか〳〵しうもこでやみにしかば。すべて
いみしういひさわぎ。めのとなどやうのものは。まが〳〵
しき事どもいふもあるに。其かへる年の正月に藏人になり
ぬ。あさましうかゝるなからひにいかでとこそ人は思ひた
めれ。などいひあつかふは聞らんかし。六月に人の八講志
玉ひし所に。人々あつまりてきくに。この藏人になれるむ
この。れうのうへの袴すはうがさね。くろばんびなどいみ
しうあざやかにて。わすれにし人の車の。とみのをに。は

世の中に猶いと云々
[訂]弘云。是より以下次の段うれしき物とある前までの數十行は活本になし。然して活本には左の數句あり
「人のむすめにいふべきにもあらず。みやつかへをすとも。年わかう世の中いたうくつろぎなれざらんはなを」
人ににくまれん事こそ
人ににくまれん事こそ心うき物にてあるべけれとの心ノ
されとさぜんに　然共自然には傍輩にも親類にもよく思はるゝと。よくも思はれずにくまるゝ物も有とノ
よき人の御事は更ノ
上童はいふに及ばず。下種も親類によく思はるゝ程の人は。他人も目にたてゝよき人といたはるゝと也いとをしく思ふとの心ノ
論語曰。子曰。孝哉閔子騫。人不レ間二於其父母昆弟之言一
大學曰。宜レ兄宜レ弟而後可三以教二國人一

んぴのをひきかけつばかりにてゐたりしを。女の心をおしはかりていふノ此むこのちかくいるを女の何と見るぞとノ
らんと車の人々も。ゐたりたるかぎりはいとほしがりしを。
他人ノ
こと人どもも。つれなくゐたりし物哉など後にもいひき。
翌の事を評判ノ
猶男は物のいとほしさ人の思はん事はゐらぬなめり。世
の中に猶いと心うき物は。人ににくまれん事こそあるべけれ。何たる狂人かさやうににくまれんとは思はんとノ
たれてふ物ぐるひか。われ人にさ思はれんとは思はん。自然ノされどしぜんに。宮づかへ所にも。親はらからの中にても。思はるゝおもはれぬがあるぞいと佗しきや。是よりは親兄弟に思はるゝがよき事をいふノよき人の御事は更也。ゆすなどのほどの。親などのかなしうするよろしからぬノ
跡もよきを云ノ
かひあるは。ことゝり。いかゞ思はざらんとおぼゆ。ことな
親さして是を思ふほどことわりとノ
る事なきは。又これをかなしと思ふらんは。親なればぞかし。容親行
禁中ノ赤染衛門
おぼやけよき妻をノ
と哀也。おやにも君にも。すべてうちかたらふ人にも。人是より男の女を思ふことに付て
に思はれんばかりめでたき事はあらじ。「男こそ猶いと有

いときよげなる人ノ
美人を見捨て悪女をもつ男もあるがあやしきとノ
及ぶまじからんきはをだに
身に相應ぜぬよき人をも美人と思ほんなばしひても思ひかけよとノ
人のむすめまだみぬ人
長恨哥云。楊家有レ女初長成。養在二深閨一人未レ識
かつ女のめにもわろしと
彼美人を捨て悪女をもつ男のあやしき事をたちかへりいふ也。決前生後の詞なるべし
返事はさかしらに
男の返事は賢げにする物からとノ

おぼやけはらだちて
外の見きく人までも腹立心ノ。帚木巻にもしばあやなきおぼやけはらだゝしくとあり
[増]弘云。紫日記。すゞろに心やましうおぼやけはらとかよからぬ人のいふやうにくゝこそ思ひたまへられしか」また榮花見はてぬ夢。げにやおぼやけはらだゝれけるなどあり
本居翁云。おのれあつからぬ人のうへのことなり。かたはらより見きゝて。はらだゝしう思ふとノ。俗にいふ法界りんきの法界此の大やけにあたれり
露心くるしき事を思ひ
心ぐるしく哀なる事を露も思ひしらぬとノ

なげの詞なれどせちに心にふかくいられど
さして思ひいれたる事ならねども。情しき
詞を陰ごとにもいふべき事之心之
いかで此人に思ひしりけりとも　彼陰ごと
になさけしくいひたる嬉しさを思ひ知たり
といふほどの心ざしを見せたきと思ふ之
必思ふべき人とふべき人は
前段はいとほしとも哀共さしていふべき人
ならぬが情しく陰にていひたる也。こゝは
必思ふべき故も有とふらふべき故もある人
の事之
さりわかれしもせず
もとより思ふべき人とふべき故もある人な
れば。たとひ思ひ訪へるとても取分て嬉し
とも思はれずと之
人のうへいふをばらだつひとこそ　此段は
坐興には人の噂いふ事もある也。人の上い
ふは一向によからぬ事と聞腹立人はわりな
く由なき事をいふ之
いかでかはあらん　我身を置て人の上をい
ひたき物はいかでかはあらんと。次の詞を
いはんとて先いふことば之
我身をはさしおきて
我身にも悪き事ある物を。それをさしおき
てさやうに人の上をもどかしくいひたき物
はあらじと之。畢竟坐興にていふ物を。一
向にきゝ腹立はわりなきことゝいふこゝろ
之
されどけしからぬやうにも
然ども人の噂をいふはけしからぬやうにも
有と之。此段は坐興ながらも人の噂はよろ
しからぬとの事をたちかへりいふ之

又おのづから　又彼噂いはれし人の自然は
聞付恨る事もあるべければ。坐興にも人の
噂は無〻愛事と之
又思ひはなつまゝきあたり
又たとひ悪きふるまひ有ても。え思ひ捨見
はなつまゝき人の事は。いとほしや。人と
してはさやうの事もなどかならん。など
了解し思ひとけば。噂にそしりたき事も念
じこらへていはぬ物をと也。やは助字之。
此段は思ふ人の事は陰うはさにもいはず。
只なる人のうへを噂にはいふ事をいへる之
さだになくば　さやうにだになくば之。思
ひはなつまゝき故だになき人の上ならば。
坐興にはいひ出て笑ひもせん物をと之。是
は亦人のうへいふをばらだつ人のわりなき
事を立かへりいひたる詞之。こゝもとの詞
よく〳〵心をとゞめて見るべし

又ひとつを見て
一の巻を見て之。日本紀に一巻をひとつま
きにあたるまきさよむ之
二見つけたる　ふたつ見つけたるとよむべ
し第二の巻の事之。こゝにて句をきるべし
[訂]こゝの詞「ゆかしうおぼゆるものがたり
の二見つけたるとあるを。万蔵抄には「ゆか
しとのみ思ふがのこり見いでたるさて」とも
あり

あたりは。いとほしなど思ひとけばねんじていはぬをや。助字之
さだになくはうちいでわらひもしつべし。人のかはにと
りわきてよしと見ゆる所は。たびことに見れどもあなを
かしめづらしとこそ覚ゆれ。絵は人の親のごとくにはあらで數多度みれば見ざめ
もするなどあまたたび見ればめ
もたゝずかし。ちかうたてる屏風のゑなどは。いとめでた
近くてたびゝみる故之　是は初めいへる事をかさねていふ之
けれども見もやられず。人のかたちはをかしうこそあれ。
にくげなるでうどの中にも。一つよき所のまもらるゝよ。
人のかたちのたとへ　見にくき物にも一所はよき所ある心之
形の悪き人も又一所は人のこのむ所のあらんとみづから思ふ心之
見にくきもさこそはあらめと思ふこそわびしけれ」活本に是までなし

○うれしき物

また見ぬ物がたりのおほかる。又一つを見ていみしうゆ
かしうおぼゆるものがたりの。二見つけたる。心おとりす
るやうもありかし。人のやりすてたる文を見るに。
つゞきあまた見つけたる。いかならんと夢を見て。おそろ
しとむねつぶるゝに。ことにもあらずあはせなどしたる

たくおぼゆれ。思ひいれずいふ詞之
と。いとほしき事をいとほしとも。あはれなるをばげにいかにかなしくおもひ給ふらんなど云さま之
かに思ふらんなどいひけるを。つたへて聞たるは。さしむ
かひていふよりもうれし。いかで此人に思ひしりけりと
ふべき人は。さるべき事なれば。とりわかれしもせず。助字之
もあるまじき人のさしいらへをも。心やすくしたるはう
れしきわざ也。心やすくさしいらへする事はやすき事なれど之
し。大かた心よき人のまことにかどなからぬは男も女も
ありがたき事なめり。又賓に一かどある人もいかでなからんと之
いふを腹だつ人こそいとわりなけれ。いかでかはあらん。
我身をさしおきて。さばかりもどかしくいはまほしき物
やはある。反語の詞之
聞つけてうらみもぞする。あぢきなしと之。又思ひはなつまじき

いとうれし。よき人の御前に人々あまたさふらふ折に。昔ありける事にもあれ。今きこしめし。世にいひけることにもあれ。かたらせ給ふを。我に御覽じあはせてのたまはせ。いひきかせ給へるいとうれし。とほき所はさら也。おなじ都のうちながら。身にやんごとなく思ふ人のなやむをきゝて。いかにく〳〵とおぼつかなく歎くに。おこたりたるせうそこえたるもうれし。思ふ人の人にもほめられ。やんごとなどの口をしからぬ物におぼしの給ふ物のをり。もしは人といひかはしたる哥の聞えてほめられ。うちきゝなどにはまだしらぬ事なれど。なほおもひやらるゝよ。いたううちとけたらぬ人のいひたる古き事のしらぬを。聞出たるもうれし。後に物のなかなどにて見つけたるはをかしう。たゝ是にこそありけれ。とかのいひたりし人ぞをかしき。みちの國がみ。

うちきゝなどに　聞書の事のよし。徹書記の說にあり
みづからのうへには　清少の身には歎ほめられし事はなけれど。嬉しからんとおしはからるゝこと

かのいひたりし人ぞをかしき
此書を見てこそいはれけめと思ふに心にておもしろきこと

哥のもとすゑ
哥の上句下句之。源氏早蕨卷に。はかなきことをもとすゑをとりていひかはしとありとみに物もとむる見出
イニいひ出たる。急に物を尋るに其有所を知たる人のいひきかせし之
物合せ何くれと
哥合繪合等何やかやといとむ之。暇イトムあらそふ心之
[訂]此所の詞「物あはせ何くれといどむ事にかちたるいかでかうれしからざらん」とあるか。異本には「物のをりに衣うたはせていかならんと思ふにきよらにてえたる」とあり
いみじう我はと思ひて
我は人にたばかられ下と賢がほなる人をたばかり得たるがうれしきと也。たはふれのたばかり事之
[訂]こゝも。又いみじうより。男はまさりてうれしとあるまでの數十字を異本には左の如くあり
「又もおぼかる物のけか。日比月比しるきことありてなやみわたるがおこたりぬるもうれし」
女どちよりも　女同志の中にて其友の女をたばかりしよりは。男をたばかりしはうれしきと之
是がたうは必せんずらん
其たばかる折に。かたはらの人々のたばからる。人のかたうどせんと思ひしに。かたうどせざりし心なるべし。たうは濱の字也。字彙云。濱。朋也。輩也。又相助匿レ非爲レ濱云々

白きおきし。たゞのも。しろうきよきはえたるもうれし。はづかしき人の哥のもとすゑとひたるに。ふとおぼえたる。われながらうれし。つねにはおぼゆる事も。又人のとふにはよく忘れてやみぬる折ぞおほかる。とみにものもとむるに見出たる。只今見るべき文などをもとめうしなひて。萬の物をかへすゞ〳〵見たるに。さがし出たるいとうれし。物あはせ。何くれといどむ事にかちたる。いかでかうれしからざらん。又いみじう我はと思ひてしたりがほなる人はまさりてうれし。是がたうは必せんずらんとつねに心つかひせらるゝもをかしきに。いとつれなく何とも思ひたらぬやうにて。にくきものゝあしきめ見るも。つみたゆめ過すもをかし。さしぐしむすばせてをかばうらんと思ひながらうれし。おもふかたのためにせし指櫛之

し。御前に人々所もなくゐたるに。今のぼりたれば。すこ清少は遅参之
しとほき柱のもとなどにゐたるを御らんじつけて。こち是へまる
こと仰られたれは。道あけて近くめし入たるこそうれし清少の申
けれ。御前に人々あまた物仰らるゝついでなどにも。世の上ろ〳〵詞之
中のはらだゝしうむつかしうかた時あるべき心ちもせで。
いづちもゝ〳〵いきうせなばやと思ふに。たゞの紙のいと遁世せんと思ふ之
しろうきよらなる。よき筆。白きまきし。みちのくに紙。など
えつれば。かくてもまばしありぬべかりけりとなんおぼ人のあたへし之
え侍る。又からうらいべりのたゝみのむしろあをうこまか高麗縁之
に。へりのもんあざやかにくろうまろう見えたる。引ひろ
げて見れば。何か猶さらに此世ばえ思ひばなつまじと。命
さへをしくなんなると申せば。いみしくばかなき事も慰皇后の御詞之
むなるかな。おはすて山の月はいかなる人のみるにかと紙叢などにうき世をなぐさむと清少の申せばこと之
わらはせ給ふ。さふらふ人もいみしくやすきそくさいの御前の人々之

すゞろなる事を思ひて
前にも清少の里居せし事あり。其比にや
二十つゝみに
[訂]濆接。二十は二帖をかながきにせるより
の誤りか
弘云。或は二重に包むことにて。即にちう
と假名にかきしを誤りたるにもやあらん
きこしめしおきたる事ありしかは
清少の紙に命のぶるとひらき召おかれてまいら
せらるゝこと之
わろかめれば壽命經もえかくまじげにこそ
前に清少は白く清らなる紙に慰む事をいひ
し故。此紙さはあられば命のぶるなぐさめ
にもなるまじきことの心之。壽命經は。延命
の新譯の經なれば之
かけまくもかしこき
細流云。かけて申さんも恐あれどもとの心
之。掛畏カケマクモカシコキ宣命の詞之云
々。哥の心は紙を神にそへて此かみのしる
しに千年も生んとや。主君の給へる紙なれ
ばかけまくもかたじけなしとはいふ之

あまりにや　　あまりに冥加おそろしき儀に
やと之

新念ぞと之
いのりかなと
思ひて里にあ
后宮より清少に之
給はせたり。仰事にはとくまゐれなどのたまはせて。是は
きこしめしおきたる事ありしかばなん。わろかめれば。壽
命經もえかくまじげにこそと仰られたる。いとをかし。清少のむ
申せし事は忘たるにこそ之
けに思ひ忘たりつる事を。おぼしおかせ給へりけるは。な
只人のかく御心にかけられしさ（うれしからんを主君の御事なれば之
ほたゞ人にてだにをかし。ましておろかならぬ事にぞあ
るや。心もみだれてけいすべきかたもなければ。たゞ
恐入し心之
かけまくもかしこきかみのまるしにはつるのよはひに
なりぬべきかな
直には申さぬ心之
あまりにやとてまゐらせつ。大ばん所の皇后の大盤所の
雑仕之
のざうしぞ御使には來たる。あをきひとへなどぞとらせ
句　案のごとくの心之　使に緑之
て。まことに此かみをさうしにつくりて。もてさわぐに。
むつかしき事もまぎるゝ心ちして。をかしう心のうちも

たゝみ　是も清少の望みに應ㇾて后宮の賜へるなるべし

御座ございふたゝみ　貴人のしかるゝ疊ございふ心ㇾ

心のうちにはさにやあらん　后宮の賜へると清少の心には思ひしとㇾ

又いひに來なん　これへまゐらするたゝみにあらずといひこんとㇾ

宮のほとりにあないしに　后宮の御方などに問うかゞはまほしけれど。誰かやうのわさはせんたゝ后宮の御しはざならんとㇾ

［訂］こゝに「宮のほとりにあないしにまゐらせまほしけれど」とあるを。イ本。萬歳抄には「さもあらばうたて有べしと思へば」とあり

かゝる事なんある　清少より。疊もて來りし事を后宮の御心ざしかと問にやることばㇾ

さる事やけしき見給ゐひし　后宮の疊下されし御氣色は見給ほすやとㇾ

おぼゆ。二月ばかり有て。五位にやあかぎぬきたる男の。たゝみを清少のこがむるㇾ　もてきてこれといふ。あれは誰ぞあらはなりなど物はしたなういへば。內裏などの詞ㇾ使はいにしとㇾ　さしおきていぬ。いづこよりぞととはすれば。まかりにけりとてとりいれたれば。こと更に御座といふたゝみのさまにて。疊ㇾ　へりの事ㇾ　かうらいなどいときよら也。心のうちにはさにやあらんとおもへど。猶おぼつかなさに。人どもも出しもとめさすれどうせにけり。あやしがりわらへど笑ㇾ　つかひのなければいふかひなし。所たがへなどならば。おのづからも又いひに來なん。宮のほとりにあないしにまゐらせまほしけれど。猶たれすゞろにさるわざはせん。仰又いひにも來ぬㇾ　のつからも又いひに來なん。宮のほとりにあないしにまゐらせまほしけれど。猶たれすゞろにさるわざはせん。仰事なめりといみしうをかし。二日ばかり音もせねば。うたがひもなく。后宮の女房ㇾ　左京のきみのもとに。かゝる事なんある。さやうすなうかゞひ給へとㇾ　つかひのなければいふかひなし。所たがへなどならば。おる事やけしきみ見給ひし。忍びてありさまの給ひて。さるともし見給ひたらば內證しらせ給へとㇾ　見えずば。かく申たりとももらし給ひそといひやりた

のちにもと　後にも沙汰し給ふなどㇾ

おもひしもしるくなかし　前に心のうちにはさにやあらんと思へどともあり。おほせ事なめりといみしうをかしなどいへる首尾なり

まどひしほどに　其使はまどひ隱れて歸りしㇾ

關白殿　后宮の御父。中關白道隆公ㇾ

法興院　二條の北京極の東。粟家公の家也。粟家公薨し給ひて後道隆公こゝに釋泉寺をたて給へり

女院　圓融院の后。一條院の御母。東三條院也

二條の宮へいらせ給ふ　法興院すなはち東二條也。こゝに后宮の御所をかりに作りしを二條の宮といふなるべし

左京ことばㇾ　るに。いみしうかくさせ給ひし事也。我しらせしといふなとㇾ　えたるとなく。清少の心ㇾ　しるくをかしくて。文かきて又みそかに御前のかうらん其文をかうらんより取おとしたるㇾ　におかせし物は。まどひしほどに。やがてかきおとしてみはしのもとにおちにけり」

關白殿二月十日のほどに。法興院の釋泉寺といふ御堂に勘物云正暦五年　定子ㇾ　關白殿二月十日のほどに。法興院の釋泉寺といふ御堂に經くやうぜさせ給ふ。女院みやの御まへも。おはして。一切經くやうぜさせ給ふ。女院みやの御まへも。おはしますべければ。二月朔日のほどに二條の宮へいらせ給ふ。后宮の入御深たるㇾ　夜ふけてねふたくなりにしかば。何事も見いれず。つとめて日のうらゝかにさし出たるほどにおきたれば。二條宮の新く明白ㇾ　しろうあたらしうをかしげにつくりたるに。みすよりはじめてきのふかけたるなめり。御しつらひ獅子こま犬などいつのほどにや入るけんとぞをかしき。櫻の一丈ばかりにていみしう咲たるやうにて。みはしのもとに東にあれば。

つくりたるなめり
新古今雜上。後冷泉院御時御前にて翫二新成櫻花一といへる心をよめるを東野州説に作花の事也云々
花の匂ひなどさきたるにおとらず
花のほのあかきを匂ひといふ之「朝日影匂へる山の櫻花」とよめるもおなじ心之
こいへなどいふ物の
小家どもをこぼちてそこに二條の宮を餝につくられたればと之
けちかくなりしげなる
かりの御所なればさのみけ高くはあられどおもしろげなるさまと之
只御なほしにかされてぞ
直衣も直衣布袴にて。下襲を用らるゝ事あれど。是は只直衣斗なればなるべし
[訂]原本には只なほしとありて御の字なし。イ本の有に從へり
かたもんりうもん
堅紋立紋也。イ本かたもんりうもんなど其折は此八丈といふたけたかはこことになかりき。あるかぎりきたれは云々
[訂]弘云。活本にも此のイ本の如くあり

いととうさきたるかな。梅こそたゞ今さかりなめれと見
におとらず。いかにうるさかりけん。雨ふらばまばみなん
かしと見るぞ口をしき。こいへなどいふ物のおほかりけ
る所を今つくらせ給へれば。木だちなどの見所あるはい
まだなし。たゞ宮のさまぞけちがくをかしげなる。殿わた
らせ給へり。あをにびのかたもんの御さしぬき。櫻のなほ
しに。紅の御ぞみつばかり。只御なほしにかさねてぞ奉り
たる。御まへよりはじめて。紅梅のこきうすきおりもの。
かたもんりうもんなどあるかぎりきたれば。たゞひかり
みちて。からぎぬはもえぎ。柳。紅梅などもあり。御前にて。物など聞えさせ給。御いらへのあらまほしさ
を。里人にわづかにのぞかせはやと見奉る。女房どもを御
させ給ひて。物など聞えさせ給。御いらへのあらまほしさ
を。里人にわづかにのぞかせはやと見奉る。女房どもを御
覽じわたして。宮に何事をおほしめすらん。こゝらめでた

二月朔日なればと之
万つゆまこそに
うるはしき事と之
作花なればと之
道隆公と之
御所の作りさまと之
前ニ註
青純
堅紋前註
めさせたると之
あるこある人みな着したると之
はじめ女房達もと之
后宮の御前にて
后宮の御さまと之
后宮をはじめ女房達と之
后宮の御氣色と之

なべすゑて　並居てと之
是家々のむすめぞかし
何もよき家の子どもぞとと之
よくかへりみてこそ
懸にいたはりつかひ給へとの心之。陶淵明彭澤の令となりし時。其子に一力を送りていひつかはす書に云。今遣二此力一助三汝薪水之勞一。此亦人子也可二善遇一之云々。この心にて關白どのもの給ふ。
いかにいやしくものをしみせさせ給ふ宮とて
后宮をさしての給ふ。關白どのゝたはふれと之。前段に后宮より清少に紙たゝみなど給へりし事を書て。こゝに此御たはふれをかく事。心づかひ面白し。史記陳平が傳に。其あによめ陳平をにくみて惡口して兄伯に逐棄られし事を書て。後に陳平を讒する者。高祖に其嫂を盜りさいひしが僞の證とせし文法之
何かしりうごとには聞えん
かやうの述懷を何かは陰ごとにはいはん。
御前にてこそいはめとの戲之
式部のぜう何かし
勘物云。源則理(正曆)正月十三日式部丞。前大納言重光卿四男。正曆四年藏人十九。六年叙。中宮御給

き人々を。なべすゑて御覽ずるこそいとうらやましけれ。
一人わろき人なしや。是家々のむすめぞかしあはれ也。よ
くかへり見てこそさふらはせ給はめ。さても此宮の御心
をはいかに知奉りてあつまりまゐり給へるぞ。いかにい
やしくものをしみせさせ給ふ宮とて。我は生れさせ給ひし
よりいみしうつかふまつれど。まだおろしの御ぞ一つ給
はぬぞ。何かしりうごとにはきこえんなどの給ふがをか
しきに。みな人々わらひぬ。まことぞ。をこなりとてかく
らひいますといふ之
御つかひにて式部のぜう何がしまゐれり。御文は大納言
どのとり給ひて殿に奉らせ給へば。ひきときて。いとゆか
しき文かな。ゆるされ侍らばあけて見侍らんとの給ふす
れば。あやしうとおぼいためり。かたじけなくもありもて
奉らせ給へばとらせ給ひても。ひろけさせ給ふやうにも

后宮の御氣色と之あけて見たまはんは如何との心之關白殿の詞之帝の御文なれば恐かましと之
關白殿の詞之御内衆に不足あらじと之
伊周公と之
關白殿后宮へたてまつり給ふ詞之
關白どのゝ詞之我ををこなりと笑給ふは
關白どのゝ詞之
后宮の御ぞ
女房に關白どのゝたはふれ給ふ詞之
關白どのゝ見給ふと之
關白殿の詞之
后宮の御ぞ
后宮の御ぞ
后宮の御ぞ

あなたにまゐりてろくの事物し侍らん
帝の御文を父君の前にて后宮開きゐれ給へば。使の祿事いひ付んとて殿下たち給ふ心遣ひ面白し

御ぞのおなじいろ
后宮の紅梅のきぬとかみのいろとゑ

猶かうしもおしばかり
后宮の御ありさまかく美麗ならんとは。元推量すまじきことゑ。前に里人にわづかにのぞかせばやといへる首尾ゑ

あがきみゆるさせ給へ
我君御酒御免候へとゑ

三の御まへはみくしげ殿
殿下の三女。后宮の御妹ゑ。御匣殿別當なるべし。拾芥云。御匣殿在二貞觀殿中一。以二上臈女房一爲二別當一云々

うへなどきこえんにそ
三の君おほきにて物〳〵しければ。うへつかたなど申べきには似合しきと也

[增]うへは敬語ゑ。貴婦人を何々の上といふを源氏に奏上紫上などいふが如し

あらずもてなさせ給ふ。御よういなどぞありがたき。すみのまより女房しとねさし出て。三四人御几帳のもとにゐたり。あなたにまかりてろくの事物し侍らんとて給ひぬるのち御文御らんず。御返しはこうばいの紙にかゝせ給ふが。御ぞのおなじ色に匂ひたる。猶かうしもおしばかりする人はなくやあらんとぞ口をしき。けふ推量すまじきことゑ。殿の御方よりろくは出させ給。女のさうぞくにて。殿の御方よりろくは出させ給。女のさうぞくなれば裳からきぬゑ。細長前註貴女の服ゑ紅梅のほそながそへたり。さかなゝどあれば。御使ひに酒をしひたき心ゑ。御使のことわり申ゑ大事の供奉仕るとの心ゑ。句さもほしけれど。けふぞいみじき事の行幸に。あが君ゆるさせ給へと大納言どのにも申てたちぬ。君達などいみしうけさうし給ひて。こうばいの御ぞもおとらじとき給へるに。三の御まへはみくしげ殿也。中のひめぎみよりもおほきに見え給ひて。うへなどきこえんにぞよかめる。うへはばかりまゐらするとりわきてゑ。北方ゑ。もわたらせ給へり。御几帳引よせて。あたらしくまゐりた

いぶせき心ちす　清少も新參の內にて北の方の見え給はざりしゑ

かの日のさうぞく扇
女房達かの一切經供養の日の出たち扇等の談合するゑ

まろは何か只あらんにまかせてをにいざみて一向に手をつけぬやうにいふさまゑ。我は何か用意せん只あるにまかせんと云て。たゆめて結撰せんの心なり

かゝる事にまづれは
當日の用意のために退出すれば。后宮も御いとまを給はるとゑ

御前人すくなくいはればいとよし
[訂]イ本には「御前人すくなくていとよし」とあり
弘按。こは原本とイ本とはうらうへの相異なれど。此所は本のまゝの方よろし

なきてわかれんかほに
拾遺集「さくらはな露にぬれたる色見れはなきてわかれし人ぞこひしき」

引たふし
[訂]原本にたなしとあるは誤ゑ。上の九卷に。おほきなる木どもたふれ」又此の下にもたふれぬべく。」又下の十一卷にも。されどたふれず」とあるが如くたふとあるぞ正しければ改めつ

いぶせき心ちす　清少も新參の內にて北の方の見え給はざりしゑ

かの日のさうぞく扇
女房達かの一切經供養の日の出たち扇等の談合するゑ

まろは何か只あらんにまかせてをにいざみて一向に手をつけぬやうにいふさまゑ。我は何か用意せん只あるにまかせんと云て。たゆめて結撰せんの心なり

かゝる事にまづれは
當日の用意のために退出すれば。后宮も御いとまを給はるとゑ

御前人すくなくいはればいとよし
[訂]イ本には「御前人すくなくていとよし」とあり
弘按。こは原本とイ本とはうらうへの相異なれど。此所は本のまゝの方よろし

なきてわかれんかほに
拾遺集「さくらはな露にぬれたる色見れはなきてわかれし人ぞこひしき」

引たふし
[訂]原本にたなしとあるは誤ゑ。上の九卷に。おほきなる木どもたふれ」又此の下にもたふれぬべく。」又下の十一卷にも。されどたふれず」とあるが如くたふとあるぞ正しければ改めつ

る人々には見え給はねば。いふせき心ちす。さしつどひて。かの日のさうぞく扇などの事をいひあはするも有。又いどみかはして。まろは何か只あらんにまかせてをなどいひて。例の君などにくまる。よさりまかづれは。えとゞめさせ給はず。うへ日り。かゝる事にまかづれは。君だちなどおはすれは。御々にわたりよるもおはします。前人すくなくゐはねはいとよし。內の御つかひ日々にまゐる。御前の櫻色はまさらで日などにあたりてしぼみわるうなるだに佗しきに。雨の夜るふりたる。つとめていみしうむとくもとゞ也。いとゝくおきて。なきてわかれんかほに心しつるぞかし。いかならんとておどろかせ給ふに。殿の御かたよりさふらひのものども。げすなど來て。あまた花のもとにたゞよりによりて。引たふしとりてみそかにい

きて。まだくらからんにとれとこそおほせられつれ。あけ過にけり。ふびんなるわざかなとく〳〵とたふしとるに。清少心之
いとをかしくて。いはゞいはなんと。かねずみが事を思ひたるにやとも。此うたの心をおもひわくほどの者ならはとよ　清少の詞之
すむ人はたれぞ。あしかめりといへば。清少のこゝろ之　わらひていとゞにけてひきもていぬ。猶との〳〵御心はをかしうおはすかし。前にいとをかしくてといへる音尾之
ましと見て入ぬ。かもんづかさまゐりて。御かうし參りと　掃殿寮之　格子を上る之
のもりの女官御きよめまゐりはて〳〵。おきさせ給へるに。后宮之　掃除之　后宮の御詞
花のなけれは。あなあさまし。かのはなはいづちいにけると仰せらるゝもめづらしき事ならねどいみしうめでたなどをすこしをるにやとこそきゝつれ。たがしつるぞ。見つやと仰らる。さも侍ず。いまだくらくてよくも見侍らざりつるを。白丁なごの見えしをいふにやしろみたる物の侍れは。花ををるにやとうしろめたさに申侍つると申す。さりともかくはいかでかとらん。后宮御詞かやうに意に皆ころべき事かはとよ　清少詞之
殿のかくさせ給へるなめりとてわらはせ給へば。いでよも侍らじ。春風のしてかくすなりけりと仰らるゝもめづらしき事ならねどいみしうめでたれのあさがほも時ならずや御らんぜんと引いらる。おはしますと其まゝ　殿おはしますと其まゝ之　殿の詞之
は。いかにかくはぬすませしぞ。いぎたなかりける女房達かな。しらざりけるよとおどろかせ給へば。されど我よりさきにとこそ思ひて侍るめりつれと忍びやかにいふを。いきゝつけさせ給ひて。さおもひつる事ぞ世にこと　清少はとくこの花引たふさせし事をしらんと思召しとよ　后宮の女房之前に註清少をさしてそこの給ふよ
人出て見付じ。宰相とそこのほどならんとおしはかりつとていみしうわらはせ給ふ。さりげなる物を。少納言は　后宮の御詞之
春かぜにおほせけると宮の御前にうちゑませ給へるめで　前に春かぜのしてと侍らんと啓したる事之

いでよも侍らし　后宮御詞かやうに意に皆ころべき事かはとよ
いでやよも殿の取かくさせ給ふには侍らじ。春風こそ花の怨敵なればし侍つらんとよ。やさしき詞なるべし
ふりにこそふるなりつれ　掃殿寮之
拾遺ニ人丸「我がごとや雲の中にもおもふらん雨もなみだもふりにこそふれ」詞ばかりとれり
めづらしき事ならねど　清少詞之見侍らずとよ
此后宮の御ありさまのめでたきをほむるはめづらしかられどゝ。又此本哥の事をいふとよ。此古歌めづらしかられどゝ之

我よりさきにとこそ　雨のしわさに花のあしくなりしゆゑとよ
殿下しらざりけるよと仰せらるれども。清少見付ぬ已前より殿には御存知ならんと思ひしとよ「蔦のなくれをきけば山ふかみ我よりさきに春はしりけり」詞ばかりをとれり。此歌新拾遺ニハ思見。風雅ニハ源信明之

さりげなる物を　扨は人の引たふしける物をとよ

まだくらからんにとれと　后宮の御詞
作花に雨かゝらば花損て見にくからんと思召て。人見ぬほどにとれと仰付られしなるべし

いとをかしくて　花のあしくなりしをとらさせたまふを感ずる心之
いはゞいはなんとかれすみが事を思ひたるにや　清少のこゝろ之
後撰「山守はいはゞいはなん高砂のをのへの櫻をりてかさゝん。」是は素性の哥之。兼澄の集にもあるか可勘之。此哥の心をおもひて人はとがむるともをらんとて引たるりゆくかたの儀之
かれすみか　源兼澄にや。信明の息。寛和の比の人なり
いかに見るかひなからましと見て　掃殿寮之
[訂]イ本には「いかにびんなきかたちならましと思ふともかくもいはで」とあり

あかつきぬす人　又后宮の御詞之
[訂]万歳抄には「あかつきに花ぬす人」とあり

そらごとをおほせ侍乙
殿の仰にて櫻のなくなりしを清少知ながら。春風のせしならんといひしほそらごとを風におほせしと乙
今は山田もつくるらん
春風におほせし事の詠吟乙。貫之集ニ「山田さへ今はつくるをちる花のかごとは風におほせざらなん
さばかりいましめつる物をくらからんほどに花をされ人に見付られなと仰付し物をと乙。前にまだくらからんにされとこそ仰られつれ。明過にけり。不便なるわざ哉といひし首尾乙
うるせく
[訂]原本にはうるさくとあり。古本并に異本にうるせくとあるをよしとすべし。源氏蜻木の巻にもうるせくといふ詞あり
こわか君
[智]續接。こわか君は幼稚の時の尊稱にてたれがうへにもいふ乙。うつぼ物語としかげの巻にも。かれまさのことをはじめのほどはこわか君といへり。又巻十一に。此若君の名を松君といへり
それはいとゝく見て
小若君の詞乙。清少とく見付てとなり
雨にぬれたりなど　前になきて別ん顏に心おとりこそすれと清少いひし事乙
さて八日九日のほどに
前に二月朔日の程。二條の宮へいらせ給ふとあり。其二月の八九日比乙。此一切經供養は十日比なれば。后宮の御供の用意に清少退出する乙
花の心開たりやいかゞ

后宮の關白どのにの給ふ詞乙
たし。そらごとをおほせ侍る也。今は山田もつくるらんと
うちずんぜさせ給へるもいとなまめきをかし。さてもね
たく見付られにけり。さばかりいましめつる物を。人の
所にかゝるしれもの〳〵あるこそとのたまはず。春風はそ
らにいとをかしうもいふかなとずんぜさせ給ふ。たゞこ
とにはうるせくおもひよりて侍つかし。けさのさまいか
に侍らましとてわらはせ給ふを。こわか君。されどそれは
いととく見て。雨にぬれたりなど。おもてふせなりといひ
侍りつと申給へば。いみしうねたからせ給ふもをかし。さ
て八日九日のほどにまかづるを。今すこし近うなしてな
ど仰らるれど出ぬ。いみしう常よりも長閑にてりたるひ
るつかた。花の心開けたりや。いかゝいふとのたまはせた
れば。秋はまだしく侍れど。よに此たびなんのぼる心ちし
侍るなど聞えさせつ。出させ給ひし夜。車の次第もなくま

日の照に付て。しか雨にしほれし花の心も開けたるかと乙。古詩の詞なるべし追而可考
秋はまだしく侍れど
是亦かの花の心開けたりといふ古詩の詞なるべし
車の次第もなく
人々の品によりて乗車の前後次第あるべきを女房の急きて我さきにとのるさまと乙
わなひひて　可然上臈三人と清少とと乙
おしこりて　押凝也。おしこごなりて乙。人々あはて〳〵乗車する乙
かうかといふに　車の牽行などのを。早是ばかりかといふに。まだこゝにのらで有と清少などの答たる乙
宮司　中宮大夫以下乙
とくせんなのせんとしつる
得選三人ありとそ。禁秘抄云。凡於二車寄一乗車女房近代例也。況得選不レ可レ然事也。行幸走内侍同車時禮レ之近代事也

腹きたなくおはしけり
清少のさらばとくせんなのせよといふが。くれれることばに似たれば乙

可然上臈と清少とと乙
さるべき人三人と。猶
祭の歸さなどのやう
只任地乙人ばのりいそがばいそげとと乙
たゞさはれ。のるべ
きまるらずは。おのづからきこしめしつけて
此車にのるさまのいとさわがしく。祭の歸さなどのやう
にたふれぬべくまどふいと見ぐるし。たゞさはれ。のるべ
き車なくてえまるらずは。おのづからきこしめしつけて
たまはせてんなどわらひ合てたてるまへよりおしこりて
まどひのり果て出て。かうかといふに。まだこゝにといら
ふれば。宮司よりきて。誰々かおはすると問聞て。いとあ
やしかりける事哉。今は皆のりぬらんとこそ思つれ。こは
てのりおくれ給ふぞと乙
などてかくはおくれさせ給へる。今はとくせんをのせん
としつるに。めづらかなるやなど驚きてよせさすれば。さ
ばまづ其御志ありつらん人をのせ給ひて。つぎにもとい
ふ聲聞付て。げしからず腹ぎたなくおはしけりなどいひ
ば。のりぬ。其次にぱ誠にみづしが車にあれば。火もいと
くらきを笑ひて。二條の宮に參りつきたり。みこしばとく

清少の御こたへ乙
清少などのこりぬしを聞てと乙
下の女房と乙
車をと乙
清少の
其とくせんをのせ給へと乙
宮司の詞乙
清少などの次乙
后宮の御輿と乙

左京小左近　イ左京小貳右近皆女房の名なるべし

[訂]原本には右京とあれど。こゝは上にも左京とあれば左京とすべし。イ本にも左京とあり

まゐる人ごとにみれどなかり
只今まゐる人々を左京小左近などが尋見れども清少はまゐらざるとゝ

おろ〳〵にしたがひ四人づゝ
一車に女房四人づゝ乗たれば。只今下車するに隨ひて。四人づゝまゐりつとふとゝ

いかなるぞと仰られけるもしらずある限
[訂]此の十八字。イ本幷に万歳抄には「あやしなきか」とあり

いつのまにかうは年比のすまひのさまに
二條の宮ばかりの御所なるに。いつのまにかく年比住馴給ひし所のやうにあるぞと感下見る心とゝ。前に皆しつらひゐさせ給ひけりとある首尾なり

とかくも申さねば
申上ればまごひのりし人のあやまりあらはるればとゝ

ほとゝ〳〵　殆。ホトンドとゝ

みづしがいとほしがりて
御厨子が笑止がりて。おのが車にのせしとゝ。前にみづしが車にあれば火もいとくらきと有し首尾とゝ

又などかは心しらざらん物こそつゝまめ
心しらぬ物こそ制する事をも遠慮せめ。右衛門などはさやうにみだりに乗車するを制せよかしとゝ仰らるゝとゝ

いらせ給ひて。皆しつらひゐさせ給けり。后宮の清少を召とゝ

られければ。左京小左近（イ小貳右近）などいふ若き人々。參る人ごとにこゝによべと仰

みれどなかりけり。おるゝにしたがひ四人づゝ御前にまゐりつどひてさふらふに。いかなるぞと仰られけるもし清少

らず。ある限おり果てぞからうして見付られてかばかり

御尋のよしを清少にいふ詞とゝ

仰らるゝにには。なとかく遅くとて引ゐて參るに。見れば。清少の心とゝ

きたるにかとをかしいつのまにかうは年比の住ひのさまにおはしましつるに乗たる人。いとほとゝえのるまじく侍つる也。くらう侍つ

は見えざりつるぞ后宮の清少への給ふ詞とゝ

に乗たる人申上るとゝ

でかとくは參り侍ん。是もほとゝえのるまじく侍つる

を。みづしがいとほしがりてゆづり侍つる也。くらう侍つ

る事こそ佗しう侍つれと笑ふ〳〵けいするに。行事する

行の躁暑とゝ

物のいとあやしき也。又などかは心しらざらん物こそつ

かたへの人にくしと聞らん
此右衛門が詞を傍輩の女房達にくまんと清少のきゝたるとゝ。前に清少の后宮の御尋にとかくも申さゞりし首尾とゝ。傍輩の遠慮とゝ

定めたらんさまのやんごと
車の前後定法のごとく正しからんこそよからめとゝ

くるしきによりて
[訂]イ本。くるしければ」とあり

申なほす
[訂]活本。申なすとあり

ゝまめ。うるさもんなどはいへかしなど仰らる。されどいかでかばしりさき立侍らんなどいふも。かたへの人にくしと聞らんときこゆ。さまあしうてかくのりたらんもかこそよからめと。物しけに思召たり。おり侍るほどの待とに

女房の名とゝ

すこもまとひ先立べき事かはとゝ

右衛門が詞のきこえしとゝ

后宮の清少などに先立よりも乗車のさまもさわがしうあしからんとゝ

后宮の御詞清少ならでかくのりたらんもかしこゆ。さまあしうてかくのりたらんもかし

御機嫌よからぬとゝ

清少詞とゝ

清少爲におりぬしほどの久しさに人々待かれて先乗車せしならんとゝ

右衛門詞たとひ制せ

后宮御詞とゝ

車の奉

清少の清少を召とゝ

跡に清少參りたるさまとゝ

最果とゝいちあとの心とゝ

同車のし

清少のさまとゝ

右京に左近などが

清少

いかで清少はまゐらぬぞと后宮の詞

清少への給ふ詞とゝ

后宮の清少への給ふ詞とゝ

いかなれば

いつのまにかうは年比の住ひのさまにおはしましつるに乗たる人。いとほとゝえのるまじく侍つる也。くらう侍つ

ほとゝ〳〵　殆。ホトンドとゝ

みづしがいとほしがりて
御厨子が笑止がりて。おのが車にのせしとゝ。前にみづしが車にあれば火もいとくらきと有し首尾とゝ

又などかは心しらざらん物こそつゝまめ
心しらぬ物こそ制する事をも遠慮せめ。右衛門などはさやうにみだりに乗車するを制せよかしとゝ仰らるゝとゝ

御經の事にあす
前の引つゞきなり。后宮釋善寺へ渡御あらん兼日の事ㇾ

みなみの院
中關白殿の家也。前にも南の院におはしますと有

髪の腰さし
髪付などするさまなり

かみなどいふ物はあすよりのちはありがたけに　明日を第一の晴と髪をけづりつくろふさまなり

給へかなる
【訂】原本には給へるなりとあり。然して活本には本文の如くあり。弘按。上になんの指辭あれば。此所になりとありては語格違へり。故に今活本のかたに改めつ

扇もたせて尋問ゆる人ありつなどつゞ
誰ともなく扇をもたせこして。清少はこゝにかと尋し人ありしなど〳〵告たるㇾ

まて。まことにとらの時かとさうそき立て
彼女房の早后宮はやがて御堂へ渡御といへば。清少もさく參らんと思へど。まてしばしと思ひ返して。誠に寅の時に御出かと思へば明過たるとㇾ

御經のことにあすわたらせおはしまさんとてこよひまゐりたり。みなみの院の北おもてにさしのぞきたれば。高つきどもに火をともして。ふたりみたりよたり。さるべきだてつるもあり。几帳なかにへだてたるもあり。又さらでもあつまりゐて。きぬどもおしかさね。裳の腰さしけさうずるさまは。さらにもいはず。かみなどいふ物は。あすより後は有がたけにぞ見ゆる。とらのときになんわたらせ給べかなる。などか今までまゐり給はざりつる。扇もたせて尋きこゆる人ありつなどつぐ。まて。まことにとらの時かとさうぞきたちてあるに。あけ過ぎ日もさし出ぬ。西の對のからびさしになんさしよせてのるべきとて。あるかぎりわたどのへゆくほどに。まだうひ〳〵しきほどなる今まゐりどもはいとつゝましげなるに。西の對

に殿(道隆之)すませ給へば。宮にもそこにおはしまして。まづ女房。車にのせさせ給ふを御覧ずとて。みすのうちに宮(后宮之 前に註宮の御妹之)。いしや。三四のきみ(高内侍儀同三司母之)。殿のうへ(高内侍の妹之)。其御をとうとみところ(立并之)ちなみておはします。車の左右に大納言(伊周之)三位中将(隆家之)二所して。すだれうちあげ下すだれひきあげてのせ給ふ。みなうちむれてだにあらば。かくれ所やあらん。四人づゝ(書立之)かきたてにしたがひて。それ〳〵とよびたてゝ(顕證之あらはなる心)のせられ奉り。あゆみゆく心ち。いみしう。まことに淺ましう。けそうなり(之晴がましき之)ともよのつねゝ。みすのうちにそこらの御目どものなかに。宮の御まへへの見ぐるしと御覧ぜんは更に侘しき事かぎりなし。身よりあせのあゆれば。つくろひたてたる髪な(汗の流るゝ之)どもあがりやすらんとおぼゆ。からうして過たれば。車のもとにいみしうはづかしげにきよげなる御さまどもし(宮などの御覧ずるまへを過しゝ之)て。うちゑみて見給ふも現ならず。されどたふれずそこまではいきつきぬるこそ。(句)かしこきかはもなきかとおぼゆ(楯之牛を)れど。みなのりはてぬれば。引出て。二條のおほぢにしぢやすませてしぢにたつる(女院をむかへられしゝ之)后宮の御出をまつさまゝ之)たてゝ。物見ぐるまのやうにてたちならべたるいとをかし。他人(夢のやうなる心之)もさやうにおもしろく見んこと之)人もさ見るらんかしと心ときめきせらる。四位五位六位などいみしうおほういでいり。車のもとに來てつくろひ物いひなどす。先院(女院渡御のゝち后宮出御なるべし)の御むかへ(女院をむかへられしゝ之)に。殿をはしめ奉りて。殿上と地下とみなまゐりぬ。それわたらせ給ひてのち宮(待る女房の心之)は出させ給ふべしとあれば。いと心もとなしと思ふほどに。日さしあがりてぞおはします(女院出御之)。御車ごめに十五。よつは尼の車(四つの尼車之)。一の御車(いち第一の車之是女院の御車之)ばからの車なり。それにつゞきて尼のくるま。しり口よりするさうのずゝ。うすゞみのけさころもなどいみしくて。すだれはあけず。下すだれもうすいろのすそこしどき。つぎにたゞの女房の十(尼ならぬ之)。櫻のからきぬ(表白裏赤花とを)。うすいろのも押わたして著たる之)。紅をおしわたしかとりのうはぎどもいみ

かりしなたふれもせで車のもとまでゆきつきしぞうれしかりしと之

しぢたてゝ

[訂]イ本しぢにかけて」とあり

おほういでいり

[訂]活本には。ねて」とのみあり

まづ院を　女院之。東三條院詮子。一條院の御母なり

[訂]イ本此の先院のことある上に左の如くあり「物いひなどする中に。あきのぶのあそんの心ちそらをあふきむれをそらいたり」

御車こめに十五　女院の御車とゝものとの心之。是女院かたの御車の數をいふ之

よつは尼の車　彼十五の内四は尼君達の車となり

[訂]原本のもとなし。尼車とあり。今イ本によりて補ひつ

うすゝみのけさころも　尼もむかしは鈍のころも著たる之

[訂]原本にはゞ。けさきぬとあり。イ本にけさころもとあれば。これに從ひて改めつ

たゝの女房の十　彼十五の内之。第一の女院の御車。次に尼車四。次に此女房の車十。合て十五之。是を御車籠に十五といふ之

かさりのうはぎ　桃華云。すゝしにて裏表あるきぬをいふ之

しうなまめかし。日はいとうら〳〵かなれど。そらはあさみどりにかすみわたれるに。女房のさうぞくの匂ひあひて。いみしきおり物の色々のから衣などよりもなまめかしう朝の景氣ノ
をかしき事かぎりなし。關白殿其御つぎの殿ばらおはす道隆ノ
るかぎり。もてかしづき奉らせ給ふ。いみしうめでたし。女院をかしづきまゐらせらるゝノ
これら見奉りさわぐ此車どもの二十立ならべたるも。又后宮の女房車ノ
をかしと見ゆらんかし。いつしか出させ給はゞなどまち女院の御かたの人々をかしがりのうは着の事なるべし
きこえさするに。いかならんと心もとなくおもふに。から是より后宮出御の行列ノ
うしてうねめ八人馬にのせてひき出めり。青すそごのも。
くたい。ひれなどの風に吹やられたるいとをかし。采女の名ノ
といふうねめは。くすし忠けまさかしこる人なり。えびぞ典藥頭
めのおりものゝさしぬきをきたれば。いと心ことなり。し
げまさは色ゆるされにけりと。山の井の大納言はわらひ道頼卿ノ
給ひて。皆のりつゞきてたてるに今ぞ御こし出させ給ふ。

きこえさするに
[訂]万歳抄此の次に。いとひさし」の五字あり。イ本もおなじ
青すそごのもくたいひれ
青末濃裳。裙帶。領巾也。采女の出立ノ
えびそめのおり物のさしぬき
蒲陶染織物。指貫。采女雙前が出たちなるべし。むかしは女房も馬にのる時はさしぬきを着たるノ。御禊の行幸の時。走孀平絹の指貫着たる事西宮記にあり。又掌侍命婦も張袴の上に平絹の指貫を男のごとく着て馬にのりて。御禊行幸に供奉の事等。一條の禮閣の秘訣にあり
いと心ことなり
[訂]原本には此一句なし。今イ本。活本。万歳抄皆あれば。加へつ

かすみわたるに
[訂]万歳抄には。かすみわたれる程に」とあり

かしらのけなど
かしらの毛立あがるといふもまことさとノ前に有
[增]これも上に髪などゝも云々とあるが如く。見たてまつるに耻かしくも恐多くもある狀をいふノ
さてのちにかみあしからん人も
髮のたちてなでつけし毛もそゝけたれば。悪き髪あらはに見えて。かみあしき人もかこたんとノ
かしこうぞおぼゆる
[訂]原本ぞもゝなし。さては語格さゝのはず。イ本活本に從ひて。補ひつ
車のしぢさも
女房の車どもに牛をやすめて。楊になが柄をおろしおきたりつるを。又こしにかけて御供につらなんとするさまノ
大門のもとに
[增]法興院釋泉寺の大門ノ。二條の北京極の東にあり。關白藤家公の邸にてありしとぞ
こまもろこしのがくして
樂に。高麗の樂。唐の樂とてあり。拾芥に委

はゝめ女院の御ありさまのめでたく見えしにくらふべくもあらずとノ
めでたしと見え奉りつる御ありさまに是はくらぶべか
らざりけり。朝日はな〳〵とさしあがるほどに。木の葉のい春の若葉なるべし
と花やかにかゝやきて。みこしのかたびらの色つやなどさ
へぞいみしき。后宮の御輿の御綱を張たるノ御つなはりて出させ給ふ。御こしの帷子ノ
うちゆるきたるほど。まことにかしらの毛など人のいふ
はさらにそらごとならず。扨のちにかみあしからん人もか
こちつべし。あさましういつくしう。猶いかでかゝる御前嚴重なる事ノ
になれつかふまつらんと我身もかしこうぞおぼゆる。御我ながら身もたふとくおぼゆる心ノ
こし過させ給ふほど。車のしぢども人だまひにかきおろ人給前ニ註
したりつる。つるをこなの字をそへて見るべし
る心のめでたう興ある有さまいふかたなし。おはしまし
つきたれば。大門のもとにこまもろこしのがくして。獅子笙ノ
こま犬をどりまひ。さうの音つゞみのこゑに物もおぼえ大皷ノ
ず。こはいづくの佛の御國などにきにけるにかあらんと。

あげはり
[増]和名抄に云。幌。和名阿計波利

のりつる所だに
さきに乗車せし所さへはれがましかりしにと云

色のくろさあかさと
あまり晴々しくて髪の色みえわかれぬさんほどなるが

[訂]此の次の「いと侘しより以下いふほどもにさあるまでの三十字は活本になしまづしりなるこそは
清少の恥て下乗し侘て。先車の尻にのりたる人におり給へとゆづるとそれもおなじ心にや
車の尻の人も清少とおなじく恥たるにやと笑ひて立かへりからうじておりぬればよりおはして
大納言殿の笑ひしりぞき給へるが。清少の下りたるに又立かへりよりおはしてとむれたかなどに見せで
是后宮の御調を伊周の申給ふと。清少をもれたかに見せずして下車させよとの仰せ放來りしを。かへりて我を恥るはかひなき事と云

空にひゞきのぼるやうにおぼゆ。門内に入と内に入ぬれば。いろいろ帳の類との錦のあげばりに。みすいとあをくてかけわたし。屏幔之幕のたくひと
んなどひきたるほど。なべてたゞに此世とおぼえず。御さ佛の御國といひし首尾と后宮の御桟敷に女房の車をよせしと
じきにさしよせたれば。又此殿ばら。伊周公隆家殿と立給ひてとくおりよとのたまふ。のりつる所だにありつるを。今すこしあかうけそうなるに。大納言殿いと物〳〵しくきよげにて。御したがさねのしり尻なる女ばう伊周に申ことばと裾と
て。はやとの給ふ。つくろひそへたるかみも。からぎぬの中にてふくだみ。あやしうなりたらん色のくろさあかささへ見わかれぬべきほどなるが。いと侘しければ。ふともえおりず。まづしりなるこそはなどいふほども。それもおなじ心にや。しりぞかせ給へかたじけなしなどいふ。はゞ給おそれがましと大納言の詞と
ふかなと笑ひて。立かへり。からうしておりぬれば。よりおはして。むねたかなどに見せでかくしておろせと。宮の誰ともなし

ひきおろしてぬてまいり
これ清少后宮の御前ちかくめしよせられて上臈の女房と等同の座めしつかはれしはじめの事をいへると

と申給へば
[訂]原本には。うし給へばとあり。イ本活本万歳抄。皆と申とあり。故に改めつまだからの律ぞも奉りながら
御輿の内にては后宮も裳からきぬめしたるにや
紅の御ぞよろしからんや
后宮御裝束に紅をめしたらばよろしかるまじくやとめづらしき文躰と
地ずりの　地摺と。摺繪などのたぐひと
ざうがんかさねたる
象眼。唐のきぬの名也。桃美御說と。御ほそき泥繪などしたると
[増]榮花云。ざうがんうすもの」侍中群要云。下襲象眼」麗景殿繪云。ふたあいのざうが」又云ふかみどりのざうが」などあり。谷川士清云。うすもの〳〵名と
それは殿の太夫の
勘物云。云有長公と。これより后宮の出御のおそかりし故を御物がたりと
院の御供にきて
女院の供奉にて人に見られし同し下襲をき

仰らるれば來たるに。思ひくまなきさとてひきおろしてゐおぼしめすかひもなき事と
てまゐり給ふ。后宮のさやうに被仰つらんほと清少心と
けなし。御前へと
ぬべきばしに。八人ばかり出るにけり。一尺と二尺ばかり
の高さのなげしの
旬伊周清少を誘引の由申給ふと
て。ゐて參りたりと申給へば。后宮の御さまと
出させ給へり。まだからの御ぞも奉りながらおはしますぞいみしき。紅の御ぞよろしからんや。中にからあやの柳
表青裏白と
の御ぞ。えびそめの五重の御ぞに。あかいろのからの御ぞ。
地ずりのからのうす物に。ざうがんかさねたる御もなど
奉りたり。おり物の色。更になべてにるべきやうなし。清少心と
詞と行啓の道のほど儀式の事と
をばいかゞみるとおほせらる。いみしうなん候ひつるな
詞にほめんもよのつれと
どもことに出てばよのつねにのみこそ。句后宮の御詞と待かれたること
それは殿の大夫の院の御供にきて人に見えぬる。おなじ

て。又后宮の御供にもまゐらんは人目わろしとて。別に下﨟を御堂殿の縫させ給へるゆゑそれを着て行啓もおそかりしとぞ

御ひたひあげさせ給へるさいし

[訂]原註に「際次ノ御額のきはをいふなるべし」とあるは非ノ弘按。さいしは釵子ノ。釵子とは婦人儀式のとき前髪にさす具ノ。後世の櫛の類ノ

兵衛督忠君

九條右大臣師輔公男。法興院關白兼家公と同母の弟なれば。道隆公の御をぢといふノ。かの中納言は此むすめノ

[訂]弘云。忠君は原註には忠尹とあり。又本文にはたゞきよとあれど万歳抄ニよりて改めつ。大鏡幷ニ藤氏系譜ニモ忠君は見ゆれども忠尹は見えず

富小路左大臣　顯忠公也。顯忠公の次男。左衛門佐重輔のむすめ宰相の君ノ

宰相はあなたにぬて

后宮清少を近くめしよせんと思召せども。宰相がくてあればかやうに被仰なるべしこゝに三人いとよく見侍ぬべし

宰相の詞ノ。中納言と宰相と清少と三人あらんとノ

下がさねながら。宮の御供にあらん。わろしと人思ひなんとて。ことに下がさね。ぬはせ給ひけるほどに。おそきなりけり。いとすき給へり（御堂殿の好色の事ノ）などゝうちわらはせ給へる。いとあきらかにはれたる所（晴たる所にては猶后宮の御さまあさやかしとノ）は今すこしけざやかにめでたう。御ひたひあげさせ給へるさいじに。御わけめの御ぐしのいとあさ〳〵かよりてしるく見えさせ給ふなどさへぞきこえん（御かたちのみならず其の心ノ）

長櫃ノ

をながさまにへりをして。なげしの上にしきて。中納言の君といふは。殿の御をぢの兵衛のかみたゞきみときこえけるが御むすめ。宰相の君とは富小路の左大臣の御孫。そ（是も后宮の女房ノ）れ二人が上にゐて見え給ふ。御覧じわたして。宰相はあなたにゐて。うへ人どものゐたる所（后宮の御座のほとりにゐしノ）いきて見よと仰らるゝに。心得てこゝに三人いとよく見侍ぬべしと申せば。さはあいなくかしこき御事にかゝりて參れとあぢきなくおそれがましき事にかゝづらひいひて。おそれおほけれどゝノ

あなかたはしたなき事などは又いかゞは

主君の召上らるゝに。人のおもはくを憚りて。あらおそれがましと辭退申さんは。又いかゞなれば。御意のまゝに參上して。誠に身に過たるありさまも有けんと也。是清少の出頭の人の妬むほどに有し事をいふなるべし

陣にちかうまゐりけるまゝ

后宮の御棧敷の前に。此日近衛司陣をひけると見えたり。其故に隆家卿陣に有し出立のまゝに弓箭を帶しておはせしなるべしてうどをわひて

武官の調度弓胡籙など。延喜式云。凡大儀は中將武禮冠。濃緋襖。錦袴襪。將軍帶。金裝横刀。簸着帽巡云々

殿上ゆるさるゝ内舍人

百寮訓要云。是は童殿上などのなる官ノ。昔は武勇を習はせけるほどに。内舍人をば。坂東國へつかはされけるとぞ。今はさやうの事もなし。未元服せずして。殿上の簡に付はみな内舍人ノ云々。清少は女にて元服せで殿上ゆるされたれば。内舍人と准へ云ノふきかたり

[増]源云。今俗にいふ吹聽（フイブン）の吹の義か

清少のめしあげられさせ給へば。しもにゐたる人々殿上ゆるさとてめしあげさせ給へば。しもにゐたる人々殿上ゆるさなどする人はあぢきなくおもへるかといへばいとつきづきしうをかしうてをはす。殿上人四位五位こと〴〵しくうちつれて。御供に侍ひなみゐたり。入せ給ひて見

（是も后宮の女房ノ）

（とみの）

（后宮のノ）

（后宮の女房ノ）

（后宮の御ことばノ）

（法事のありさまたとめしあげん御心を心得てノ）

（清少のめしあげられさせ給へば。しもにゐたる人々殿上ゆるさとてめしあげさせ給へば。しもにゐたる人々殿上ゆるさ）

（清少心ノ）

（清少ここときのものをとノ）

（物知がほして世をもぐくしう。かばかりの）

（可長カシコキおそれがましき事にかゝりてかたじけなけれど。あぢきなくノ）

（過分の身のあたじけなき辱き事などは又いかゞは。誠に身の程過）

（是より又女院などの御棧敷の事を云ノ）

（伊周と道頼とノ）

（關白殿后宮の御かたへノ）

（調度武官の手道具弓箭などノ）

（后宮の御かたノ）

（隆家ノ）

（事々しくノ）

（后宮の御事ノ）

（長櫃ノ）

（是も后宮の女房ノ）

（御かたちのみならず其の心ノ）

（晴たる所にては猶后宮の御さまあさやかしとノ）

（殿上人ノ）

（后宮の御座のほとりにゐしノ）

（后宮のノ）

（一枚ノ）

（后宮の女房ノ）

（清少心ノ）

（旬）

（戰語ノ身をふけりかく我身に面目なる事をいふ事ノ）

（馬副童のほどぞなどいへば。うまさへのほどぞなどいへば。そこに入ゐて見るはいとおもだゝしと。かく我身に面目なる事をいふ事ノ）

（是より又女院などの御棧敷の事を云ノ）

（隆家ノ）

（后宮の御かたノ）

奉らせ給ふに。女房あるかぎり。も。からきぬ。みくしげ殿（后宮の御妹之前ニ註）まできたるまへへり。（関白どの〳〵詞之）殿の上は。裳のうへにこうちきをぞき給へる。（高内侍之）（小袿之）繪にかきたるやうなる御さまども哉。今いらいけふはと申給ひそと之。三四の君の御もぬがせ給へ。此なかの主君にはおまへこそおはしませ。御さじきのまへにぢんをすゑさせ給へるは。おほろけの事かとてうちなかせ給ふ。（御悦ひのゆゑ之）（清少のさまと之）にほひみだるましきに、あかいろさくらの五重ねを着たるを御らんじて。（関白殿御覧して御戯之）法服ひとくだりたら（清少の赤色な法服にかるべき物をと之）ぬを。（切調之）にはかにまとひしつるに。これをこそかり申めはべりにおべかりけれ。さらばもし又。（句）さやうの物をきりしらめたるにとの給はするに又わらひぬ。（伊周之）大納言殿すこしまぞきる（伊周の戯言之）給へるがきゝ給ひて。せいそうづのにやあらんとの給ふ。（隆圓の事と道隆公の御悦光と之）ひとことゝしてをかしからぬ事ぞなきや。僧都の君あか（御子之）色のうす物の御ころも紫のけさ。いとうすき色の御ぞど

さらばもし又　清少の綉をかりたらば。若又餓にまごふまじからんをとの御たはふれ事之

さやうの物をきりしらめ
清少のきぬのやうなる物をきりたち調しと之

［訂］或云きりたちめなるべし

せいそうづのにやあらん
法服にからんとの給ふきぬは。清僧都の衣の事かと之。清少納言なれば。姓をよびて清僧都との給ふと之。法ぶくにつきてのたはふれと之

僧綱の中に威儀具足
僧正。僧都。律師を僧綱といふと之。僧都にてましませば。僧綱のなかに威儀を正してこそおはさめと隆圓に女房の申すたはふれと之。此時隆圓なさなかるべし

紅梅のおり物　表紅うらむらさきと之

大行道導師まゐり
法會のさまと之。大行道あり。導師まゐりて其法事あるさまと之

あぐらたてし
胡床アグラ。腰かくる床机のたぐひと之。勅使座したるなるべし

も。さしぬきばかりにて。菩薩之ありき給ふもいとをかし。僧綱の中に威儀具足してもおはしまさで。見ぐるしう女房の中になどわらふ。父の大納言ど（大納言ど）のゝおまへと見るべし言殿御まへより。（伊周の御子道雅三位と二三才にや松君ぬて奉る。えび染のおりものゝなほし。（松君なと之）きあやのうちたる。紅梅のおり物などき給へり。例の四位五位いとおほかり。御さじきに女房の中にいれ奉る。何事のあやまりにかなきのゝしり給ふさへいとはえ（松君につきたる人と之）ぢ〳〵し。（法事之）事はじまりて一切經をはすの花のあかきに一ばん（一巻にや一連に經なづゝにいれて。僧ぞく（俗之）上達部殿上人地下六位何くれまでもて渡るいみしうたふとし。大行道。（たいぎやうだう）導師まゐり。（たうし）舞樂之うたはしもちてまひなどする。日ぐらし（終日之）見るに目もたゆくくるしう。内の御つかひ（殿下への勅使之）に五位の藏人まゐりたり。御さじきのまへにあぐらたてゝゐたるなど。（句）けにぞ猶めでたき。夜さりつかた式部のぜう（即理前ニ註）のりまさまゐりたり。やがて（后宮への御使之）

宮は猶かへりてのち　后宮のまづ則理禁中へかへりてのち入御あらんと之

たゝ仰せのまゝとていらせ給ひなどすイなんとす。帝の御意にしたがひ給へと殿もの給ひて。后宮入御あらんとする之

ちかのしほがまなどやう　女院后宮と近くおはしながら御對面なかりし心にや「みちのくの千賀のしほがまちかながらかうきは人にあはぬなりけり」續後撰の哥ながら古哥之

きよく見えず　世話にすきと見えぬといへる心なるべし

あさやかなるきぬの　經供養の晴の出たちのまゝなるべし

さなふることもさいはれたり　いかにかく心なきぞと一人いへば。皆同じ心に從者をしかる故に。其詞をさなふるごとく從者共がいはれたりしと之

夜さりいらせ給ふべし。御供（即理其まゝありて后宮の御供申せとの宣旨と之）にさふらへとせんじ侍りつとてかへりもまるらず。宮は猶かへりてのちにとの給はすれども。又藏人の辨まるりて殿にも（道隆公へも后宮をまるらせ給へとの勅言なり之）御せうそこあれば。只仰せのまゝとていらせ給ひなんとす可用之）院の御さじきより。ちかのしほがまなどやうの御せうそこ。（御くだ物等之）をかしき物などもてまるりかよひたるなどもめでたし。事はてゝ院かへらせ給ふ。院司上達部（女院之）などこぞつかふまつり給ひけるに。宮は内へいらせ給ひぬるもしらず。女房のさぶらひ（はじめの二條のみやに還御ならんとて之）。二條の宮にぞおはしまさんとて。そこにみなきゐて。（后宮の御供にて參内せし女房は從者の驛具持てこんと之）イ持ほどにとのゐものもてきたらんとまつにきよく見えず。あさやかなるきぬの身にもつかぬをきて。さむきまゝに。（從者の來ぬ事をにくむ之）にくみばらたてどかひなし。つとめてきたるを。（翌朝に從者の內裏へきたる之）いかにかく心なきぞおぼこりもと（主の寒からんと心の付ぬをしかると之）いへば。となふることもさいはれたり。又の日雨

御心おちゐ　御心のおちつきたる心之。桐壺卷に女御も御心おちゐ給と有。

〔訂〕さて此の次にイ本左の數句有「されどそのなりめでたしと見奉りし御ことゞもゝ。今の世の御ことゝもに。見奉りくらぶるに。すべてひとつに申べきにもあらねば。物うくておほかりしことゞもみなとゞめつ」

九條錫杖　不空三藏の作一卷あり。是にふしほかせを付て。聲明にする事之。錫杖の聲をきけば。一切衆生菩提心をおこし。諸佛もこれを持て成佛し給ふ。すべて功德ふかきことわりなのべられし之

念佛の廻向　光明遍昭十方世界念佛衆生攝取不捨。觀經の廻向の文也。惠心尺云。廻二所作業一趣二向於彼一謂二之廻向一。

哥は　和哥詠物等之

杉たてる門　古今「我庵はみわの山もと戀しくばとふらひきませ杉たてるかど」袋双紙に此哥三輪明神云々

神樂哥　內侍所の御神樂の詠物之。庭燎採物の哥等あり。梁塵愚案抄に。一條禪閤の御註あり

今やうは　今樣哥とて。催馬樂朗詠などのやうに酒宴等にうたふ物之。（藏前註）

見えたり　ふぞくようたひたる　風俗の詠物とてあり。拾芥風俗部云。鳴高又號二大宮一。難波の都布其江。玉垂。知々其々。東路。筑波山。甲斐がね。伊勢人。常陸哥。荒田。大島。入乙女。我門。是らうたひもの〳〵名なるべし

夏むしのいろ　桃華蘗葉に。裏のなきすゞしの惣名を蟬の羽色といへり。其たくひにや

ふりたるを。殿はこれになんわがすくせは見え侍ぬる。いかゞ御らんずると聞えさせ給ふ。御心おちゐ（きのふの供養の日雨ふらぬにて我前世の果報見ゆると御よろこびと之）

百三十四段　たふとき物

九條しやくぢやう。念佛のゑかう」

百三十五段

哥ぱ

杉たてる門。神樂哥（かぐら）もをかし。今やうはながくてくせづきたる。ふぞくようたひたる」（一曲あるをいふと之）

百三十六段

さしぬきのこき。（二藍前註）もえき（萌黄）。夏は二あるゝ。いとあつき比夏虫

[増]後撰集に蟬を夏虫とよめる歌あり

百三十七段

かうそめ　香染と
やなぎ　裏白裏青云々
男は何色のきぬも
すべて男の出立は何色も似合との心なるべし。イニ何色のきぬもきたれさあり。何色も着てあれくるしからずとの心と

百三十八段

ひのさうぞくの紅の單
日の裝束。晝の裝束といふ心にて。東帶の事と。こゝにいふは袍の下に着る紅の一重の事と
れりいろのきぬもきたれど　練色のきぬをも勿論きるはきるなれどもとの心と。練色は赤きなり前にあり
白うてぞ　まさりてこそ
[訂]此のぞこそは下に結ふ辭のあるべきを省きたる格なるべし
活本にはこそなくしてまさりてにて結びたり。是は俗にてどめといふ格にて歌文共に此例あり

百三十九段

さるはかう思ふ人よろづの事にすぐれてもえあらず
詞の文字一つのせんさくもする清少なれども。人の上のみ沙汰して。みづからは万事にすぐれもえせずとの心と

の色したるも涼しけ也」

かりきぬは
かうそめのうすき。白き。ふくさのあか色。松の葉色した　表青裏紫裏白云々
る。青葉。さくら。やまき。又あをき。ふぢ。男はなにいろの　表白裏赤花
きぬも」

ひとへは
白き。ひのさうぞくの紅のひとへ。あこめなどかりそめに
きたるはよし。されど猶色　紅の色のかへりたると　ばみたるひとへなどきたるは。いと心づきなし。ねり色のきぬもきたれど。猶ひとへ
は白うてぞ。男も女も万の事もさりてこそ」

わろき物は
詞の文字あやしくつかひたるこそあれ。たゞもじ一つに　わろくあれとの
心得がたくおもふ心と　貴とけ高きと　清少みづからいへり
あやしくも。あてにも。やいしくもなるは。いかなるにかあらん。さるはかう思ふひとよろづの事にすぐれてもえあ

さりとも人をしらじ。たゞさうちおぼゆるもいふめり
人の上はいふとも。我すぐれてこそ人の善悪もいはめ我すぐれずして外の善悪はいかで知ならんとの心と
故口にまかせていふならんとの心と
其事させんとすといはんといふを
大事の難義の事をいふとて。其事をさやうにせんとすとも。又はといはんなどいふべき事を。と文字をいひおとして。只いはんするといひ。又は里へいでんするなどいへば。頓てあらぬ事に成て悪きさまなるべしまして文を書てはいふべきにもあらず
只詞をいひたがへても悪きに。まして文を書たがへては。あしとも何ともいふべきにもあらずとの心と
なほ定本のまゝ
物語の悪く書し所を直すも口をしく。定本のまゝなど書付たるもいと口をしとの心と
[訂]弘云。世にある枕草紙活本に二種あり。その古板は黒川眞頼翁の藏本にあれど此段にて大尾となりて。したがされは以下の文なし。少し新らしき活本(元祿頃の板)は小中村清矩翁藏本にあり。是より以下終りまであり

したがされ　打下襲。張下襲。染下襲など品々あり。公卿及禁色の人は綾を用。非色の人は平絹と。胡曾抄に猶委
冬はつゝ　桃華藥葉云。禁色をゆるされぬ殿上人の平絹の下襲を闕腋の打下襲といふ。それも裏はふしかれにて染るとの心と。又云染下襲。闕腋は表すはうと。うち青打と

らじかし。いづれをよきあしきとはしるにかあらん。さりとも人をしらじたゞさうちおぼゆるもいふめり
事をいひて。其事させんとす。といはんといふを。と文字をうしなひてたゞさうちおぼゆるもいふめり。難義のやがていとわろし。ましてそあしうかきなどすればいひかひなく。
らず。物がたりこそ　書損したれば作者の本意たがへばつくり人さへいとほしけれ。なほす。定本のまゝなどかき付たるいと口をし。　此詞分明ならずもとむといふ事を見んとみないふめり。いとあやしき事を男などはわざとつくろはで。ことさらにいふはあしからず。わがことばにもてつけていふが心おとりする事也」

したがされは
冬はつゝじ。かひねりがされ。すはうかされ。夏はふたあ
る。しらがされ」

かいれりがされ　桃華云。掻綴うらおもて紅。打。或はうら張。又云二次色。自レ冬至レ春
すはうがされ　桃華云。すはうの打下襲。本は打べきなり。近代板引にするなり。
表白綾裏濃打
ふたあゐ　胡曹抄云。以二赤花及二青花一染レ之。無文穀或生平絹。非色人用レ之或公卿着レ之
しらがされ　桃華云。白襲といふは。綾もしは平絹なり。表裏白綾にして着す。或は表裏只張。四月十月更衣の外は暑月に着レ之

百四十一段

あをいろはあかき
青色の地紙には赤骨はえあふさゝイほをいろは蒲黄色にや

あふぎのほねは
紫の地紙には綠の骨とゝ
ひあふぎ　桃華云。檜扇は二十五枚。若年の時は白糸にてとぢて。糸のあまりを藤の花をおき物にして。かなめのうへより二三寸持所をのこすべし。東帯の時は夏も檜扇を持也(畧註)。これは一條殿男の檜扇をしるさせ給へるおもむきとゝ。女房の檜扇色々あり。とぢもさま〴〵とゝ。糸のあまりをあはび結ひにして花をむすびつけても用ゐ。かなめは蝶鳥など金にてうちて用ゐるむもん　無地の事なるべし

百四十二段

百四十三段

松尾　三代實錄十三曰。貞觀八年十一月廿日。進二山城國松尾神階一加二正一位一。延喜式九曰。山城國葛野郡松尾神社二座。廿二社次第曰。松尾大山咋神。市杵島姫神。今社家說曰。第一松尾社。第二月讀社。第三櫟谷社。第四三宮。第五宗像社。第六大神社。第七衣手社
八幡はこの國のみかど
八王十六代應神天皇にておはしますゝ。廿二社次第曰。八幡三所。應神天皇。神功皇后。玉依姫。貞觀元年九月十九日。行教和尚於二男山峰一建立。中下畧

松の尾。八幡。此國のみかどにておはしましけんこそいとめでたけれ。みゆきなどになぎの花のみこしに奉るなどいとめでたし。大原野。かもは更ゝ。いなり。春日いとめでたく覺えさせ給ふ。さほどのなど云名さへをかし。平野はいたづらなる屋ありしを。こゝは何する所ぞととひしかば。神奧を宿しおく所ゝ　神は

百四十四段

百四十五段

大原野　玄旨法印云。嘉祥三年に閑院左大臣冬嗣。わが氏神春日を勸請申されたり。
猶廿二社次第に委
賀茂はさらなり　公事根源云。下鴨は御祖。上賀茂は別雷。此御祖の神を玉依姫と申。賀茂建角身命の女也。廿二社本縁云。後一條院行幸の時。山城の國を寄進し給ふによりて。今は當國の惣社にてまします也。猶書々にあり
いなり　延喜式等前に註。公事根源云。かの社の禰宜祝の說には。和銅年中にはじめて伊奈利山にあらはれ給ひけるとかや。或は弘法大師東寺の門前にて稻負たる老翁にあひ給ひけるを。東寺の鎭守に勸請申されたると申說も侍る也。扨いなりとは稻を荷ふと書たる事也。猶諸書にくはし
春日　廿二社次第曰。第一建甕槌命(常陸鹿島)。第二齋主命(下總香取)。以後造二神殿一下畧。猶書々に委
さほどのなどいふ名さへ　佐保殿。奈良にあり。淡海公の家。冬嗣の大臣の家と拾芥に有り
平野　延喜式第一曰。平野神四座祭。今木。久度神。古關神。相殿比賣神。猶委
秋にはあへずとみこもりの神　古今「千早振神のいがきにはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり」貫之
三代實錄二曰。大和國宇陀水分神。吉野水分神。葛木水分神云々

百四十四段

からさき　近江ゝ
伊かゞ崎　入雲河内云々
[增]弘按。いかゞ崎は。かけろふの日記。石山まうでの所にも見えて。近江なることあきらけし
みほがさき　入雲云。近江。万葉まなかの浦云々。又曰みほの崎出雲云々兩所ゝ

崎は
からさき。いかゞさき。みほがさき」

百四十五段

まろ屋　廬の丸屋等ちひさき賤の屋をゝ云
時そうする　禁秘抄云。奏レ時事。上古醫ニ陰陽察漏剋一奏レ之。近代指計藏人仰レ之。丑杭以後爲二明日分一。源氏奥入云。亥一剋左近衞夜行。官人初奏レ時。終二子四剋一下畧。愚

屋は
一條禪閤御說四阿は御所作りなどのあまだりの四方におつるをゝ云
まろ屋。あづまや」
是より例の筆すさびゝ
時そうするいみしうをかし。いみしう寒きに。夜なかはか

案。禁中に夜時を奏する事あり。昔は陰陽寮の屬官に漏剋博士有て。十二時の一時を四剋にわりて漏剋を置て守辰丁として。其漏剋を守る者有て。其時々に鐘鼓をうつ。夜に入て亥の一剋より左近衛夜行するに。官人亥の一剋のよし時を奏せし。丑の一剋より右近衛夜行す。桐壺巻に。右近のつかさのとのゐまうしの聲きこゆるはうしになりぬるなるべしといへるも是。然るに近代順徳院の御時のころは。藏人さしはからひて時を奏せしと。漏剋とは銅壺に水を入て筒をたて。其筒に四十八剋をつけて。彼銅壺の水のしたゝりて一つのきざをあらはせば是一剋と。二つあらはせば二剋と。かくて四つあらはせば一時と。其故に子一二三四丑。一二三四などいふと。此漏剋の筒のきざの數。或は百剋にせゝ事もあれど。此草紙などの比は四十八剋にや。すべて何も〳〵四つのみぞくひはさしけるといへり。伊勢物語に子一つより丑三つまでといふも是と。源氏大和物語等にも如此と

れ九つうし八つなどぞ　是よのつねの時をうつ數。子は九。丑は八時なれば。里人さやうにいへど。禁中に時を奏し。時の杭をさすは。漏剋にしたがひて。何時も四つゝばかり也と清少まさしく后宮にみやづかへして見きゝたりし所をいへる詞と。里びたるとは里めきたるなり。平人をさびたる人といふと。延喜式陰陽寮云。諸時ニ撃レ鼓。子午ハ各九つ。丑未ハ八。寅申ハ七。卯酉ハ六。辰戌五。巳亥四云々

成信中將は入道兵部卿の宮の御子
源成信。兵部卿致平親王男。長徳四年左中將前に人のこゑをよく聞しり給ひし人なり

（是も筆すさびの）成信中將ぱ。入道兵部卿の宮の御子にて。かたちいとをかしげに。心はへもいとをかしうおはす。伊豫守（誰ともしらず）かねすけが（親にくゝしてむすめも下るにや）むすめの忘られて。いよへおやのくだりしほど。いかにあ

りなどに。（時をそうする官人のしはぶきと）こほ〳〵とごほめき。くつすりきて。つるうちなどして。なんけの何がし。（何家の何と名を名のると）時うしみつ。（丑三奏と時是と子四と）ねよつなどあてはか（貫と）なるこゑにいひて。（時杭と十二時の時〳〵に杭をさす事ありかの禁秘抄に丑杭とある）ときのくひさすおとなどいみしうをかし。ね九つ。うし八つなどこそさとびたる人はいへ。すべて何も〳〵よつのみぞくひはさしける」

（或は深夜などと）とあるつかた。いたう夜ふけて。ねの時（主上の殿上人を召事と）なども思ひまるらする程に。をのこどもめしたるこそいみしうをかしけれ。夜中ばかりに又御（主上のふかせ給ふなるべし）ふえのきこえたるいみしうめでたし」

（かくたち心ばへよき人に忘られて下れば）ぱれなりけんとこそおぼえしか。（女の伊豫へゆく名殘に成信のおぼせしと）あかつきにいくとて。こよひおぱしまして。有明の月にかへり給ひけんなほしすがたなどこそ。（句此女の未忘られざりし時と）おぼえしか。そのかみつねにゐて物がたりし人のうへ（ものいまひなど實法にすると）きはわろしなどのたまひしに。物いみなどくす（名を姓にて）しうするものゝ。（たとへば赤染衛門藤式部などのたぐひ其名を姓にてもたる人のあるが。こと人の子になりて平（たひら）などいへど。たゞもとのしやうをわかきの（兵部がやかたハ殊にすぐれたるもなしと）きたる事と）ぐさにてわらふ。ありさまもことなる事なし。兵部とてをかしかたなどもかたきが。さすがに人などに（口すさびの心と）人々ことぐさにてわらふ。ありさまもことなる事なし。兵部とてをかしかたなどもかたきが。さすがに人などに（物にさし出る心と）さしまじり心などのあるぱ。御まへわたりに見ぐるしなど仰らるれど。（腹黒也意地わろき心と）腹ぎたなくしりつぐる人もなし。一條の院つくられたる一間（ひとま）の所には。つらき人をばさらによせず。（彼一間の所ないふと東の御門に向ひて小廂有と）東の御門（かど）につとむかひて。をかしき小びさしに。式部のおもともによるもひるもあれば。うへもつねに物御（ここにては后宮を申と）（東の御門にちかく行かふ人もあればと）らんじに出させ給ふ。こよひばみなうちにねんとて。南の

ひさしにふたり（式部と清少）ふしぬるのちに。（男の來て戸たゝく）みしうたゝく人のあるに。うるさしなどいひあはせてねたるやうにてあれば。猶いみしうたゝく中將にこそ（后宮の御詞）あれおこせ。空ねならんと仰られければ。此兵部きておこせど。ねたるさまなれは。更におき給はざりけりといひにいきたるが。やがてうつきて物いふなり。まばしかと思ふに夜いたうふけぬ。權（ひそかに式部と）中將にこそあなれ。こは何事をかうはいふとて。只みそか（兵部と）にわらふもいかでかしらん。曉（あかつき）までいひあかしてかへり（兵部と）ぬ。此君いとゆゝしかりけり。さらにおはせんに物いはじ。何事をさはいひあかすぞなどわらふに。やり戸をあけて（是より兵部が）女ぱいりぬ。つとめて例のひさしに物いふをきけば。雨の（人の物いふ）いみしうふる日きたる人なんいとあはれなる。日ごろおほつかなうつらめしくともと（久しうとはでうらめしくともと）（是より兵部が）いふことばうつらき事ありとも。さてぬれてきたらば。うき事もみな忘ぬべしとはなどていふにかあらんを。よへき

うるさしなどいひ合て
れてのちおきて戸あけん事うるさしと式
部と清少いひ合せてと。前につらき人をば
更によせずといへる首尾なり

やがてわ付て物いふと
彼兵部清少のおきぬ由を戸たゝく男にいはむとて行ながら。やがて其男と語ふと
まばしかとおもふに
しばらく斗物いふかとおもへば更るまでと

櫺中將にこそあなれ
戸たゝきし男をおしはかりて清少の式部にいへる詞と。櫺中將とは前の成信にや

何事をかうはいふぞ
此兵部うちつけに何事を夜更るまでいふぞやと。此中將は清少に心ざしてきたる人なるに。心あさき。しわざなればそしる心なるべし

例のひさしに
前にをかしきこひさしにといへるゆゑ例のひさしにといふと

さてぬれて
〔訂〕イ本「さはらで」とあり
などていふにかあらんを
此をの字やすめ字と。兵部は何とてかやういふにいふ事ぞと清少のあやしむ詞と

さて日比も見えずおぼつかなくて　彼兵部
が詞に日比おぼつかなうつらき事有ともといひしに答たる詞と

人の心〳〵なればにや
男の心々にてさま〴〵のしわざする物なればとの心と。熊雨夜などにくる事を次にいはんとてと

〔訂〕人の心〳〵なればにやあらん」とあるを。萬歳抄には「人の心〳〵なる物なればにや」とあり

よすがなどもあれば
もとよりたよりとたのむ本妻をいふと

人にも語りつがせ
かやうの雨ふりてわりなき日しも來たりし事と。女に心ふかく思はせて。人にも語り繼がせて。名聞がましくする男のしわざにやと

見えんとも思はん　少〳〵は其女に心ざしはあるべけれどもと

いみじきほそどの〳〵
廊の局などの面白き所にて逢ても雨には無興と

詞のあやしき子細をここわる詞と
のふの夜も。それがあなたの夜も。すべて此比はうちしきり見ゆる人の。こよひもいみしからん雨にさはらできたらんは。一夜もへたてじと思ふなめりとあはれなるべし。

さて日比も見えず。おぼつかなくてすぐさん人の。かゝるをりにもこんをば。さらに又心ざしあるにはえせじとこそおもへ。人の心〳〵なればにやあらん。物見しり思ひしりたる女の心ありと見ゆるなどをばかたらひて。（猶外にかよふ所と）あまたいく所もあり。もとよりのよすがなどもあれば。まげうしもえこぬを。猶さるいみしかりしをりにきたりし事など。（雨いみしうふるなりと）人にも語つがせ。（雨ふる折にきたりし心ざしある人とおもはれんと）それもむげに心ざしなからんにはなよ〳〵とまつくり事まことしてもみえんともおもはん。されど雨のふる時はたゞむつかしう。次に月の夜とひくるがよき事をいはんとて）けさまではれ〴〵しかりつるそらともおぼえずにく〳〵ていみしきはそどの〳〵めでたき所ともお

こそおぼゆれ
［訂］イ本萬歳抄には此の下に「をかしきことあはれなることもなきものを」とあり
月のあかきにきたらん人はしも十日
イ本「月のあかきはしも。過にしかた行末まで思ひのこさるる事なく。心もあくがれめでたくあはれなる事たぐひなくおぼゆ。それにきたらん人は十日二十日とあり
［訂］此段原本には上行につゞけたれど。例の筆すさびにて別段のやうなれば。今改めつ。濆按。月あかきより別段とすべし

とほく物思ひやられ
朗詠。三五夜中新月色。二千里外古人心。又。誰人鬲外久征戍。何處庭前新別離
こまの〳〵物がたり
今の世に傳らぬ物がたりと見えたり。是も月夜のおもしろきことをいはんとてこ
もと見しこまにも
大和物語に「夕されば道も見えねど古郷はもとこし駒にまかせてぞゆく」後撰集にもある也。此うたを詠吟せしさまにや
いとあはれ也
［訂］原本にはかとあはれ也とあれど。イ本によりて改めつ
盈云。かとあはれ也とは。かいとありけん。いとのいの字おちしなるべし

ぼえず。ましていとさらぬ家などは。とくふりやみねかし
とこそおぼゆれ」
月のあかきにきたらん人はしも。十日。廿日。一月。もしは一年にても。まして七八年にても。思ひ出たらんは
いみしうをかしとおぼえて。ええふまじうわりなき所。人めつゝむべきやうありとも。かならず立ながらも物いひてかへし。又とまるべからんをはとゞめなどしつべし。月のあかきみるはかり。とほくもの思ひやられ。過にし事うかりしもうれしかりしも。をしとおぼえしも只今のやうにおぼゆるをりやはある。こまの〳〵物がたりは何はかりをかしき事もなく。詞もふるめき。見所おはからねど。
しみのさしたる扇之
月にむかしを思出てむしばみたるかはほりとり出て。もろに對していふ
なき物と思ひしみたれはにや。かた時ふるもいとにくゝ

かたの〳〵少將もどきたるおちくぼの少將
是も雨の降につゞけて來たりし古事をいへる乙。おちくぼの物語四册有。中納言のむすめあまたあるなかに。わかんどうり腹の君見め心ばへすぐれしを繼母にくみてひき〳〵所にすませておちくぼの君と名付たり。それを右近の少將といふ人心ざしふかくて雨のふるよかよひそめたり。其比交野の少將といふ人も此君に心かけたれど。早く右近少將の得給へるを。かたの〳〵少將もどきたるを此草紙にはいふにや
これもよべなどいひの夜もありしかばこそをかしけれ。あしあゝひたるぞ
彼少將雨のふる夜かよひそめて又の日もおはしたり。さて三日の夜にあたりし夜。おちくぼの君に志有てつかふるあこぎといへる女。さま〴〵かくまへて餅飯などを用意して待に。雨いたく降出したれば。少將今夜はえいくまじきよしいひやり給へば。女君「世にふるをうき身とおもふわが袖のぬれはやめける宵の雨哉」といひおこせしに少將れんじ佗て。彼あこぎにかふ帶刀と云男一人を具して。雨にぬれ〳〵きにておわしたり。帶刀が曹子にてまづ水もて御足すゝぎと彼物語りにあり。これを此草紙によべなどいひの夜も有しかばこそをかしけれとかけるにや。又足洗ひたるがきたなき故も彼物がたりに委し見て了會あるべし

ぞある。やんごとなき事。おもしろかるべき事。たふとくめでたかるべき事なき事。雨だにふれはいふかひなく口をしきに。何か其ぬれたのゝ少將もどきさるゝ
前によべきのふの夜などいひし首尾之
れもよべをとゝひの夜も有しかはこそをかしけれ。足あらひたるぞにくゝきたなかりけん。さらでは何か。風などの吹あら〳〵しき夜きたるはたのもしくてをかしうもありなん。雪こそいとめでたけれ。忘れめやなどひとりごちて。しのびたる事はさら也。いとさあらぬところも。なほしなどは更にもいはず。かり衣うへのきぬ。藏人のあをいろ
雪にぬれしさまの
などのいとひやゝかにぬれたらんは。いみしうをかしかるべし。むかしの藏人はよるなど人のもとなどに。たゞあを色
六位の事之絲彩ロウサウ六位の袍の色之いせ物がたりにあり
をきて雨にぬれてもしほりなどしけるとか。今はひるだ

青色をきぬこと
にきざめり。只〳〵ろうさうをのみうちかつきためれ。衛府之衛門兵衛のたぐひこ歳人の衛府を築こいいみしかりし物を
どのきたるはゆゑもしらでいとをかしかりし物を。雨にくる人は日比のつらさも忘るこ兵部が詞をきゝてはこ
にありかぬ人やはあらんずらん。月のいとあかき夜。紅の別の儀もなけれご御見まひになご書たるを。ひさし
紙のいみしうあかきに。たゞあらずとも書たるを。月にあて〳〵見しこそをかしかりしか。
にさしいれたるを。月に見る輿などはあらじこと
雨ふらんをりばさはありなんや」
是より別段こ
つねに文おこする人の何かはいまばいふかひなし。人につれなきを恨たる男の詞こ
はこ文をもやらじこと
さばなどいひて。又の日おともせねば。さすがにあけたてつれなくて過しかごさすがにこ
ば文の見えぬこそさうざうしけれと思ひて。さてもきは
〳〵しかりけるこ心かななどいひてくらしつ。又の日雨い
男のたえたるをさすがに佗たる心こ
たうふる。ひるまで音もせねば。むけに思ひたえにけりな
どいひて。はしのかたにゐたる夕ぐれに。笠さしたるわら
文をこ待かれしゆゑこ
はのもてきたるを。つねよりもとくあけてみれば。水ます
雨のとある。いとおほくよみ出しつるうたどもよりはを

あけたてば文の見えぬ
夜明れば文もてきし物の。けさは文も見えねばさびしきこと。古今「あけたてば蟬のをりはへ鳴きくらしよるは螢のもえこそ明せ」とよめる詞こ

水ます雨の　古今「まこもかるよごの河水雨ふればつねよりことにまさる我こひ」此うたを翠せる詞にや猶可考こ

あしたはさしもあらず
雪ふるべくも見えざりし心こ

色紙のむすべたる
［訂］イ本むすびたるとあり。さてはよく解されたり。然れども此のむすべのべばれの約言にもや。さらば本のまゝにても聞ゆべし
ひきわたしけるすみ
封ド目の墨なるべし。墨ひく内に筆の氷たるさまこ。珍しく面白き文躰にやこまこ〳〵とくぼみしこ
くだりせばに　行の間せばく細かに書しこ
うらうへかきみだり
うらおもてに書みだしたるこ

うちほゝゑむ所はゆかしけれど
文みるこ〳〵少笑ひたるは何事書し所ぞとかたはらよりゆかしき心こ
さなめりとおぼゆる
それの事とおしはかる心こ。それなりけりといふにおなじ

かし。たゞあしたはさしも見えざりつるそらのことイけさはさしもあらず寒こ
らうかきくもりて。雪のかきくらしふるに。いと心ぼそくしんめきたる心こ
見出すほどもなくしろくつもりて。猶いみしうふるに。隨するを
身だちてほうやかに。びゞしきこ美々しきこをのこの。からかささして。
そばのかたなる家のとより入て。文をさしいれたるこそをむすひこ月こ
かしけれ。いとしろきみちのくにがみ。しろき色紙のむすべたる。うへにひきわたしけるすみのふと氷りにけれは。すそうすになりたるを。あけたれはいとほそくまきて。むすびたるまきめはこまこ〳〵とくぼみたるに。すみのいとくろううすく。くだりせばに。うらうへかきみだりたるをも。うちかへし久しう見るこそ。何事ならんと。よそにて見やりたるをかしけれ。まいてうちほゝゑむ所はいとゆかしけれ。まいてうちほゝゑむ所はいとゆかしけれど。とほうなるたるはくろき文字などはかりぞ。さなめりとおぼゆるかし。ひたひがみながやかに。容貌よき女こおもやうよ

き人の。くらきほどに文をえて。火ともすほども心もとなきにや。火をけの火をはさみあげて。たど〳〵しげに見るたるこそをかしけれ」

きら〳〵しき物

大将の御さきおひたる。孔雀經の御讀經。御修法ば五大尊。藏人の式部のぜう白馬の目おほぢねりたる。御齋會左右衞門佐すりぎぬやりたる。

きら〳〵しき物

威儀正しく見るかひある心ゑ

大將の御さきおひたる

大將は近衞の隨身のつかさなれは警蹕一しほきら〳〵しかるべし

孔雀經の御讀經

孔雀明王の法也。大藏綱目指要錄四曰。孔雀經三卷。裴底比丘蛇螫レ足痛。阿難白レ佛乃說二大孔雀神呪一往救。由レ是彌勒諸天諸龍等各說二神呪一云々。經云若讀誦者若受持書若書寫者皆得二安樂一所レ求遂レ願如二前廣說一乃至自身及諸眷屬壽命百年矣。此明王のかたち孔雀の舞羽の御修法。降三世。軍荼利。大威德。金剛夜叉。中央不動。稱名院御說云。

禁中にておこなはるゝ之。不動を中尊にて五大明王の法を修せらるゝ之

[增]弘云。紫日記初段「後夜のかねうちおどろかして五壇のみずほふときはじめつ」とあり

藏人の式部のぜうあを馬の日おほぢねりたる

藏人の式部のぜうは祭友也。赤染衞門集云。たかちかの藏人。白馬の日式部の丞にて渡りしを見て。又の日まさむねがむすめのいひたりし。さりてのちなれば「いづくにか目のとまりけん行過るおほよそ人とかつは見ながら」(下略)白馬節に下名を式部兵部に內辨の給ふ次第あり。又位記の筥を給りて庭中の案に置次第等江次第に有。此出仕に大路をねるにや

御齋會右兵衞門佐すりぎぬやりたる

御齋會とは。公事根源云。是は大極殿にて八日より十四日まで七ヶ日の間最勝王經を講ぜられて朝家を祈り申侍る也。此の經とり分國家を護持する功能あるによりて。あら玉の年の始にはまづ講ぜらるゝにや云々。延喜式四十六。左右衞門式云。御齋會凡正月講二最勝王經一所進二衞士十五人幷雜花一瓶一其種子稻五十束請二山城國便郡一簡備爲二十三荷一赤進二會所一凡正月講二最勝經一所進二穢柳八株一云々。この時左右の衞門佐の摺衣着するとあるにや。又御齋會に左右の撿非違使佐となる事なれば。此時すり衣やりてきら〳〵しき威儀あるをいふにや。イ本此次にそんとやうわうの御修法とあり。

宣旨をかうふりて撿非違使佐となる事なれば。此時すり衣やりてきら〳〵しき威儀あるをいふにや。イ本此次にそんとやうわうの御修法とあり。

尊勝大明王の法にや。經云此尊勝大明王是世間母。一切衆生咸同二其子一云々。尊勝大明王經一卷あり。四天竺譯經三藏施護譯

[訂]弘云。御齋會以下万歲抄にはなし然して左の如くあり

「その日ゆげひのすけのすりぎぬやりたるそんしやう王の御修法」

季の御讀經　前に註公事根源云。二月八月に大般若を百數にて讀ぜらる。四ケ日の事にて第二日には引茶だて僧に茶をたまふ事あり云々。延喜大政官式云。凡春秋二季於二大極殿一修二讀經一辨史事當二行事一初後兩日親王以下參議以下就二殿上座一遣二近衞少將一勞問

幟盛光の御修法

妖星のたゝり。國王大臣などの居所の祈禱などにおこなふ云々。一切經藏の槐函に大威德金輪佛頂幟盛光如來消除一切災難陀羅尼經一卷あり。四天の譯經三藏施護の飜譯なり。又佛說幟盛光大威德消災吉祥陀羅尼經あり。不空三藏の譯也。經云。念二此陀羅尼一切災難皆消滅不レ能レ爲レ害云々

神鳴の陣　前に註。延喜式四十五云。凡大雷時左右近衞陣二御在所一云々これ之。こんげんろくの御屏風　坤元錄の山河などのさまを繪にかきし屏風ゑ。則詩の賦明が註にも坤元錄の屏風詩と所々に出たり

[訂]倭註云。此屏風をいへるは。きら〳〵しき物にはあらざるべし。此まへに脫文あるかんとよの御屏風　漢書にしるしたる事どもをかきし屏風なれば雄々しくきこゆるとこ。前漢書は十二帝記。八表。十志。七十列傳。すべて百廿八卷。班固撰也。後漢書は十帝記。八志。八十列傳。すべて百廿卷。范曄撰レ之

月次の御屏風　年中行事をかゝれたるを云ゑ。源氏に月次の御繪とあるもおなし

是より筆すさびなり

かたたがへなどして夜ふかく歸る。さむきことといとわりなく。おとがひなども皆おちぬべきを。からうしてきつき我家にゑ

て火をけ引よせたるに。火のおほきにて露くろみたる所なくめでたきを。こまかなるはいのなかよりおこし出た

ること人の來て炭いれておこすこそ
心もなき外人の。火桶の消がたなる故に。めたと炭をつみがされなどしたるが。火桶の内きれいならぬをにくめるにや其心次の詞に見ゆ
中に火なと云々
[訂]濵云。此所の傍註に原本灰はとあり。こは炭はの誤ノ

れいならず御かうしまゐらせて　常は雪の物見に格子を上るにけふは寒氣ゆゑ御格子おろさせたるノ
かうろほうの　香爐峯雪面白き所なればかくの給ふノ。此詞后宮なるべし。但基俊の悦目抄には一條院の勅言とあり
みす高くまきあげ
則詠遺愛寺鐘欹枕聽。香爐峯雪撥簾看。白樂天の詩ノ

此宮の人には　時の人清少をほめて此后宮の御方にては可然人といふノ
[增]傍註云。夫などの清少をほめて。此宮の御方にさふらふ人なれば。さろふることをも知べき事ノといふノ。註は少かたがひて聞ゆ
陰陽師のもとなる
これより又別段ノ

しろき水いかけさせよ
祓して物のけなどの絕入たる時。面に冷水をそゝけともいはぬに彼童の物なれ心得て立走りて其事しありくノ。いかけ。沃懸也。源氏槇柱卷に火取なさといかけとあるたぐひなるべし
さらん人もがな　さやうならん從者もがなとノ
[訂]人もは原本人なに作る。古鈔本にはもとあり
弘按。かともとはまぎれ易きもゝなれば誤りしならん。今改めつ
物いみしにて
深くつゝしむべき物忌には常の居所を去て外にうつる事あるノ
葉ひろう見えて
爾雅云。楊。蒲柳也。詩義疏云。蒲柳之木二種。一種皮正青。一種皮紅正白葉皆長廣。似柳可以爲箭笴。廣志曰楊一名高皮。木葉大ニ於柳一也
さかしらに柳の
さかしらは賢だてなる心ノ。風流なるべき柳の。なまじひに賢立て。此楊の葉廣ごりにくげなるは春の面伏とノ。柳の眉といふより面と云は緣語ノ
いとゞつれ〴〵なる
前につれ〴〵なる物。所さりたる物忌とあり

のみならず利口なるさいはんとてノ
こそきけ。そとばしりて。しろき水いかけさせよともいはぬよ。しありくさまの。例をよく知て主のいひ付ぬにもよく心得てするノ。れいしり。いさゝかまうに物いはせぬこそうらやましけれ」
そおぼゆれ
やよひ是又別段ノ
三月ばかり物いみしにとてかりそめなる人の家にいきたれば。木どもなどはかゞ〳〵しからぬ中に。柳といひて例のやうになまめかしきぞ。楊ノ
るを。柳にはあらじとノ
清少のうたノ
さかしらに柳のまゆのひろごりて春のおもてをふするあらぬ物なめりといへば。かゝるもありなどいふに」
宿かな
とこそ見えしか。其比又おなじ物いみしにさやうの所にきのふたにつれ〴〵なりければノ
出たるに。二日といふひるつかたいとざつれ〴〵まさり
后宮の御方かへりたきノ
て。たゞ今もまゐりぬべき心ちするほどにしも。后宮の御文ノ
あれば。いとうれしくて見る。あさみどりの紙に。前に註后宮の宰相の

是物忌に后宮の御ぜうそくありし物がたりノ

いかにして過にし
此后宮の御歌。千載集の詞書云。一條院御時皇后宮に。清少納言始めて侍ける比。三月斗に二三日まかり出侍けるに。彼宮よりつかはされて侍けるとあり。此始て侍けるといふに心を付べし。二三日清少の侍らぬさへさびしきに。其已前は何としてくらせしぞと云

けふしもちとせの
後拾遺ニ「くるゝまほちとせを過す心ちしてまつはまことに久しかりけり」
けいせん事とは覺えぬこそ
我返歌を奉らん事とは覺えぬこそ。我ながら朦したれとの心之

雲のうへにくらし
清少のさびしきは。住所からと斗思ひ侍て。后宮の御つれ〴〵をしらで里居し侍し事よとの心也。さくまぬるべき心をふくめたる歌之。此返歌も千載集に入

こよひのほども少將にや
百夜かよへといひし女のもとへ。九十九夜ゆきて。今一夜を待あへずしてうせたりし深草の少將の世がたりにていへる詞にや。清少も早く參たき心いられに。と夜一夜を待かれてうせやし侍らんとなるべし

くらしかれけるこそ
清少を待かれて后宮のくらしかれ給ふといへるやうなるを。あまりうけばりたる事とたはふれの給之

[訂]弘云。此所のこそ の指辭。結びの辭なし。いとにくしといとにくけれの誤にや

まことにさる事や
實にさやうの遠慮も思ひわかざりしよと解しかたき結尾の語法之。誤字にやあらんと思ひしに一本には事やとあり。こはよの意のやにて事よ

[訂]事やを原本には事もに作れり。さてはいと解しかたき結尾の語法之。誤字にやあらんと思ひしに一本には事やとあり。こはよの意のやにて事よの義之。かくあらんにはよく解し得らるべければ。今改めつ

女房之
さみいとをかしくかき給へり
后宮の御うた之　清少のまゐらざりし已前は何として過せしぞと之　千載集にはくらしわぶ

いかにして過にしあとをすぐしけんくらしわづろふきのふけふかな
清少のせうそこ之　てふとあり　宰相より私のせうそこ之

とをなん。わたくしにはけふしもちとせの心ちするを。曉だにとくとあり。此君のの給はんだにをかしかるべきを。まして仰せことのいせん事とはおぼえぬこそ
宰相のせうそこ斗にてもと之　清少を待侘ること之　此夜明は　后宮の御詞之御たはぶれ之　后宮の御意のおもむきと見ゆればと之

清少の返歌之
雲のうへにくらしかねける春の日をところからともなんや
宰相への返事にはと之　御きれうと之

わたくしにはば。こよひのほども少將にやなり侍らんずらんとて。あかつきにまゐりたれば。きのふの返し。くらしかねけるこそいとにくし。いみしうそしりきとおぼせらるゝ。清少心之わび　后宮の御詞之御たはぶれ之　御きれうと之

清水にこもりたるころ。ひぐらしのいみじうなくをあはれときくに。わざと御使しての給はせたりし。からのかみのあかみたるに或本にさうにて云々草にて之
是も后宮より御ぜうそくありし物がたり之　后宮の御使之

清水にこもりたるころ。ひぐらしのいみじうなくをあはれときくに。わざと御使しての給はせたりし。からのかみのあかみたるに」
后宮より之

山ちかき入あひのかねのこゑごとにこふるこゝろのかずはしるらん
后宮の御うた之

哥よりことばにみつゞけて心得べし

ものをこよなのながるやとかゝせ給へる。御返事かく紙の式になるが紙などのなめげなりしと之　度の字族の字にかけて之　遣之

ものをこよなのながるやとかゝせ給へる。紙などのなめげならぬもとりかきてまゐらする」
御返事をなるべし

の花びらにかきとり忘れたるたびにて。むらさきなるはちすの花びらにかきてまゐらする」
是また別段之　后宮にておこなひ給ふと之

十二月二十四日。宮の御佛名のそやの御導師聞て出る人は夜なかも過ぬらんかし。里へも出。もしは忍びたる所へも夜のほど出るにもあれ。あひのりたる道の程こそをかしけれ。日ごろ降つる雪のけさはやみて風などのいたう吹つれば。たるひのいみしうしだり。つちなどこそむら〳〵くろきなれ。屋のうへはたゞおしなべてしろきに。あ
地はむらぎえしまま之　男女同車のさまおくに見ゆ　雪之

清水に　元眞集に「清水の山郭公聞つれば我古郷の壁にかはらぬ」

山ちかき入相　朗詠。おほ寺の入相の鐘の聲ごとにとよみしに少かへたる上句之。さて此哥は清水なれば山近きと之。鐘の聲々に付ても我が清少を戀る思ひの數は思ひしるらんを。つれなくも久しき長居哉と哥にふくめ給へる餘意を次の詞にあらはしてかきつゞけ給へるさまと之

こよなの　無越と書之。これにます事なき心之

はちすの花びら　散花の花びらなるべしまゐらする

[訂]是もまゐらずとあるべき所なるをかくあるは異格なれど。こは重結の格と見るべし。かやうの所も此書には三四か所あり

そやの御導師聞て
初夜のおこないすみて聽衆の退出は夜半も過る比ならんと之。江次第十一。御佛名のところに云。初夜の御導師菜大法師自亥二刻二至子一刻一

たるひのいみしうしだり
垂氷軒のつらゝのたれさがりし之

[增]しだりは和名雹之。說文云。雹は屋簷前雨流下也。音留。和名阿万之太利とあり

しづの屋もおもがくして
暁の家の見苦しきも雪にかくしたる心ㇾ。
見にくき顔などを物にておほひかくすを面隠しといふㇾ
かれなどおしへぎ　雪の月に映したるが。
銀をうすく片（へぎ）たるやうㇾ

下すだれもかけぬ
車の簾の下にすそこのきぬなどをかくるを
下すだれといふㇾ
うす色　桃美蘂葉に。薄色。たて紫ぬき白云々
こうばい　表紅梅裏蘇芳云々

山吹　冬やまぶきなるべし。桃花御説に。花山吹。冬山吹ともいふ。表は薄衍葉裏黄云々

とときみのと
和名ニ。弒クルマノトジキミ。説文云。弒車前也

月影のはしたなさに
女の面恥しくおもへるさまなり。清少のみづからいへるなるべし

やしきしづの屋もおもがくして。有明の月のくまなきに
いみしうをかし。かねなど（押片ㇾ）おしへぎたるやうなるに。すゐ（水晶の塩つらゝのさまㇾ）
しやうのくきなどいはまほしきやうにてながくみじか
く。ことさら（軒にかけたる心ㇾ）めでたきたるひに下すだれもかけぬ車のすだれをいとた
かくあげたるは。おくまでさし入たる月に。うす色（女の装束のさまㇾ）こうは
いしろきなど（紅の濃ㇾ）七八ばかり着たるうへに。こきゝぬのいと
あさやかなるつやなど。月にはえてをかしう見ゆるかた
ばら（女の後に男のゐるㇾ）に。えびぞめ（固紋ㇾ前註）のかたもんのさしぬき。白ききぬどもあ
また。山吹くれなゐなどきこぼして。なほしのいと白きひ
きときたれは。ぬぎたれられていみしうこぼれいでたり。
さしぬきのかたつかたは。とじきみのと（外ㇾ）にふみ出された
るなど。道に人のあひたらはをかしと見つべし。月影のは
したなさに。うしろざま（男の引よせて女のㇾ）へすべり入たるを。ひきよせあら

りん〳〵として氷
朗詠。八月十五夜。秦甸之一千餘里凜々氷鋪。凜々は寒貌。八月のあきらかなる影のうつれるは秦國の廣き田面にさむく冷しき氷を敷たるやうなりとㇾ

宮の内外のはし
后宮などの内證外さまのはしつかたの事などをほめ語るㇾ。其ほむるは我主君のうへにてあるを聞。又我妻などの事にて聞が嬉しきとㇾ

［訂］イ本には。宮の内とのばらとあるを。清水本には。此方をとりて。滝按。宮の内（句）とのばらの事ともなるべし。さいへり是もよろしまやうㇾ。さては弘按。宮の内の殿原の事ども女房達の互にうはさして語り合ふを各々の主君。または其女房の家主にて聞くのがかしきさの意にや

はなをあらはになすㇾ
はになされて笑ふもをかし。りん〳〵として氷りしけり
といふ詩を返すゞ〳〵ずんじておはするはいみしうをかし
うて。夜一よもありかまほしきに。いく所のちかくなるも
口をし」
是また別段ㇾ
みやづかへする人々の（里亭に出集るㇾ）出あつまりて。君々の（我主君をほめてだがひにㇾ）御事めでき
たるㇾ
こえ。宮の内（［増］イ本とのばらㇾ）のはしの事どもかたみに語り合せたるを。
おのが君々其家あるじにて聞こそをかしけれ」

家ひろくきよげにて。親族之一門の人と相住はいふにおよばずと　しんぞくばさら也。たゞうちかたら　友なふ人にせんにはと
ひなどする人には。宮づかへ人かたつかたにするゑてこそ　宮つかへの女房とあひすみたきと
あらまほしけれ。さるべき折はひと所にあつまりゐて物　何のかのといひあはするこ
がたりし、人のよみたる哥何くれとかたりあはせ。人の文　友だちにても恩ひ人にてもこ
などもてくる。もろともに見。返事かき。又むつましうく　座席なかまへてこ
る人もあるは。きよげにうちしつらひていれ。雨などふり　かの見まひたるの人のこ
てえ歸らぬもをかしうもてなし。㊀まゐらん折は其事見入　㊀
て。思はんさまにしていだしたてなどせばや。㊀よき人のお　我ながらいふこゝろこ
はします御ありさまなどいとゆかしきぞ。けしからぬ心
にやあらん」

見ならひする物

あくび。ちごども。なまけしからぬえせもの」

○うちとくまじきもの

家ひろくきよげにて
是は前段に宮づかへ人里亭に出あつまる事いひし次手に。さやうの里亭のよきを持て。宮づかへ人をあひすみかたらひて有度事をいふなり

又むつましうくろ人もあるは　彼みやづかへ人のしたしき人の見まふにはこと
まゐらん折は　彼宮仕へ人の主君の御かたへまゐる時はこ
其事見いれて思んさまにし　主君へまゐる用意の物など見あつかひて思ふやうにしてやらまほしきこと
よき人のおはします御ありさまなど　彼宮仕人の内まゐりに付て。貴人の御さまのゆかしくきかまほしき心をいふこ

あくび　よくうつる物こ
ちごども　をさなき物はよく物を見習ふ故。孟母の三たび隣をうつし、事などおもふべし
なまけしからぬえせ物　身はいやしきながら。貴人のまれをこのむものをいふこ
[訂]イ本此の次に。あしき人にいはるゝ人。さるはよしさしられたるよりはうらなくぞみゆる」の三十二字あり

さるはよしとしられたるよりは　さやうの
悪き者は。世によき人といふ人よりはうち
なく見えて。内心たのもしげなしと之

なごかりつる　和の字也。なごやかにゆる
やかなりし海上のあらく成しさま之
よろしきふかさ
大かたなる深さにてもと之
さまはかなき
檣竿のはかき心之。舟の事之

あしと人にいはるゝ人。さるはよしとしられたるよりは
うらなくぞ見ゆる」
是より舟路の事をいふ之
舟のみち。日のうらゝかなるに。海のおもてのいみしうの
どかに。蒼海のさま淺緑のきぬのうちたるをのべたるやうに見
えて。いさゝかおそろしきけしきもなきわかき女の。海をおそれざる海邊の女のさま之
めはかりきたる。句　あと頽之
ろといふ物おして。侍ひのもの丶若やかなるもろともに。
檣を押之　都の高貴の人にもと之　世に侍ひといふもの丶事之
うやんごとなき人にも見せ奉らまほしう思ひいくに。風是より
いたうふき。海のおもてのたゞあれにあしうなるに。物もう
おぼへず。とまるべき所にこぎつくるほど。舟に波のかけ
たるさまなどは。さばかりなごかりつる海とも見えずかし。おもへば舟にのりてありく人はかりゆゝしきものこ
そなけれ。よろしきふかさにてだに。さまはかなき物にの
りてこぎゆくべき物にぞあらぬや。ましてそこひもしら

ずち尋之ひろなどもあらんに。舟に荷をつみし之物いとつみいれたれば。水ぎ
はゝ只一尺ばかりだになきに。ほすどものいさゝかおそ
ろしとも思ひたらず。はしりありき。露清少などの心よりいふ之あらくもせばしづ
みやせんと思ふに。大なる松の木などの二三尺ばかりに
てまろなるを五六ぼう〳〵となげ入などするこそいみ
しけれ。貴人は屋形におはすと之やかたといふに物ぞおはす。されどおくなるはい
さゝかたのもし。はしにたてる物どもこそめくるゝ心ち
すれ。はやをつけてのどかにすげたる物早緒をつけたるくわんの事之のよわけさよ。た
えなば何にかはならん。ふとおちいりなんを。旬　其たのむはやをも
みしうふとくなどほそき心之
うのすきかけ。やかた舟之つまどかうしあげなどして。されどひとし
うおもげになどもあらず。我のりたるはきよげに。もか
り。他の舟之ことふね見やるこそいみしけれ。とはきはまことにさ
丶のはをつくりてうちちらしたるやうにぞいとよく似

やかたといふ物にぞ
篷庫。和名云舟上屋也。釋名云。舟上屋謂二之廬一言象二廬舍一也
[増]唐韻に篷庫。和名布奈夜加太とあり
はやをつけて
早緒也。舟の檣に付る縄をいふなり
たえなば何にかはならん
もし早緒きれたらば何とかせん。海におち入なんと之
もかうのすきかけ
帽額透影。イもかうのすかけ。帽額のすだれ
かけたる之。此本可用歟
されどひとしうおもげに
我舟はかの水ぎは一尺ばかりに足いりたる
舟とひとしうおもくはあらずと之

はし舟
[増]和名抄唐韻云。艇（漢語抄云。艇。乎夫稱。遊艇。波之布禰）小舟也。釋名云。一二人所乘也
弘云。今俗にはしけ舟といふ之
あとのしらなみは
朝詠「世の中を何にたとへん朝ぼらけこぎゆく舟の跡のしらなみ」拾遺集にも如此なるに。万葉集には。こぎいにし舟の跡なきがごとト有
あまのかづきしたる
和名云。泉郎。漁人。海人。潜女云々。あまの水中に入てすなどりするをかづきといふ之
こしにつきたる物
むかしは蟹の腰に綱をつけて引あげしと之
此たくなはを海にうけ
古今「思ひきやひなの別におとろへてあまのなはたきいさりせんとは」宗祇云。蟹のなはたきはたぐる心之。飛鳥井家御説に榜の字之
「難波江や蟹のたくなはたき侘て煙にしめる五月雨の比」後鳥羽院
うしろべたく
[増]弘云。こはうしろめたくと同言之。キヅカヒといふ意之。べとめとは往來言にて同義之。其例は天皇を。すめらみこと。すべらみこと。といひ。女郎花を。をみなへし。をみなめし。といふも皆同ト
取まどひくりいるい
蟹のあがらん相圖に其綱をひけば。男の急にたぐり入るさま之

たる。とまよりたる所にて。舟ごとに火ともしたるをかしう見ゆ。はし舟とつけていみしうちひさきにのりてこぎありく。つとめてなどいとあはれ也。あとのしらなみは誠にこそきえもてゆけ。よろしき人はのりてありくまじき事とこそ猶おぼゆれ。かち路も又いとおそろしかなれど。されどそれ物たえなばいかゞせんとなん。をのこだにせば。さてもありぬべきを。女はおぼろけの心ならじ。男はのりてうたなりぬべきを。女はおぼろけの心ならじ。男はのりてうたなうしろべたくばあらぬにや。蟹ものぼらんとては其なはをなんひく。取まどひくりいるゝさまぞことわりなるや。舟のはたをおさへてはなちたるいきなとこそ。まことに蟹のあがりてためいきするさまなど見ぐるしう思ひけるが。いよのくにより右衛門のぜうなるもの、。えせおやをもたりて。人の見るにおもてぶせ

小野にまかりてと有
たきゝこる事は
上句ばきのふの八講の提婆品拾ひ薪設し食の事ノ。尺尊昔國王におはせし時求法の御志深くて。阿私仙人につかへて千年のほど薪をこり水をくみつゝ終に法華經を得給へる事ノ。下句は王賀が山中に薪こりて。仙人の碁をうつを見て斧の柄の朽たる事ノ。哥の心はけふの遊びの面白きに。をのゝえ朽るまでもありたき心ノ。このうた拾遺集には下句「いさなのゝえはこゝにくたさん」とあり。斧に小町を添て云ノ
こゝもとはうちきゝに　此もとは人のうたども書たれば。聞書のやうになりたるとノ。うちきゝとは其頃の哥を集めおくをいふ由。徹書記物語に見えたり。躬垣打聞といふ書物もあるにや
業平が母の宮の　伊豆内親王の御事ノ。古今雑上云。なりひらの朝臣母のみこ。長岡に住侍ける時に。業平宮づかへすとて。時々もえまかりとぶらはず侍ければ。しはすばかりに。母のみこのもとより。とみの事とて文をもてまうできたり。あけて見れば。詞はなくてありける哥「老ぬればさらぬ別もありといへば彌見まくほしき君哉」伊勢物語にはさらぬわかれのとあり
よみにもよむかし　哥を只詞にうちよめば事の外に哥のさまおとろ物なるべし
ものをば　[增]瀧按。ものをばのをは。よにかよふをにて物よの意ノ。ばは助辭にていとかろし。下文にもあり

ふみの事そうし
御學文の物がたりにて。いつも夜ふくるがこよひもふけしノ
一二人つゝいうせて　御學問の事みゝにもいらすれぶたくして女房のすべり出てれるノ
あけ侍ぬノ　清少の夜明しと云ノ。帝のれふらせ給ふ故。もはや大納言殿もれ給へかしと思ひて申すなるべし
今さらにおほとのごもりおはしますよ　一條院れふらせ給ふを伊周公とがめ被申詞ノ。すでに夜明るに。今迄おきおはしまして今更に御寢なるべき事かはとノ
をさめがわらはの　長女也。前にあり。それが子などの童ノ

るをきゝて。又の日小野殿に人々あつまりてあそびしふ（管絃ノ　詩つく）るノ
みつくりけるに。
たきゞこる事はきのふにつきにしをけふはをのゝえこ（道綱母のうた）
ゝにくたさん（朽させんとノ）
とよみ給ひけんこそめでたけれ。こゝもとはうちきゝになりぬるなめり」（古今雑體にある事の物がたりノ）
又業平が母の宮のいよ〳〵見まくとの給へるいみしう（いせ物がたりにもかの子いたうわかうちなきてとあり）あはれにをかし。引あけて見たりけんこそ思ひやらるれ」
をかしと思ひし哥などを。さうしにかきておきたるに。げすのうちうたひたるこそ心うけれ。よみにもよむかし」（和哥は詠哥とてうたひ吟ずる物ノ　吟ぜずしてたゞ詞にいふノ）
よろしき男をはげす女などのほめて。いみしうなつかしうこそおぼすれ。（其男を心おとりしておぼゆるとノ）などいへば。やがて思ひおとされぬべし。そしらるゝは中〳〵よし。げすにほめらるゝは女だにわろし。又ほむるもいとにくし。（下すは詞にかた事ある心ノ　例の書さしたる文躰ノ）

伊周公ノ
大納言殿まゐり給ひて。（后宮禁中におはする頃伊周まゐり給へるにや）ふみの事などそうし給ふに。例の夜いたうふけぬれば。御前なる人々一二人づゝうせて。御屏風きちやうのうしろなどにみなかくれふしぬれば。（清少の獨ごちをくやむノ）ひとりふたりトヨムヘシ）たゞ清少ばかり御前にあるノ
つとそうする也。あけ侍ぬなりと獨ごつに。大納言殿今さらにおほとのごもりおはしますよとて。（伊周はれ給はんともみえぬノ）ぬべき物にもおほしたらぬを。うたて何しにさ申つらんと思へども。又人のあらバこそはまぎれもせめ。うへのおまへのはしらに（清少の獨ごちをくやむノ）外に誰もさふらはねばまぎれがたしとノ）よりかゝりてすこしねふらせ給へるを。かれ見奉り給へ。（伊周の中宮へ申詞ノ帝のれふらせ給ふをみ給へとノ）今はあけぬるに。かくおほとのごもるべき事かはと申させ給ふゆゑノ）せ給ふ。げになど宮のおまへにもわらひ申させ給ふもし（帝れふ）ぬほどに。をさめがわらはの庭鳥をとらへてもちてあす里へいかんといひてかくしおきたりけるが。いかゞしけん犬の見付ておひければ。らうのさきにげい（庭とりをつれゆかんとノ　鷄をノ　廊ノ）

きて。おそろしうなきのゝしるに。皆人おきなどしぬや。うへもうちおどろかせおはしまして。いかにありつるぞと尋させ給ふに。大納言殿の。（伊周の吟ノ）聲めい王のねぶりをおどろかすといふ詩を。たかう打出し給へるめでたうをかしきに（朗詠し給ふ心ノ）ひとりねふたかりつる目もおほきになりぬ。いみしき折（めのさむる心ノ）（折にあへ）の事かなと宮も興（けう）ぜさせ給ふ。猶かゝる事こそめでたけれ。又の日はよるのおとゞにいらせ給ひぬ。夜中ばかりにもからかきぬは屏風にうちかけていくに。月のいみしうあかくて。なほしのいとしろう見ゆるに。さしぬきのなからふみくゝまれて。（伊周の詞）（句）袖をひかへてたふるなといひてゐてらひたまへど。いかでか。猶いとをかしき物をは」

聲めい王のねぶり
朗詠云。鷄人曉唱聲驚二明王之眠一これ漏剋傳の文なれどもうたひ物なれば詩といへるにや。鷄人とは漏剋の官人ノ。前に丑四つと奏するとは有。是すなはち鷄人の曉唱心ノ。庭の鳥の帝の御眠をおどろかしたてまつるかなへる朗詠なるべし

又の日はよるのおとゞにいらせ　其あくる日のよるは。后宮帝の御寢所にいらせ給故。
清少退出する事ノ
人よべば　清少退出せんとて從者をよぶ事ノ
さしぬきのなから
指貫のすそ半分ほどふみくゝまれしノ
たふるな　清少にころぶなと事ノ
（ゆうし猶のこりの月に
朗詠曉の部に。佳人靈飾二於晨粧一。魏宮遵勳。遊子猶行二於殘月一。函谷鷄鳴。これ賈島が曉の賦の句ノ

僧都の君の御めのとのまゝと　僧都隆圓の乳母の名まゝといひし人と。ともに。清少も御匣殿の御局に在しノ。其比乳母の名をまゝとよびしにや。源氏の蓬生の宮の乳母もまゝといひしノ
［增］或説云まゝとはすべて乳母の通稱なるべし
みくしげどのゝ
［訂］万歳抄には。此の次に「とこそはきこえめその」の十字あり
むうなのやうに
寄居虫。ちひさき貝の中にやどりすむ虫也。長明方丈記にがうなはちひさき貝をこのむといへる是ノ。此男家を燒失して人の家をかり住事をいふノ

僧都の君の御めのとのまゝと。（道隆公の御むすめ一條院の御くしげとの）みくしげどのゝみつぼね（彼男の詞）にゐたれば。（ある男と）をのこある板じきのもとちかくよりきて。からい目を見さふらひつる。誰にかばうれへ申さふらはん（此うきめをたれにかたらんとの心ノ）
とてなんとなきぬばかりのけしきにていふ。何事ぞとへば。（男の詞ノ（イとの字なし）かりそめに外へゆきしとノ）あからさまに物へまかりたりしまに。きたなく侍る所のやけ侍りにしかば。（此日比他人の家をかり住とノ）日ころばがうなのやうに人の家にまりをさしいれてなんさふらふ。うまづかさのみまく（御秣ノ）さつみて侍ける家よりなん出まうで來て侍る也。只垣（かき）を（出火とノ）へだてゝ侍れば。よどのにねて侍けるわらばべもほと（出火の所に此男の家ちかかりしとノ）（夜殿これどころを云ノ）（此男の子なるべし）
〳〵やけ侍ぬべくなん。いさゝかものもとうで侍らずなどいひをる。（取出ノ少の物をとり出ざりしとノ）みくしげどのも聞給ていみしうわらひ給ふ。
（清少のうたノ）
みまくさをもやすはかりの春のひによどのさへなどのこらざるらん
とかきて是をとらせ給へとてなげやれば。わらひのゝしり　乳母のまゝにや
みまくさなもやす
此哥の彼御秣つみたる所よりといふをうけて也。夜殿を淀野に添ていふ。心は明ノ
「やかすとも草はもえなん春日野を只春の日にまかせたらなん」是らのうたの心よりよめるにや

このおはする人の家のやけたりとて
こゝにおはする女房の其方の家やきたりと
哀みて是をとらせらるゝとこ
かためもあきつかうまつりてはと
此男無筆なる事をいふこ。片目もあかでは
いかでかよみ侍らんとこ

里にいきていかにはらたゝん
彼男里に歸り行きて人に見せ聞ていかには
らだゝんとこ
などかく物ぐるほしからん
いかでかやうに物狂はしくわらふらんと又
笑ふをわらはせ給ふこ
いみしくおもへども
身のみさを親への孝など隨分と思へどもと
こ
内にもいれられず
外にはなち出されてちかくもいれられぬ
こ。桐壺卷に。をとなに成給ひてのちは。
ありしやうに御簾の内にもいれ給はずとあ
る類なるべし
まらうとにもいとをかしう
客人をもよくあしらふこ。イまらうとぬも。
とは客をあへしらふ所こ。此本しかるべき
か

りて。此おはする人の。家のやけたりとていとほしがりて
給めるとてとらせたれば。何の御たんじやくにか侍らん。
物いくらばかりにかといへば。まづよめかしといふ。いか
でか。かためもあきつかうまつらではといへば。人にも見
せよ。只いまめかせば。とみにてうへまるるぞ。さばかり
めでたき物をえては。何をか思ふとて皆わらひまどひて
のぼりぬれば。人にや見せつらん。里にいきて。いかには
らだゝんなど。御前にまるりてまゝのけいすれば。又わら
ひさわぐ。御前にも。などかくものぐるほしからんとわら
はせ給ふ」
男はめおやなくなりて。おやひとり有いみしくおもへど
も。わづらはしき北の方の出來てのちは。内にも入られず。
さうぞくなどの事はめのと。又こうへの人どもなどして
せさす。西東のたいのほどにまらうとにもいとをかしう。

屏風さうじのゑも見所ありてすまひたり。殿上のまじら
ひのほど口をしからず人々もおもひたり。うへにも御け
しきよくて。つねにめしつゝ。御あそびなどのかたきには
おぼしめしたるに。猶つねに物なけかしう。世の中心にあ
はぬこゝちして。すき〳〵しき心ぞかたはなるまであるも
べき。上達部の又なきにもてかしづかれたるいもうとひ
とりあるはかりにぞ。思ふ事をもうちかたらひなぐさめ
所なりける」
定澄僧都にうちきなし。すいせひ君にあこめなしといひ
けん人もこそをかしけれ」

おもひだにかゝらぬ山のさせも草たれかいふきのさと
はつけしぞ」

此男のいもうと。ある上達部の歴々なるに
かしづかれて北方なりしこ
定澄僧都に
此詞前の詞に連續せず。義も通ずがたし落
丁などあるにや。諸本かくのごとし。追て
可レ勘。先前とは別段ならん
[訂]弘按。此定證云々一段は。イ本に上の四
段のことゝくなるものと云段の末に入た
りの。是をよしとすべし。然れども又なほ誤字
もあるにやと思へば今本のまゝにさし置つ
まことにや下野にくたるといひけるこ　清少
下野國へ下るといふ說あるは誠かと問人に
讀遣すこ。イ高野さあるは。かきあやまりに
や。イまことやがて下るこ云々
[訂]弘按。此一段も誤あるべし。萬歲抄には。
下のあふさかはの歌の次に。まことや云々
と此一段を添へたり。然して下野にの三字
なくてやがてはの四字あり
おもひだにかゝらぬ　此清少の哥。上句は下野へ下る事思ひもかけぬとの
へたり。清少納言集に「こゝながらほどふるだにもある物をいとゝほちの
上達部の又なきに
此男のいもうと。ある上達部の歴々なるに
かしづかれて北方なりしこ
定澄僧都に
此詞前の詞に連續せず。義も通ずがたし落
丁などあるにや。諸本かくのごとし。追て
可レ勘。先前とは別段ならん
[訂]弘按。此定證云々一段は。イ本に上の四
段のことゝくなるものと云段の末に入た
りの。是をよしとすべし。然れども又なほ誤字
もあるにやと思へば今本のまゝにさし置つ
まことにや下野にくたるといひける　清少
下野國へ下るといふ說あるは誠かと問人に
讀遣すこ。イ高野さあるは。かきあやまりに
や。イまことやがて下るこ云々
[訂]弘按。此一段も誤あるべし。萬歲抄には。
下のあふさかはの歌の次に。まことや云々
と此一段を添へたり。然して下野にの三字
なくてやがてはの四字あり
おもひだにかゝらぬ　此清少の哥。上句は下野へ下る事思ひもかけぬとの
へたり。清少納言集に「こゝながらほどふるだにもある物をいとゝほちの

にそへて。思ひだにかゝらぬといへり。伊吹は美濃近江の堺なるにはあらず。下野國なりと能因が坤元錄に出たるよし袖中抄に見ゆ。此哥も誰かいふといひかけて。下野の伊吹の里さしも草ある所なれば。よせてよめるにや。「かくさだにえやはいぶきのさしも草同秀句ノ

百四十九段

おなじ宮人をかたらふ　彼女房とおなじ禁裡后宮などの宮仕への女房に。遠江守の子が二心なりしノ

親などもかけて　是よりかのある女房の友達にかたらふ詞ノ。彼男の二心を恨けれど。さる事なしとあらがひて。父の遠江守をも誓言にいれたりしとノ

いかゞいふべきといふを聞て　かやうに男はあらがふをいかがいはんと彼女房の云ノ

ちかへきみとほつあふみの　清少かの女房にかはりてよめる哥ノ。上句は親をかけて誓ける事をうけて。遠江守を神にそへてよめり。下句は夢にだに見ずといひしをうけて。無下に一向端つかたをも見ざりしが。神かけてちかへしとノ。濱名橋。遠江の名所なれば。端といひかけてよめり。神かけても橋の緣語か

びんなき所にて　さあるまじき所にて人に逢ノ　男の詞ノ

むねのいみしうはしり　をこの胸さわぎしノ。古今「人にあはんつきのなきよは思ひおきてむねはしり火に心やけをり」

あふさかはむれのみ　逢坂を逢にそへて。走井の水を見付るといひ懸たり。逢時は見付る人やあらんと常に胸さわくとノ

女のうはぎは　[訂]原本には此段なし。然して原本は此邊誤り多きやうなれば。今悉く萬歳抄によりて改めつ

ある女房の遠江守（とほたふみのかみ）の子なる人をかたらひてあるが。おなじ宮人をかたらふときゝて恨（うら）みければ。親などもかけてちかへきみとほつあふみのかみかけてむけにはまなしきそらごと也。夢にだに見ずとなん（かの宮人をかたらふは空言と男のあらがふ詞なり）其事を清少のきゝてノ

いふ。いかゞいふべきといふときゝて。

ちかへきみとほつあふみのかみかけてはし見ざりきや」

ちかはせ給ふ。

びんなき所にて人に物をいひけるに。むねのいみしうはしりける。

清少哥

あふさかはむねのみつねにはしりゐのみつくる人やあらんとおもへば」

前ニ註

女のうはぎは　さくら。紅梅。すべてうすいろ。えびぞめ。もえぎ。

百五十段

うすいろ　薄紫。海紅等なり。又たて紫。ぬき白きをもうす色といへり

からぎぬは　唐衣ノ。女官裝束の時上に着るものノ

あかいろ　胡曹抄に云。赤色櫨と茜にて染るノ。又赤色たて紫。ぬき赤きあるは織物なるべし

もはは　[增]裳ノ。女官裝束の時着用するものノ

おほうみ　源氏玉かづらに。海賦のおり物とあり。大海に海松貝也。此類の裳なるべし

しびら　夕顔卷に。しびらだつ物かごと斗ひきかけとあり。うは裳の事と云々。[增]裳とて裳の一やうと見えたり

百五十一段

かざみは　汗衫。童女の裝束ノ前ニ註

夏はふたある。秋はかれ野」　枯野のいろノ

百五十二段

かざみ　夏は青くちば　桃華の御說。表青丹の黑みあり。裏は青

百五十三段

もえぎにかしはおりたる　萌木に柏葉をうは紋におりつけたるノ

見さめこよなし　こよなく見さめするノ

百五十四段

あふひ　葵也

かたばみ　酢漿。和名にあり。イニ此下にあられぢとあり

[訂]萬歳抄にも。かたばみの次にあられぢとあり

かたつかたのゆだけきたる

百五十五段

此以下の文意聊心得がたし。若し中古此時代に襲の衣服などに片方の行長ゆたかにたち着る事ありしにや。論語云。襲裘長短二右袂一これはかはごろもながらかたつかたの例にてはあらんかし

[訂]万歳抄此所の「夏うすもの」かたつかたの云々」の註云。暑氣の比肩をぬく云。上古はおからざりしかども。中古にはあまた重れた時は片肩ぬくと云まぜてきるべき物には

かた〳〵ゆたかなると又よのつれなるとを交へてきるべきにあらずと云

左右のゆだけ

[增]ゆきの長きをいふ云。万歳抄云。脫たれず左右のゆきそろひたるをいふ云

かたつかたおもくぞあらん

長き方へひかれてきにや

[訂]原本かたばかまとあり。今イ本によりて改めつ

弾正にて

イ弾正弼にて。職員令云。弾正弼一人掌ㇾ巡二察内外一糺ゆ弾非違上。延喜式云。凡京中弼以下毎月巡察勘二弾非違一東西市并諸寺非違。及客舘。路橋碓磑之類也云々。弾正はたゞすつかさにて。諸法度違背の罪をたゞす官なれば。人愛すくなき物なり。形よき君達には似あはずとの心なるべし

宮の中將　勘物云。源頼定。一品式部卿寫平親王二男。母左大臣高明公女。長徳四年十月廿二日任二右中將一。元弾正大弼。公卿補任云。正暦三年八月廿八日弾正大弼。式部卿の宮の御子なれば宮中將といふなるべし

むれもの〳〵け　胸痛と霊氣と云。イ本むれれど。あるはかさねきたればひかれてきにくし。わたなどあつきはむねなどもきれていと見ぐるし。まぜてきるべき物にあらず。猶むかしよりさまよくきたるこそよけれ。左右のゆだけなるはよし。それも猶女ばうのさうぞくにてはところせかめり。をとこのあまたかさぬるも。かたつかたおもくぞあらんかし。きよらなるさうぞくのおろこりて所狹からんと

ものなど。いまはみなさこうあめれ。いまやうに又さまよき人のきたまはんいとびんなき物ぞかし。かたちよき君達の弾正にておはするいと見ぐるし。宮の中將などの口をしかりしかな」

やまひは

和名脚氣名二蹶病一

むね。物のけ。あしのけ。たゞそこはかとなく物くはぬ。十八九ばかりの人のかみいとうるはしくてたけばかりすそふさやかなるが。いとよくこえていみしう色しろう。かはれど。あるはかさねきたればひかれてきにくし。わたなどあつきはむねなどもきれていと見ぐるし。猶むかしよりさまよくきたるこそよけれ。猶女ばうのさうぞくにてはところせかめり。をとこのあまたかさぬるも。かたつかたおもくぞあらんかし。きよらなるさうぞくのおほかたつかたおもくぞあらんかし。いまはみなさこうあめれ。いまやうに又さまよき人のきたまはんいとびんなき物ぞかし。かたちよき君達の弾正にておはするいと見ぐるし。宮の中將などの口をしかりしかな」

やまひは

和名脚氣名二蹶病一

むね。物のけ。あしのけ。たゞそこはかとなく物くはぬ。十八九ばかりの人のかみいとうるはしくてたけばかりすそふさやかなるが。いとよくこえていみしう色しろう。かはのけとばり有て物のけとはなし

あいぎやうづきよしと見ゆるが。齒をいたむ

ばをいみしくやみまどひて。ひたひがみもおとゝになきぬらし。かみのみだれかゝるもしらず。おもてあかくてをさへゐたるこそをかしけれ」

是よりむれやむ人のさまと

八月ばかりしろきひとへ。なよらかなるはかまよきほどにて。しをんのきぬのいとあざやかなるを引かけて。むね

見まひに來るこ

いみしうやめは。友だちの女房たちなどかはる〳〵きつゝ。いとゝほしきわざかな。例もかくやなやみ給ふなどしとおもひなげき。人しれぬ中などは。ましてあめる事なしびにとふ人もあり。心かけたる人はまことにいみ

又其女房の忍びをとこと

よるにもちかくもえよらずおもひなげきたるこそをかしけれ」

是より物のけなやむ人のさまと

いとうるはしくながきかみを引ゆひて。物つくとておき

靈氣來るこおごろきおきしこと

あがりたるけしきもいと心ぐるしくらうたげなり。うへ

あまた見きて　見えきたりしと
經き〳〵などするもかくれなきに　讀經の僧の座とは物へだて〳〵聽聞すれども。女中とは隱れなくしろければ。僧の目をやるさまと

心づきなきもの

[增]俗にキニクハヌコヂヤなどいふに同じ。思ひやりのなき意と。中卷の六卷五十九段にあれど誤なると既にいへり

[訂]万歲抄には此段なし。弘按。万の編者は。既に上に(六の卷に)心づきなきもの〳〵一段ある故に除きしなるべけれど。なか〳〵に誤と。却て此所にあるをよしとす。此ことは上に演按に委しくいへるが如し

我をばおぼさず何がしこそたゝいまの人つかふ者の陰言に。我を主君のおもひ給はで其人こそ出頭なれなどいふをき〳〵付し心と

おしはかりごとうちし　女を二心ありなど其男のおしはかり恨ると

我かしこげなる　女にあらがはせぬやうにかしこげに物いふと

かゝる人にしもとおぼゆる　かく心あしきめのとにしもやしなはれたる子よとおぼゆるゆゑにや其子の心づきなきとふくめたる詞と

あまたあるが中に　數多御子ある中に。此御子を親たちのおもひおとしてにくみ給ふと。はらあしくめのとのいふさまと

にもきこしめして。御どきやう(新藏の僧と)の雨。つかふ人の我をはおぼせ。とふらひ人(女房と)どももあまた見きて。經ききなどするもかくれなきに。めをくばりつゝよみゐたるこそつみやうら(僧の女中に心をつくればと)んとおぼゆれ」

心づきなきもの

物へゆき寺へもまうづる日の雨。つかふ人の我をはおぼさず。何がしこそたゞ今の人などいふをほのきゝたる。人よりは猶すこしにくし(おもはぬ男と)とおもふ人の。おしはかり事うちし。すゞろなる物うらみし。我かしこげなる(前には我かしこかるべきとあり)。心あしきひと(いめ)のとのやしなひたる子。さるはそれがつみにもあらねど。かゝる人にしもとおぼゆるゆゑにやあらん。(旬是より下のめのとの詞と)あまたあるが中に。此きみをば思ひおとし給ひてや。にくまれ給ふよなめのとのこゝろあしきをしらぬにやあらん。(めのとをと)ちごぱ思ひもしらぬにやあらん。(めのとをと)もどかにいふ。ちごぱ思ひもしらぬにやあらん。(めのとをと)もどかしう心つきなきなめり。おとなになりても思ひうしろみもてさわぐほどに。中〳〵なる事こそおぼかれ。我をいひよるをわびしくにくき人におもふ人の。はしたなくいへど。そひつきてねんころがる。いさゝか心あしなどいへば。つのがれ詞に女のいふと)くはする人もにくきと)ねよりもちかく(女をいたはるさまと)ふして。物くはせいとほしがり。其事となくに思ひたるに。まつはれついせうし。とりもちてまどふ。みやづかへ人のもとにきなどする男の。そこにて物くふこそいとわろけれ。(心づきなき心と)くはする人もいとにくし。思ぱん人のまづなど心ざしありていはんを。いみたるやうに口をふたぎてかほを

くれはしをのぼりこうと
階階。長谷にあり。前にも出たり。登困。のぼりつかれたる心と
[増]上の六巻の末にも初瀬詣の條ありてそこにもくれはしを昇降するにおそろしきさまあり。見合すべし。上には此所よりも委しくあり

よろしき人はせいしわづらひぬかし
やごとなきをいふまでにはあらぬ清少ほどの人はかの下すどもの前に有とても制しがたしと之
そこともすこし
足下也。其方遙少しのけと宿坊のいふほどこそとばしはのけど之

ついでのまゝに
次第をたがへずとの心と

けしきこそなけげに心づきなき心と
ないがしろなれ。京よりはろ〳〵と思ひ立てまうでたるに。川の音などのおそろしきに。くれはしをのぼりこうじていつしかと佛の御かほををがみ奉らんとつぼねにいそぎ入たるに。みの虫のやうなるもの〳〵。あやしきさまきたるか。いとにくきたちゐぬかづきたるは。押倒之おしたふしつべきこと〳〵ちこそすれ。いとやんごとなき人のつぼねはかりこそまへばら物もありと之初瀬にて宿坊を万事たのみ居ればかくいふぬかし。たのもし人の師をよびていはすれば。そこどもすこしされなどいふほどにこそあれ。宿坊のあゆみのきては又もとのやうにないがしろなるとじやうになりぬ」

いひにくきもの
人のせうそこ仰せ事などのおほかるを。ついでのまゝにはじめよりおくまでいといひにくし。返事又申にくし。はづかしき人の物おこせたるかへりこと。おとなになり

思はずなる事聞付
成長の子のよからぬすき事するを聞つけてまへにては 直面には親の異見をもいひにくしと之
四位五位は冬六位は夏 四位は黒。五位は緋の袍。冬に相應なるとと之。六位は綠彩夏に似合しきと之
とのゐすがたなども
禁中に直宿する程の衣服も。男女につけて其品々こそ吟味あらまほしけれと之
家のきみにてあるにも
一家の主にても其品々の衣服の吟味ありたきな。誰かはさまで吟味し定るぞと之
それたに物見知たる
一家の内にてだに。其衣服の品の吟味なきは他所の使者などの物見知たるは。さかく批判し沙汰すべきと之
ましてまとらひする人は
一家の内にてだにあるに。ましておほやけのまとらひする人の衣服の吟味なきはこよなく口をしと之
れこのつちにおりたるやうにて
此詞ぞ文なるべし。或本に此詞の下に前にたのもしき物といふ所にある「人のかほにとりわきてよしと見ゆる所はといふより。まもらるゝこそ侘しけれ」といふまで六七行かけり。亦衍文なるべし
[増]弘按。こはいとをかしなどいふ詞を省けるこ。意は猫の地におりたるは甚品なくて見すぼらしきものなれど。四位五位の人にても。衣服の粗なるは品格なくて。猫の地たる子の思はずなる事きゝつけたる。まへにてはいといひにくし」
是亦別段と之
四位五位は冬。六位は夏。とのゐすがたなども。しなこそ男も女もあらまほしき事なめれ。家の君にてあるにも。誰かはよしあしをさだむる。それだに物見知たる使ひ人ゆきて。おのづからいふべかめり。ましてまとらひする人は
此詞前後につゞかず衍文にや
いとこよなし。ねこのつちにおりたるやうにて。たくみの東の對めきたる屋と之物くふこそいとあやしけれ。新殿をたてゝ。東のたいたちたる屋をつくるとて。たくみどもゐなみて物くふを。東おもてに出ゐて見れば。まづもてくるやおうきと。汁物と之江次第にしる物と世にさいといりてみなのみて。かはらけはついするつゝ。つぎにあはせ
膳の飯はくはぬかと思へばやがて皆くひてをみなくひつれば。おものはふようなめりと見るほどに。
此詞前後につゞかず衍文にやふものこうつほ物がたりにもしもの御あはせもあり
やがてこそうせにしか。二三人ゐたりしものみなさせしかば。たくみのさるなめりと思ふや。あなもたいなのことゝ

におりたるが如くをかしとなるべし

中の君とかや
大君中君三君の類か。あれと三女との中の心ㇾ。イ何の君は名のしれぬゆゑにいふなるべし
君達にはあらねど
君達とは攝家などの御子息をいふㇾ。さやうの歴々の御子ならねどゝㇾ

猶ゆきやらぬさまも
名殘を思ふ故。猶行やらぬ心ばへをも女にいひしらせんと男の思ふにとㇾ
有明の月のありつゝも
拾遺戀三「長月の有明の月の有つゝも君しきまさは我戀めやも」
かしらにもよりこず五寸ばかりさがりて
さがりては避ㇾ。所をきりたる心ㇾ。月影の女のかしらのあたりまではさしいらで。五寸ばかりこなたまでさしたるさま也。イ本もや」
たゞの雜談ㇾ
物がたりをもせよ。
ぬ人のかたはらよりまきらはすㇾ
らへうちして。ことㇾ人どものいひまぎらはす人いとにくし」
ある所に中の君とかやいひける人のもとに。君達にはあらねども。其心いたくすきたるものにいはれ。心はせなどある人の。九月ばかりにいきて。有明の月のいみしうてりておもしろきに。名殘おもひ出られんとことのはをつくしていへるに。今はいぬらんと遠く見おくるほどに。えもいはずえんなるほど也。出るやうに見せてたちかへり。たてしどみあいたる陰のかたにそひ立て。猶ゆきやらぬさまもいひしらせんと思ふに。有明の月のありつゝもとうちいひてさしのぞきたるかみのかしらにもよりこす。五寸ばかりさがりて。火とももしたるやうなる月のひかり。も

さしのぞきたるかしこより。五寸ばかりをさりて。火ともしたるやうなるとあり尤可
用かな
まゐりまかでする
參上し退出するㇾ
心よそひをたるかほにかりに給はらんと用意せしと心よげにいひて車をかしおこせしㇾ
例のうしよりも下さまにくたしにくめるさまなのこどもなどのㇾ
牛をいたくいひかりたる車の車副の男ㇾ
猶主の心おしはかられ
猶の字心をつくべし。心よそひたるなど心よげにはいひおこせたれども猶不請なりしならんと其主の心しられたりとㇾ
とみの事なりと又いひふれんともおぼえず
急用にも又と車かる事いはんとは思はずとㇾ
なりさほのあそん
氏姓不レ知。但高階業遠にや。皇統より七代の孫。敏忠の子ㇾ
ならはせたりしが
〔訂〕こは哉ㇾと註にありてかなの意のかㇾといへれど。上にその指辭ありては語格さゝのひ難し。按ずるにその上にこの字の落たるなるべし
我が從者してうたせ
業遠の從者にいひつけて。彼の女車の牛を打退せて引あけさせたるとㇾ。心よき人なるべし

てあかきかとおもふにもよほされてとの心ㇾ
よぼされて。おどろかさるゝ心ちしけれは。やをらたちいでにけりとこそかたりしか」
其男清少にかたるにや
是より又車などかす人の心ばへなり
女房のまゐりまかで
用意のこゝろㇾ
よそひしたるかほにうちいひてかしたるに。うしかひわ牛をにくみいふㇾ
らはの例のうしよりもしもさまにうちいひて。いたうはしりうつ。あなうたてとおぼゆかし。をのこどもなどの不請げなるさまㇾ
物むつかしげなるけしきにて。いかでよふけぬさきにおほせんと思ふに。有明の月のありつゝもとうちいひてさしのぞきたるかみのかしらにもよりこす。五寸ばかりさがりて避ㇾ。所をきりたる心ㇾ。月影の女のかしらのあたりまではさしいらで。五寸ばかりこなたまでさしたるさま也。イ本
牛おひてㇾ
ひてかへりなんとことのはをつくしていへるに。今はいぬらんと遠く見おくるほどに。えもいはずえんなるほど也。出るやうに見せてたちかへり。たてしどみあいたる陰のかたにそひ立て。猶ゆきやらぬさまもいひしらせんと思ふに。有明の月のありつゝもとうちいひてさしのぞきたるかみのかしらにもよりこす。五寸ばかりさがりて。火ともしたるやうなる月のひかり。もの雜談ㇾ
物がたりをもせよ。
ぬ人のかたはらよりまきらはすㇾ
らへうちして。ことㇾ人どものいひまぎらはす人いとにくし」
ある所に中の君とかやいひける人のもとに。君達にはあらねども。其心いたくすきたるものにいはれ。心はせなどある人の。九月ばかりにいきて。有明の月のいみしうてりておもしろきに。名殘おもひ出られんとことのはをつくしていへるに。今はいぬらんと遠く見おくるほどに。えもいはずえんなるほど也。出るやうに見せてたちかへり。たてしどみあいたる陰のかたにそひ立て。猶ゆきやらぬさまもいひしらせんと思ふに。有明の月のありつゝもとうちいひてさしのぞきたるかみのかしらにもよりこす。五寸ばかりさがりて。火ともしたるやうなる月のひかり。も

見えたり」
好宮にて本妻をさだめぬ男の物がたりノ
すきゞ〳〵しくて獨ずみする人の。よるはいづらにありつらん。曉にかへりて。やがておきたる。まだねふたげなるけしきなれど。すゞりとりよせすみこまやかにおしすりて。ことなしびにまかせてなどハあらず。心とゞめてかく。
うちひろごりとりつくろはぬノ
まひろげすがたをかしう見ゆ。まろききぬどものうへに山吹くれなゐなどをぞきたる。まろきひとへのいたくまほみたるをうちまもりつゝ。文をノかきたて丶。前なる人にもとらせず。わざとだちてこどねりわらぱのつきづき未きを身ちかくよびよせて。彼文をこらすることてさいめくノ　小舎人の文もてゆきしあさまでノ
くながめて。經のさるべき所々などまのびやかに口すさびにまろたり。おくのかたに御てうづかゆなどしてそゝ
きこしめせなどゝ云ノ　手水めせ粥
のかせば。あゆみ入て。ふづくろにおしかゝりて文をぞみる。おもしろかりける所々はうちずんしたるもいとをか

なほしばかりうちきて
直衣には下にきぬをかさねるノ。きぬをかさねざるを直衣ばかりといふにや。一說指貫を略して直衣はかりきたるとノ。源氏帚木にて初の說を用ふ
けしきばめば　使の小舎人かへりたるさまを口にはいひもやらでこほづくりなどして其けしきを見するノ
なほしもうへのきぬもかりきぬも　直衣にても袍にても狩衣にてもの心ノ。かさねて着るにはあらず
目をそらにて
供の男たて文をとりもちて。馬上の主に捧るさまノ。主を見るとて目を空にするノ
いとにくげなからぬが
[訂]万歳抄には「いときよげなるが」とあり。
然れども本のまゝにても聞ゆべし

しろきひとへのいたくしほみたるを　心に物をおもひつゞ花などうちまもるさまノ
[增]瀕按。女のもとより衣をかりて來たりしをかへすならんか
久しくながめて
物をおもひいりたるさまなり
經のさるべき所々　こゝもとの文脉すべて奇妙ノ
ことなしびにまかせてなどはあらず
何のいふべき事もなきにまかせてざつとかくにはあらで。心とゞめてかくとノ

なほしもうへのきぬもかりきぬも　直衣にても袍にても狩衣にてもの心ノ。かさねて着るにはあらず
目をそらにて
供の男たて文をとりもちて。馬上の主に捧るさまノ。主を見るとて目を空にするノ
いとにくげなからぬが
[訂]万歳抄には「いときよげなるが」とあり。
然れども本のまゝにても聞ゆべし

直衣には下にきぬをかさねるノ。きぬをかさねざるを直衣ばかりといふにや。一說指貫を略して直衣はかりきたるとノ。源氏帚木にて初の說を用ふ
けしきばめば　使の小舎人かへりたるさまを口にはいひもやらでこほづくりなどして其けしきを見するノ

せんとゆだちに　前に註す。こゝは靈氣の祟によむこと見ゆ。即千手陀羅尼經の中に。若家内に大惡病にあひ。百怪競ひ起り。鬼神邪魔其家を耗亂するにも。千眼大悲の像の前に其壇を設けて。至心に觀世音菩薩を念ト此陀羅尼を誦ト。其千遍に滿たば惡事悉消滅せんとあり

し。手あらひてなほしばかりうちきて。古人の語緣ノ禪緣などにや
むこと見ゆ。まことにいとたふときほどに。ちかき所なるべし。あ
其けしきを見するノ　小舎人をやりし所近きにや早くかへりて
りつる使うちけしきばめば。ふとよみさすノ　ろくたよみさすノ
是より次別ノ
きよげなるわかき人の。なほしもうへのきぬもかりぎぬ
もいとよくて。きぬがちに袖ぐちあつく見えたるが。馬にのりていくまゝに。ともなるをのこたて文を目をそらにてとりたるこそをかしけれ」
是より別ノ
前の木だち高ノたかう庭ひろき家の。東南のかうしどもあけわたしたれば。夏のさまノ涼しげにすきて見ゆるに。もやに四尺の几帳立て前に圓座ノわらうだをおきて三十餘ばかりの僧のいとにくげならぬが。うすずみの衣。うす物のけさなどいとあさやかにうちさうそきて。香染の地の扇ノかうぞめの扇うちつかひ。せんじゆだらにいたうなやめば　イいたうなやめばよみゐたり。もの丶けにいたうなやむ人にや。

ほそうにほやかなるとこ
　細くつやめきたる獨鈷をよりましにもたせて云々

をゝと目うちひさきて
　をゝは聲をいらゝげたるさま云。目うちひさきは目うちひつさきて云。尻目ににらみ見るさま云。次皆と詩にも作れり

[訂]万歳抄に目をふさぎて云々とあり。ひとふと相通ずればさもありぬべし
　又一本には此句なくてうちゐがみてとありおこなふまゝにしたがひ給へる護法も彼僧の加持しおこなふにしたがひて佛驗を見せ給へる心云。護法は加持の驗をいふ云。前にも有。イニおこなふにしたがひて調ぜらるゝ佛の御心ばへを見るにもいとたふと云々

[訂]万歳抄。又一本には護法もげにの四字なくて「ほとけの御心もいと」とあり

例の心ならばいかにはづかしとまどはん
　よりましの童女現心ならば人々あつまりし中にては。此ありさまはぢまどはんと云

みづからはくるしからぬ事としりながら
　加持によりましの調ぜられ苦しむは。靈の苦むにて其よりましの童女のみづからの上ならずとは知りながら云

わかき人々は心もとなし
　驗さはいへど猶心もとなさに。急きゝて見るさま云。陪膳などの若き女房云

きちやうのうちにとこそ
　帳内と思ひしにかやうに人々の中を漾ましく思云

かみなふりかけて
　おもてをはぢて。ひたひ髪にておほひかくしたる云

かぢすこしして
　加持。加は佛の三密也。持は行者の三業彼三密を此三業に持たるを云云

時のほどにもなり侍ぬべければ
　例時のおこなひすべきほどになりしと云

ほうちはふたう　未考茶飯などをいへる詞にや

[訂]イ本には。此の「ほうちほうたうまゐらせん」の十二字なし。なきをよしとすべし

[増]岩崎美隆云。ほうちハほそちの誤か。然らば熟瓜也。谷川士清云。はふたうハ小豆を以て饅飩を煮るものゝさいへり。橘經亮云。ばうぞうとは今の雑煮餅のこと。烹雑

うつすべき人とておほきやかなるわらはの。かみなどうるはしき。すゞしのひとへあざやかなるはかまながくなしてゐさり出て。よこさまにたてたる三尺の几帳のへにゐたれば。とざまにひねりむきて。いとほそうにはやかなるとこをとらせて。をゝと目うちひさきてよむだらにもいとたふとし。けそうの女房あまたゐて。つどひまもるへたり。久まくもあらでふるひ出ぬれば。もとの心ぼそくなくなふまゝにしたがひ給へる護法もげにたる。ほそ冠者ともなどのうしろにゐて。うちぱするも有。みなたふとがりてあつまりたるも例の心ならばいかにはづかしとまどはん。みづからはくるしからぬ事とまどりながら。いみしうわびなけきたるさまの心ぐるしさを。つき人のしり人などはらうたくおぼえて。几ちやうのもとちかくゐて。きぬひきつくろひ

などするほどに。よろしとて御ゆなど北おもてにとりつぐほどを。わかき人々は心もとなし。ばんも引さげながらいそいでくるや。ひとへなどきよげに。すいろのもなどゝむるをいみしういそげば。所につけたる上らふとおぼしき人。すのもとにゐさり出て。いとうれしくたちよらせ給へりつるまゝに。いとたへがたく思給へられつ

とかけり。美按ㇾ。尺素往來ㇾ砂糖饅頭餅籠饅飩などあるポウタウ(餅籠)ぉこれかいさまのひま　かされことばなり。めづらなるにや。伊勢物語に。まめに實要にてとある類ㇾ

たゆませ給はざらんなんよく侍べき　油斷した給はぬが可然からんとㇾ

佛のあらはれたまへるとこそおぼゆれ

[訂]イ本には是より次の「きよげなるわらはの」とあるへつゞけたり

ひげおひたれどおもはずにかみうるはしき　髮はありながら。思ひの外に髮うつくしきㇾ

いとなげにて　僧のいとまなさうに時に用られしさまㇾ

こゝかしこにやんごとなきおぼえある　驗者にても學匠にても方々に出頭ㇾ

法師もあらまほしき

法師は聖といひながら時にあふはよしとㇾ

[訂]こゝの詞「あらまほしげなるわざなれ」をイ本には「あらまほしげなるわざなれ」とあり。いづれにても同意ㇾ

きぬのせぬひ　背縫ㇾ

のけくびしたる人　のけえりに着たるㇾ

るを。只いまおこたるやうに侍れば。返す〳〵よろこびきこえさする。あすも御いとまのひまには物せさせ給へなどいひつゝ。いとまうねき御ものゝけに侍めるをたゆませ給はざらむなんよく侍べき。よろしく物せさせ給ふなるをなん悦び申侍ると。詞ずくなにて出るは。いとたふときに。佛のあらはれたまへるとこそおぼゆれ

きよげなるわらはのかみながき。またおほきやかなるがひげおひたれど。おもはずにかみうるはしき。又したゝかにむくつけゞなるなどおほくて。いとなげにてこゝかしこにやんごとなきおぼえあるこそ。法師もあらまほしきわざなめれ。おやなどいかにうれしからんとこそおぼゆるなれ」

見ぐるしきもの

きぬのせぬひかたよせてきたる人。又のけくびしたる人。

れいならぬ人のまへに

煩ふ人を見まふもの、をさなき子をつれゆきしㇾ。病人のほとりにも幼童は遠慮なくさわがしき事あればなるべし

[增]源云。尋常よりすぐれて貴き人のまへわたりに小兒をつれ出るなるべし

法師は陰陽師のかみかうふりしてはらへしたる

法師ながら陰陽師にて祓などする物ㇾ。道滿法師など其類なるべし。宇治拾遺六。內記上人寂心。播磨の國にて。法師陰陽師の紙冠を着て祓するを。何しに紙冠をきしぞと問はれければ。祓戸の神達は法師を忌給へば祓の程暫く着て侍るといふに。上人紙冠を取て引破りて佛弟子と成ながら。祓戸の神達にくみ給ふとても。如來の忌玉ふ事を破りてまばしも無間地獄の業をばする事よしなしと制したる事あり

かたみに見かはしたらん　イニふくいとくろき男の白はりきたるとあり。ふくいとはふくろりとㇾ。源氏夕顏卷にもある詞ㇾ　生絹のひとへは。膚のすきとほりてよく見ゆるゆゑ。のしひとへより見ぐるしきにやと前を立かへりこゝわろき詞ㇾ

物くらうなりて云々

[增]源云。是より以下跋文なるべし

下すだれきたなげなる上達部の御くるま。れいならぬ人のまへに子をゐていきたる。はかまきたるわらはのあしだはきたる。それはいまやうの物のいそぎてあゆみたる。法師。陰陽師のかみかうふりてはらへしたる。又色くろうやせにくげなる女のかつらきたる。ひげがちにやせ〳〵なる男とひるねしたる。何ら

見にくき男のひるあらはに見るがの見るかひにふしたるにかあらん。よるなどいかたちもなべてさる事となりにたれば。我にくげなる物のいそぎてあゆみたる。法師。陰陽師のかみかうふりてはらへしたる。又色くろうやせにくげなる女のかつらきたる。ひげがちにやせ〳〵なる男とひるねしたる。何ら

女房の急ぎ歩むをいましむるㇾ　清少の女心よりいひたる詞ㇾ

妹背の習ひなればㇾ　衣をつほねりしㇾ前ニ註

男をさしていふㇾ

さやうの見にくき男はひろまでれ見ぐるしきㇾ

ものすきとほりてよく見ゆるゆゑ。のしひとへより見ぐるしきにやと前を立かへりこゝわろき詞ㇾ

物くらうなりて云々

[增]源云。是より以下跋文なるべし

筆もつかひはてゝ　是をかき。筆をもつくして早く此草紙を書はてんとこと

人やは見んずると思ひて

人の見るべき物ならばこそ遠慮もせめ。人やは見んと思へば里に居て徒然の慰みに書しとこと

きようかくし　すきといさゝかよく隠密ぜしに思ひの外に世にもれしとこと

[訂]万歳抄。此の「きようかくしたりと思ふを」の下に「左中将經房卿の見付てしひてとりあげ給へれば」の廿一字あり

なみだせきあへずこそ

「枕より又しる人もなき戀をなみだせきあへずもしつる哉」古今

宮の御まへに云々

[増]弘云。是より此草紙をかきしわけをいへるなれば。此の句の上にサテ此草紙チカキシワケハと云一句を添て解すべし。然らばよく心得らるべし

内のおとゞの奉り給へり

内大臣伊周公。后宮へ料紙を進ぜられしとこと

史記といふ文　前漢の司馬遷。三皇五帝より漢武帝までの事を書しとこと

さはえよとて給はせ

さあらば清少にえさするぞと后宮の御詞とこと

猶えり出て哥などをも

今此さうしに書出たる外に。猶もよく撰て哥などをも何をも書て。物めかしくもつくりたらばこそとこと

思ふほどよりはわろし心見えなり　物めかしく書たらばかへりて清少の書し物なればこゝろにくしと思ひしに。思ひし程にはなくとも。清少の心のたけ見えたりなどこそあざけられめとこと

人なみ〳〵なるべき耳をもきくべき物かは

世の翫び物の中にいれられて。人なみなる物といふほどの事を聞べき物かはと思ひくたしたればとの心とこと。耳をきくとは目を見るといふにおなじ。たとへば繪しきめを見るといふやうに。人なみ〳〵なるみゝをきくべき物かはと書けり所清少の筆頭の玄妙なるべし

いとあやしくぞあるや　かくおもひくたしたる草紙を。見る人はづかしなどいへば。あやしく心得がたきとこと。やゝ助字とこと

げにそれもことわり　彼耻かしといふ人に對して尤との心とこと。いかにとなれば清少のやうに世にひがみて。其好悪人にたがへる物ハ。其心中のふこしまなる事おしはかられて物むつかしき物なれば。』かへりて恥かしといへるも道理ぞとこと

たゞ人に見えけんぞねたきや　かやうに我が心中までおしはかられさまん〳〵沙汰せらるゝも。此草紙の世人に見えたる故なれば。只人に見えひさし出し物ぼ。このさうしのりて出にけり。まごひとりいれしがご。やがめたる也とぞとあり。又奥書に云。源經房朝臣。西宮左大臣の三男。母は九條殿第五女俊賢卿の同母弟。伊勢守。長徳元年事也。此草紙長保元二年の事多。書加歟云々。此本ニ左中将といへるは。此經房の事とこと。此人清少の里亭におはしたるに。さし出たる疊にのりて。此草紙の出たるたゞ人に見えけんぞねたきや

かやうに我が心中までおしはかられさまん〳〵沙汰せらるゝも。此草紙の世人に見えたる故なれば。只人に見えひさし出し物ぼ。このさうしのりて出にけり。まごひとりいれしがご。やがめたる也とぞとあり。又奥書に云。源經房朝臣。西宮左大臣の三男。母は九條殿第五女俊賢卿の同母弟。伊勢守。長徳元年事也。此草紙長保元二年の事多。書加歟云々。此本ニ左中将といへるは。此經房の事とこと。此人清少の里亭におはしたるに。さし出たる疊にのりて。此草紙の出たるたゞ人に見えけんぞねたきや

ろまりたるがねたきとこと。或本に此をはりの詞の跡に「左中将まだいせのかみときこえし時。里におはしたりしに。はしのかたなりけるたゝみさし出し物ぼ。このさうしのりて出にけり。まごひとりいれしがご。やがめたる也とぞとあり。又奥書に云。源經房朝臣。西宮左大臣の三男。母は九條殿第五女俊賢卿の同母弟。伊勢守。長徳元年事也。此草紙長保元二年の事多。書加歟云々。此本ニ左中将といへるは。此經房の事とこと。此人清少の里亭におはしたるに。さし出たる疊にのりて。此草紙の出たるたゞ人に見えけんぞねたきや

かやうに我が心中までおしはかられさまん〳〵沙汰せらるゝも。此草紙の世人に見えたる故なれば。只人に見えひさし出し物ぼ。このさうしのりて出にけり。まごひとりいれしがご。やがめたる也とぞとあり。又奥書に云。源經房朝臣。西宮左大臣の三男。母は九條殿第五女俊賢卿の同母弟。伊勢守。長徳元年事也。此草紙長保元二年の事多。書加歟云々。此本ニ左中将といへるは。此經房の事とこと。此人清少の里亭におはしたるに。さし出たる疊にのりて。此草紙の出たるたゞ人に見えけんぞねたきや

ろまりたるがねたきとこと。或本に此をはりの詞の跡に「左中将まだいせのかみときこえし時。里におはしたりしに。はしのかたなりけるたゝみさし出し物ぼ。このさうしのりて出にけり。まごひとりいれしがご。やがめたる也とぞとあり。又奥書に云。源經房朝臣。西宮左大臣の三男。母は九條殿第五女俊賢卿の同母弟。伊勢守。長徳元年事也。此草紙長保元二年の事多。書加歟云々。此本ニ左中将といへるは。此經房の事とこと。此人清少の里亭におはしたるに。さし出たる疊にのりて。此草紙の出たるたゞ人に見えけんぞねたきや

かやうに我が心中までおしはかられさまん〳〵沙汰せらるゝも。此草紙の世人に見えたる故なれば。只人に見えひさし出し物ぼ。このさうしのりて出にけり。まごひとりいれしがご。やがめたる也とぞとあり。又奥書に云。源經房朝臣。西宮左大臣の三男。母は九條殿第五女俊賢卿の同母弟。伊勢守。長徳元年事也。此草紙長保元二年の事多。書加歟云々。此本ニ左中将といへるは。此經房の事とこと。此人清少の里亭におはしたるに。さし出たる疊にのりて。此草紙の出たるたゞ人に見えけんぞねたきや

ろまりたるがねたきとこと。或本に此をはりの詞の跡に「左中将まだいせのかみときこえし時。里におはしたりしに。はしのかたなりけるたゝみさし出し物ぼ。このさうしのりて出にけり。まごひとりいれしがご。やがめたる也とぞとあり。又奥書に云。源經房朝臣。西宮左大臣の三男。母は九條殿第五女俊賢卿の同母弟。伊勢守。長徳元年事也。此草紙長保元二年の事多。書加歟云々。此本ニ左中将といへるは。此經房の事とこと。此人清少の里亭におはしたるに。さし出たる疊にのりて。此草紙の出たるたゞ人に見えけんぞねたきや

下　卷　終

清少納言枕草子者中古之遺風和語之俊烈也并美於紫女源氏物語尤當閱翫之者也然未有選其義按其部考其辭者惜乎蓋有之未見之予自蚤歲好讀無斁志爲訓釋故平日覽古集每有意會則引事題書就思傍訊槩宣意義遂手自出寫以成十二卷以春曙抄爲名猶有疑而闕如之者惟夥更待後之博洽不强鑿說焉今也治隆俗美風雅盛起幸過此時命工彫梓廣流傳于市井也庶幾便和哥之人倣其詞花効其風流云爾

延寶二年甲寅七月十七日　北村季吟書

清少納言枕草紙裝束撮要抄目錄

櫻の直衣（ナホシ）の事　附同し下襲狩衣細長等の事
二藍（フタアヰ）の事
香（カウ）のうすものゝ事
卯の花の衣の事　附柳の衣の事
二三位の袍をむらかしの葉にて染る事
六位藏人青色の事　附青白橡（ツルバミ）麹塵山鳩色魚陵の號又黃櫨染の御袍の事
蒲萄（エビ）染の事
あはびむすひの事

皆練火色（カイネリ）の事

ひのさうぞくの事　附とのゐさうぞくの事

古今冠異なる事

細長汗衫（カザミ）からきぬうへの衣大口はかま指貫の事

はこえの事

革帯の事　附布袴褶雪（アコメ）の比半靴（ハウクワ）をはく事

裙帯領巾（クタイヒレ）の事

けいしぐつの事

［増］清涼殿の云々
此段一卷に見えたり

清少納言枕草紙裝束撮要抄

○清涼殿の丑とらのすみといへる段

かうらんのもとに青き瓶（カメ）の大なるすゑて。櫻のいみしくおもしろきえだの五尺ばかりなるを。いとおほくさしたれば。かうらんのもとまでこぼれ咲たるよ。畫つかた大納言殿櫻のなほしすこしなよらかなるに。こき紫の指ぬきしろき御ぞどもの。うへにこきあやのいとあざやかなるいだしてまゐりたまへり

義按。櫻の直衣ハ。表白裏蒲萄（エビ）なるものなれば。紫のさしぬき白き御ぞといひつゞけらる。これにて表うらのいろおのづからあらはれたり。それ蒲萄はむらさき色なる物なればなり

又一說に。表白裏赤花ともみえたり。さくらは直衣にかぎるべからず。下襲にも狩衣又は細長にももちふるい

弘云。六卷にさくらの御なほし云々。又十卷にもさくらのなほしにくれなゐの御ぞみつばかり云々など見えたり

ろなり

○すぎにし方こひしきものといへる段

二ある。えびぞめなど

義按。一二あるは赤花及青花をもて染とみえたり。それ赤花とは赤藍(アカアヰ)也。青花ハ青藍ともいふ。此故に二あるといふなるべし。或人曰赤藍は紅藍(クレナアヰ)也。是和訓くれなゐとよめるは吳藍(クレノアヰ)のめぐれる訓なりといへり。そめやうひせちありと

○小しらかばといふ所は小一條の大將どのの御家ぞといへる段

香のうすもの。ふたあゐのなほし。おなじさしぬきこきすかしといへる詞なれば。爰にとれり。卯の花の衣は表白裏青かるが故に青色のうへに白きを着給ひて

義按。香のうすものは夏のきぬなるべし。それ香いろはし

玉葉承元四年二月十四日癸酉晴入レ夜仲基入道來談二古事一知足院殿仰着二直衣一以二丁子二染たる香帷著レ之

[増]すぎにし方云々此段二巻にあり

或人曰。ノアの反ナり。但くれなゐといふときは反のとによらず約語なり

[増]小しらかは云々此殿二巻にあり

下摺(シタガキ)薄紅にして黄をまぜて織よし。三條裝束抄に見えたり。又或人曰香色は香のたきしみたる色によりたる名也。上の段心ときめきする物といへる所に。化粧(けさう)して香にしみたる衣きたるといふがとし。只香色とて黄あかく染たるは心ゆかぬ事なりといへり。又こき蘇芳の御袴とは指貫の下袴なるべし

○木の花はといへる段

まつりのかへさに。紫野のわたり近きあやしの家ども。おどろなるかきねなどにいとしろう咲たるこそをかしけれ。青いろのうへにしろきひとへかさねかづきたる。あをくちばなどにかよひていとをかし

義按。此段卯のはなの衣にかよへる詞なれば。爰にとれり。卯の花の衣は表白裏青かるが故に青色のうへに白き單かさね。といひつゞけらる。下の段見る物はとい

[増]木の花は云々此段三巻にあり

へる所に。所の衆の青いろしらかさねをけしきばかりひきかけたるは卯のはなの垣根ちかうおぼえて郭公も陰にかくれぬべうおぼゆ。といへるに同じ心なり。又表白裏青なるを柳の衣ともいひて。十一月より正二月まで是をもちふ。但柳のきぬの時は柳を織物にし。卯のはなの時ばうの花を織物にして。その品をわかつと或抄にみえたり

○木はといへる段

まらかしなどいふもの。ましてみやま木の中にもいとけどほくて。三位二位のうへのきぬそむるをりばかりぞ葉をだにひとの見るめる

義按。衣服令に一位深紫衣。三位以上淺紫衣と見えたり。然るを後世作り紫になせるがゆゑにまらかしの葉をせんじて。それにてそめ其上をふしかねにて染るにや。これ古制のあらたまりぬるころのかんがへにもならんかしとしるせり

○めでたきものといへる段

六位の藏人こそなほめでたけれ。いみしき君達なれども。えしもき給はぬあや織物を心にまかせてきたる青いろすがたなどいとめでたき

義按。青いろは青白の橡（ツルバミ）といへる略名にして。もと麴塵（キクヂン）の別名也。それ麴塵の名は禮記の月令の注に書たり。又延喜縫殿寮式に青白の橡（ツルバミ）と載られたるこれ也。又山鳩色魚陵（或本ギロリヤ）などいへるも此きぬの事也。或人曰魚陵（ギロリヤ）とは天皇の御料といへるこゝろなるべし。志かるをぎよれうと名目すべきがために魚陵の字を用ふるにや。只魚陵といひて心ゆかぬ儀也。名目につきて文字をかふる事例あり。畢竟山鳩色魚陵などいへるは古き俗の名目な

【増】木は云々
此段三巻にあり

【増】めでたきもの云々
此段五巻にあり

依二名目一替文字之類
熟絹綾。延喜織部司式裝束調抄縮綵綾（綵霰）とある是なり。清で可レ讀ためなり
熟紙。延喜式部省式後世宿紙と書ス上と同心

るべしと。又餝抄に麴塵黃櫨染同物のやうに載られたる甚あやまり也。ひとゝせ野宮卿と恐ながら是を論じて。後二條關白記。江次第。雲圖抄等已下をもて一物にあらざる事を申あきらめし。是あまねく人のしれる所也。彼卿も我も盛なりしころなれば。つのりてよしなき事を論じ。已不興となりたる事ぞくやしき。夫黃櫨染は弘仁以來。天子の正服として　上皇といへども着御の例なし。故に　天皇の服御に位色とある是也。抑麴塵は　天皇褻の御袍なるか故に極薇これを申下して常に着用あり。こゝをもて心にまかせてきたる青いろすがたなどゝいへり。但　主上着御の日には着せずと侍中群要に見えたり。異なるはれには極薇にかぎらず第二の藏人已下雜しきまでも給りて着用の例あり。又　上皇皇太子ハもとより親王公卿侍臣六位已上。野の行幸の時な

[増]はかせの云々
此段五巻にあり

弘云。二巻にふたあゐえびそめなどのさいでのおしへされて。四巻にえびそめのこきさしぬき。十一巻にえびそめのおりものゝなほし云々など見えたり

べて着用古例多しと

○はかせのざえあるはいとめでたしといへる段

一の人の御ありき春日まうで。えび染の織もの。すべて紫なるはなにもゝ〳〵めでたくこそあれ。はなもいとゝもかみも。むらさきの花の中にはかきつばたぞすこしにくき。いろはめでたし。

義按。衣服令義解云。蒲萄者紫色之最淺者也とみえたり。又織蒲萄は經赤緯紫なり。故に紫なる品々よりかきつばたまでいひつゞけらる。これら又前段にあげたる青いろのうへにしろきひとへ。かさね。かづきたるなどいへるは。奇妙の文勢どもなり。又下襲にて表裏かけてえびぞめといへるは。表すはう裏花田なるをいへり。或えびぞめのさしぬき。或裏えび染。又えびぞめの織物などゝ一色にていへるとわかちしるべし

○小忌のきんだちは外にゐるてものいひなどするといへ
る段
小兵衛といふが。あかひものとけたるを。是をむすばゞや
といへば。さねかたの中將よりてつくろふにたゞならず。
あし引の山藍ノ心の
いかなるひものとくるなるらん
といひかく。清少納言小兵衛にかはりて
うすごほりあはにむすべる紐なれば
かざす日蔭ノ心日影にゆるぶばかりを
義按。それあかひものとけたるを。小忌の右の手もとにつくるもの
なり。延喜式儀式大嘗會曰小齋親王以下皆青摺袍五位以上紅
垂紐淺深相副とみえたり。然るを後世蘇芳の濃薄をになむす
びにして用ひたり。又清少納言が返しにあはにむすべ
るとはゆるびても又とけぬといふこゝろにいへり。其

伊勢物語云。むかし心にもあらでたえたる人のもとに。玉の緒をあはをによりてむすべればたえての後もあはんとぞおもふ」

[増]小忌のきんだち云々
此段五巻にあり

[増]ほそだちの云々
此段五巻にあり

弘云。七巻にかいねりの下がさねなどみたれあひて云々」と見えたり

政事要略。衛門府風俗哥云
多。多良女乃花乃加以禰利好牟夜。滅紫色
好牟夜。

あはゝ淡也。桃華藥葉に。杉の横目の扇のごとたる糸の
あまりをあはびむすびにしてといへる事あり。これら
にも通ひていとおもしろし。其たよりにもならんかし
○細太刀の平緒つけてきよげなるをのこのもてわた
るもいとなまめかしといへる段
行事の藏人のかいねりがさね。ものよりことにきよらに
見ゆ
義按。掻練。後稱念院關白裝束抄曰。掻練下襲。火色下襲。
各別物也。共爲赤色之間人存同物之由歟。是不可然
云云。同抄曰。助無智秘抄曰。火のいろの下重ばかいねり
とかばりたるものなり。火の色とは裏おもてともに打
ものにて。中重を入たる也。かいねりとは只うらは紅の
ばりたるにて中重ノ火色の中重は紅梅を入よし簡抄にみゆ
なかへなき也と見えたり
○志げいしや春宮にまゐり給ふ程の事などいへる段

[増]志げいしや云々
此段六巻にあり

せばきえんに、所せきひの御さうぞくの下がさねなどひきちらされたり

義按。ひのさうそくとは。束帯の事也。宿衣直衣に對して晝の裝束といへるにや。むかしは御ゆるしなくて。宿衣直衣にては。主上の御まへ〳〵出仕し侍らざる事也。宿直とは衣冠の事也。直衣はとのゐさうぞくとて晴にはあらざる也。ひのさうぞくの事まち〳〵說あれども。すでに下がさねなどひきちらされたりとあれば。たゞしく束帶とはきこえたり

○わびしけに見ゆる物といへる段

雨のいたくふる日。ちひさき馬にのりて前駈したる人の。かうふりもひしげ袍も下がさねもひとつになりたるいかにわびしからん

義按。いかに雨ふりたりとも。今の世のかうふりならば

[増]わびしけに云々
此段六卷にあり

弘云。九卷に齋院のえんがにて。ひのさうぞくうるはしくて。又十一卷ひのさうぞくくれなゐのひとへ云々」などあり

ひしぐまじ。いにしへと今のとなるをおもらしめんとこ〳〵にあげたり

○頭辨の御もとよりとて。主殿司(トノモツカサ)ゐなどやうなる物を。まろきまきしにつゝみてといへる段

きぬなどにすゞろなる名どもつけけんいとあやし。きぬの名にはそながはさもいひつべし。なぞかさみはしりながといへかし。をのわらはのきるやうになぞからきぬはみじかきぬとこそいはめ。されどそれはもろこしの人のきるものなればうへのきぬのはかま。さいふべし。下がさねもよし。又おほくちながさよりくちひろければ。はかまもいとあぢきなし。さしぬきもなぞ。あしきぬ。もしはさやうの物はあしぶくろ。などもいへかし

義按。細長は。かりぎぬの。くびかみのやうにたてゝ三はたばりの物也といへり。こゝをもて細長はさもいひ

[増]頭辨の御もとゝ云々
此段七卷にあり

つべしといへるなるべし。さくらの細長なでしこの細ながなどゝ或記にみえたり。又かざみ。下の段かざみはといへる所に。春はつゝじ櫻。夏は青くちば。朽葉といひ。上の段作物所の別當する比といへる所の中に。櫻のかざみ。萠黄こうばいなどいみしくかざみながくしりひきてといへり。こゝをもてかざ見ハしりながといふかしといふなるべし。新葉集。兼昌が哥に。もろ人のあそぶなる哉少女子がかざみのすそのながき世ぞかし」とみえたり。雅すけ装束抄に。着用の次第より裁縫までくはしくしるせり。又からぎぬ。下の段からぎぬはといふ所に。あかぎぬえびぞめもえぎさくらすべてうすいろの類とみえたり。禁秘御抄に。上﨟不レ謂二是非一二三位典侍號(ナイシンスケス)二上﨟(トヲ)一着二赤青色(ノヲ)一候(スル)御陪膳(ニ)也と見えたるも是也。雅すけ装束抄曰。上﨟の女房のいろをゆるといふは。青

いろ赤いろのおりものゝからぎぬ地ずりの裳を着るなりといへり。此事紫式部の日記にも委しくみえたり。されど此書のためにはいさゝか心ありて源氏によりたる注釋までも用ひ侍らざる也。和名抄に背子としるして和名からきぬと訓じ。形如二半臂一無二腰襴一之袷衣なりと見えたり。こゝをもてなぞから衣はみじかききぬとこそいはめといへる成べし。又うへの衣。和名抄に袍。和名うへのきぬ。一朝服とみえたり。又下がさねもよしとは。名目にたがひなくうへのきぬの下がさねなればなり。下の段したがさねはといへる所に。冬はつゝじかいねりがさねすはうがさね。なつはふたあるしらがさねとみえたり。又大口ながさよりくち廣ければとは。いにしへは裁縫今にことなるもしらねど。もし小口の袴に對して大くちといふにや。其こくちの袴は。主上御鞠あ

そはすとき着御のよし。大槐秘抄に見えたり。又袴いとあぢきなしとは。神代巻に投二其褌一これを開噛神といへる下心にてあぢきなしといへるにや。又さしぬきあしぎぬ足ぶくろなどいへかしとは。狂言綺語一興有文章也。和名抄には奴袴とまるしてさしぬきと和訓せり。雑令に官戸奴婢三歳以上毎年給二衣服一條に。冬布襖袴と見えたり。是などによりおこれるにや。西宮記に。古時有制臣下不用。近代五位以上及昇殿六位皆用之とみえたり。其古時有制とはもと奴の袴なるゆゑにや。蓋後世織物綾平絹等をもて裁縫し。若壮より老耆に至るまで深淺色をわかちたり。

上皇親王よりはじめ奉り。攝清諸家にいたりて地文織やうの品〳〵。裝束諸抄にくはしくまるし給ひ。已に一の制となれり。しかれは今さらいふべき事聊もなし。但

此書の下の段さしぬきはといへる所にむらさきのこきうすき。夏は二藍いとあつき比夏むしの色したるも涼しげ也とみえたり。又まさすけ裝束抄に。夏のさしぬき二藍るり色うすいろ織あさぎしをんいろと見えたり。夏むしのいろしたるとハるりいろをいふにや

○うらやましきものといへる段

女のつぼさうぞくなどにはあらでたゝ引はこえたる義按。引はこえたるとは。ひきあげたる也。男の束帯するにうしろの三角の所をはこえといへり其かんがへにもならんかしと爰にあげたり

○雪たかう降てといへる段

五位も四位も色うるはしう若やかなるが。上のきぬの色いときよらにて。かはのおびのかたつきたるをとのゐすがたにひきはこえて。むらさきのさしぬきも雪にはえて

【増】うちやましきと云々
此段八巻にあり

弘云。十巻かはのおびのかたつきたるなどのゐすがたにひきはこえて」と見えたり

【増】雪たかう云々
此段十巻にあり

深
こさまさりたるをきて。あこめの紅ならずおどろ〳〵し
き山ぶきを出して。からかさをさしたるに。風のいたく吹
てよこさまに雪を吹かくれば。すこしかたぶきてあゆみ
くる。ふかぐつはうくわなどのきはまでゆきのいと白く
かゝりこそをかしけれ

義按。かはの帯のかたつきたるとは。有文の帯と聞えた
り。和名抄曰。唐衣服令云。革帯玉鉤注云。令按革帯以其
所附金玉石角等爲名。有白玉帯。隱文帯。馬腦帯。波斯
馬腦帯。紀伊石帯。出雲石帯。越石帯。斑犀帯。烏犀帯。散
豆帯等。其體有純方丸鞆櫛上等之名。革帯是其惣名也。と
見えたり。又とのゐすがたにひきはこえて。むらさきの
さしぬきとは。是布袴といふなるべし。雅すけ装束抄に。
ほうこの事きぬさしぬきうるはしくきて。其うへにし
たがさねきて。うへのきぬにしりつくりて。おびさして。

さくをもつなりとみえたり。又あこめの紅ならずおど
ろ〳〵しき山吹を出してとは。是紅のふるびて黄いろ
に見ゆるをいへるにや。下の段ひとへはといへる所に。
色黄はみたるひとへなどきたるは心づきなし。といへ
るに同じ。又寶物集に。「紅の戀の涙のいかなればはては
くちはと成ぞかなしき」と右大辨親宗のよめる心也。其
あこめとは。赤染の略訓なるべし。正式は紅なるが故な
り。こゝをもて或もえぎ。或薄色なるは染あこめといへ
り。あこめの字。延喜式には單の禒袷禒とみえたり。其
外装束諸抄。多は袹の字をもちひ。或は袒の字を用ひら
る。文字のこゝろによれば。延喜式可ならんか。猶たづ
ぬべし。又ふかぐつはうくわなどのきはまで雪のいと
白くかゝりたるとあれば。半靴も雪のときはくにや。騎
馬のときならでは用ひざるやうにおぼえたり。依てこ

和名抄曰。金隱起帯唐庫藏令云。左右金吾
大將軍各一人紫褌襦金隱起帯
後二條關白記。寛治七年三月廿日丁酉。霜
降晴卯時。裝束辰剋參二六條院。予櫛笥二下
重紺地平緒螺鈿釵鑿物隱文帯云々

弘云。六巻に。ふかくつはうくわなどはきて廊のほどなどくつずり入るは」ともあり

ゝにあげたり

○御經のとにあすわたらせおはしまさんとていへる段

采女八人馬にのせてひき出めり。青すそごの裳。くたいひれの事所々に見えたり。五巻なまめかしき物の條。六巻つくも所の別當はの條。九巻みろ物はの條などに見えたり。ふぜんといふうねめはくすしきけまさがしる人なり。えびぞめのおりもの。さしぬきさしぬきをきれば。しげ正は色ゆるされにけると云々義按。裙帶は肩にかけ。領巾は項の餝のよし。或記にみえたり。今の世にはありともきゝおよばぬなり。又女の婦も馬にのれる事は是馬にのれば也。いにしへは掌侍命婦をたはふれていへるにや

裙帶。北山抄。女禮服上裳。其裙帶紫綠半合如三帳紐一。兩端縫レ形。不レ用レ簪用レ蓁。是位驗也。義按。衣服令云二紕帶一是也乎。領巾。延喜縫殿寮式。中宮春季繪云。領巾四條料紗三尺六寸。條別九尺

○上の段まつりの比はといへる中に

けいしぐつ。などのをすげさせ。うらをさせなどもてさわぎ

義按。けいしぐつとは。履子とかけり。和名抄沓の部。山槐記等にもみえたり。これは淺ぬりのあしだをいふにや。古き賀茂まつりの圖にも見えたり。枝あふぎといへる段に。高きけいしをさへはきたれば。といへるもこれにてよくきこえたり。異邦のおこりは。晉文公臣介之推が事にはじまれり。此一段は。上の段の文なれば。發端にもかくべきを。予がなせる趣向は衣服の事にて筆をとゞめて。其餘のとは畧しけるに。或人此儀分明ならざるよしにてたづねられしを。又こゝにしるせるのみ

[増]御經のとに云々
此段十一巻にあり

弘云。くたいひれの事所々に見えたり。五巻なまめかしき物の條。六巻つくも所の別當はの條。九巻みろ物はの條などに見えたり

[増]まつりの頃は云々
此段一巻にあり

弘云。けいしとくつとは二物の名なること上の一巻に註しおきたり

清少納言枕草紙裝束抄一卷は壺井先生兼て先達注し置るゝ諸抄に漏れたる事のみを拾ひて古記文に考へ二三子のために著述せらるゝ所なり然るに上坂兼勝予に就て剞劂に命せん事を請予も亦同志に示すの幸を好して聊校合を加へ新に寫しめ上坂氏の望に任する事志かり

享保己酉歲初夏

門人　多田義俊書

明治二十六年七月　四　日印刷
明治二十六年七月十三日發行

訂正增補者
著者故人北村季吟相續人北村元部理代人

版權所有

（定價金三十錢）

發行者　東京市小石川區竹早町十三番地　鈴木弘恭
印刷者　東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地　吉川半七（電話千九十五番）
印刷所　東京市小石川區大門町二十五番地
發行所　（青山堂本店）東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目廿三番地　青山清吉（電話千二百六番）
印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
印刷所　東京市小石川區傳通院前大門町廿五番地　秀英舍工場（電話十九番）
發行所　東京市神田區通新石町二十一番地　青山堂本店
發行所　青山堂支店

◎清少納言枕草紙裝束抄要抄
青山堂藏版

關西大賣捌所　大阪市南區心齋橋南一丁目　松村九兵衛

各府縣賣捌所

大阪久寶寺町　前川善兵衛
同　備後町　吉岡平助
同　備後町　梅原龜七
同北久太郎町　柳原喜兵衛
京都寺町通　若林書店
同　新町通　便利堂
同　三條通　大谷書店
同　寺町通　梅原支店
熊本新二丁目　長崎二郎
神戸相生橋東　熊谷久榮堂
佐賀白山町　河内壯助
飛驒高山　桝屋重兵衞
岐阜米屋町　三浦源助
愛知名古屋本町　川瀨代助
同　同　片野東四郎
靜岡新通一丁目　勝見儀助
石川金澤南町　池善平

關東大賣捌所　東京京橋區南傳馬町一丁目　吉川半七
同日本橋區本材木町二丁目　林平次郎

新潟新潟市　林富吉
同　長岡　目黒十郎
長野善光寺前　西澤喜太郎
同　小諸　小山佐傳治
山梨甲府八日町　五明堂
群馬前橋本町　煥乎堂
宮城仙臺國分町　金港堂
岩手盛岡中橋通　便益堂
山形八日町　五十嵐太右衛門
秋田大町　本間金之助
北海道函館　魁文社
福島福島町　萱間左右太
栃木宇都宮町　正々堂
茨城水戸上市泉町　川又銀藏
同　古河町　高木文正堂
千葉佐原　朝野利兵衞
同　東金　多田屋書店

東京書林　青山清吉藏版

○高等尋常中學校師範學校及女學校國史國文教科書并參考書

●文部省撿定濟
○佐伯有義校正標註
○三木五百枝校正
●標注神皇正統記　半紙美本合本全一册　〔第五版〕
定價金三十五錢　郵稅金四錢

●文部省撿定濟
○小中村清矩校閱
○中村秋香編輯
●日用文鑑　木版半紙美本上下全二册　〔第二版〕
上卷下卷　定價金二十錢　郵稅各四錢ヅヽ

○新井白石著
○小中村清矩校閱
○鈴木弘恭校正
●校正折たく柴の記　木版半紙美本上中下全三册　〔第六版〕
上卷　定價金二十錢
中卷　定價金二十五錢
下卷　定價金二十五錢
郵稅各四錢ヅヽ

○新井白石著
○內藤耻叟標注
●標注折たく柴の記　洋裝美本合本全一册　〔第五版〕
定價金四十錢　郵稅金八錢

○黒川眞頼校閱
○鈴木弘恭著
●新撰日本文學史略　洋裝美本全一册　〔第二版〕
定價金四十錢　郵稅金八錢

○加藤高文著
●增補標注古事記讀本　附錄神名署解　洋裝美本合本全一册
定價金三十五錢　郵稅金八錢

○黒川眞頼校閱
○鈴木弘恭訂正
●訂正增補枕草紙春曙抄　附裝束抄　半紙美本合本全三册
上卷　定價金三十錢
中卷　定價金三十錢
下卷　定價金三十錢
郵稅各四錢ヅヽ

發行所　東京市小石川區傳通院前大門町　青山堂本店
同　市神田區通新石町二十一番地　青山堂支店

鈴木弘恭先生訂正增補

北村季吟翁抄

訂正增補枕草子春曙抄

東京書林　青山清吉藏版

東京小石川大門前青山清吉屋金兌記